ポイズンガール

藍沢　砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポイズンガール

【Ｎコード】
Ｎ２０２８Ｙ

【作者名】
藍沢　砂糖

【あらすじ】
「お父さんは私が責任を持って、殺してあげるからね」
理科準備室を掃除していた夏川奈々瀬は薬品棚の奥から古いプリント用紙を見つけた。それはお互いの食べ物に仕掛けをしあうサバイバルゲームの進行表だった。興味本位で友人達とゲームを始めた奈々瀬だったが、ゲームは異常な程に加速してゆく。
正義の味方、笹中悟はちょっとしたきっかけで人を殺してしまった。正義の味方から殺人犯に転落した悟は自らの正義を守るために力いっぱい逃げ出した。たとえ誰に悪者だと罵られても、自分は正

義の味方でい続けなければならない。悟の逃亡生活が始まる。
そして奈々瀬と悟の運命は交差する。

非日常の扉

―選択を間違えれば、分かってるよね。

遮光カーテンを閉め切った薄暗い理科準備室に、揺るぎのないはっきりとした声が響かずに充満した。密閉された狭い部屋の空気は凝っていて息苦しい。

放課後の校舎は昼間の賑わいが嘘だったかのように静かだった。まだ部活や補習で残っている生徒が沢山いる筈だが、この密室には一切の音が入ってこない。まるでこの校舎には、いやこの世界にはここにいる五人以外消えてしまったのではないかという程の静まりようだった。

ここは別世界だ。

蒸し暑さと息苦しさに加えて薬品特有の鼻を衝く臭いまであり、偏頭痛を引き起こすにはこれ以上ない条件の環境だった。

実験用の水道付きの大きな机に置かれた二つのビーカーには黒い液体がなみなみと注がれている。その前の丸椅子に着いた夏川奈々瀬（ななせ）は、ぷつぷつと細かい泡が浮き上がってくるそのどす黒い液体を無表情に見ていた。

声は再び聞こえる。

「見たって分からないよ。どっちも同じ色」

薄い口唇をおもむろに舌で湿らせた奈々瀬は声のする方に刃物のような鋭い視線を向ける。机の向かい側には、薄笑いを浮かべながら長い髪を指先で弄ぶ篠原紗季（しのはらさき）が頬杖をついて奈々瀬を舐めるように見ていた。

紗季は更に続ける。

「選択を間違えれば…」

死ぬよ。

そう結んで愉快そうに目を細める紗季。

立合人である他の三人も心配そうに、あるいは何かに期待しなが

ら奈々瀬と紗季を交互に眺めている。何も答えずに大きく息を吐いた奈々瀬は、制服のブラウスのボタンを一つ外して襟元を摘まんで扇ぐ。

暑い。奈々瀬の耳の裏側から垂れた汗の滴が首筋をつうと伝い、露わになった彼女の白い胸元を濡らす。

そして奈々瀬が初めて声を発した。

「ズルはしてないんだよね。誓える？」

当たり前じゃないの、と吐息混じりに答えた紗季は机の上に両肘をついて手を組み合わせた。祈りを捧げているように組んだ両手の奥から二つの瞳が奈々瀬を真っ直ぐに捕らえている。奈々瀬からは彼女の口元は見えないが恐らく、笑っているのだろう。

どちらかと言えば紗季の事は嫌いではない。

しかし彼女がこのように時折見せる薄笑いと実験動物を観察するかのような無機質な視線だけはどうしても好きにはなれなかった。

紗季は口元を隠したまま言う。

「ビーカーに入っているのは正真正銘どこにでも売ってる普通のコーラ。ただし、片方はハズレだけどね。それは奈々瀬も解ってるでしょ」

語尾を釣り上げて首を傾げる紗季。

「選択権は奈々瀬にあるんだから、どちらでも好きな方を飲みなよ。私はいくらでも待ってあげても良いんだけどね、他の皆が退屈しちゃうじゃない」

組んでいた手を解いて口元を露わにする紗季。やはり彼女は、笑っていた。紗季は胸まである長い髪を人差し指に絡ませて遊んでいる。

奈々瀬も同じように小さく笑った。

「そうだよね。紗季は勝負事でズルするような馬鹿じゃないもんね。確率は二分の一で条件は私も紗季も同じ。片方は普通のコーラでもう片方は…」

「毒入りだよ」

紗季は奈々瀬の言葉に被せてぎょろりと目を見開いた。
彼女は胸ポケットから茶色い小瓶をゆっくりと取り出して奈々瀬に見せつけるように軽く振る。赤く濁った液体が瓶の中でちゃぷちゃぷと踊った。
奈々瀬は全く動じず無表情のままだったが、周りで見ている立会人の誰かがごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。
奈々瀬と紗季は互いに視線を外す事なく見詰め合っている。
毒を用意してきたのは紗季だが、どちらかのビーカーに毒を混ぜたのは立会人の一人、ビーカーをシャッフルしたのは別の立会人、その二つのビーカーを机の上に置いたのもまた別の立会人。
つまり、この場にいる五人ともどちらが毒入りかは判らない。
「どうしたの、奈々瀬。もしかして…ビビっちゃった？」
なんなら私が代わりに飲んであげても良いんだよ、と紗季は挑発してくる。彼女はいつもこうして精神的に揺さぶりを掛ける。この余裕の表情から発せられるプレッシャーに押し潰されて判断を誤った者が今まで何人いた事か。
一見動じていないような奈々瀬も内心では追い詰められている。紗季の冷たい瞳は「早く飲め、早く毒を飲んでのた打ち回れ」と急かしてくる。それでも奈々瀬はその瞳から視線を外さない。
目を逸らしたらプレッシャーに負けたという事だ。精神的な負い目を感じてしまう、そうなってしまえば紗季の思うつぼだ。
奈々瀬の顎先から汗が一滴落ちる。
それは机の上に零れ、ひたりと小さな音を立てた。
「あら、暑いかな？」
紗季は彼女の汗が落ちるのを目敏く見ていた。この一言は、一挙手一投足を漏れなく見られているというプレッシャーになる。このまま心理戦で紗季に勝利する事はなかなか容易ではない。
すると紗季は目を再び細めた。
「それにしても奈々瀬ったら凄い汗だね」
「何なのよ、さっきからいちいちうるさいわね」

しまったと思いながらも、もう遅い。紗季の挑発に乗ってしまったのだ。下手に相手をすると彼女のペースに巻き込まれ兼ねないのは十分承知の筈だったが、つい言い返してしまった。

案の定、更に紗季が畳み掛けてくる。

「ブラウスもぐっしょり濡れてるじゃない。ホント女子高で良かったね。そんな汗だくの姿、男の子に見られたくないでしょ」

今度は無視した。

しかし奈々瀬が一度相手をしてしまった事に付け込むように、紗季は蛇のように湿気を孕んだいやらしい目で奈々瀬を見ている。

実際、奈々瀬は暑さと緊張感の所為でかなりの汗をかいていて、汗でブラウスがじっとりと背中に貼りついて下着の線が浮き上がっている程だ。確かに思春期の男子には見せられない。薄暗い部屋で、奈々瀬の細く締まった躰（からだ）のラインが露わになっている様はどこか官能的だ。

「ところで、どうするの。恐いんだったらホントに私が代わりに飲んであげても良いんだよ」

「冗談言わないで。私が飲むに決まってんじゃん。紗季こそ落ち着きなくぺらぺら口数が多いけどホントは私がアタリを引くのが、負けちゃうのが恐いんじゃないの？」

ほんの僅か、紗季の表情が変わった。

「へえ、そんな事言うんだったらさっさと飲んだら良いじゃないの」

さあ、と催促してくる紗季。

意を決した奈々瀬は、勢いよく立ち上がって右側にあったビーカーを手に取った。三人の立会人の視線が奈々瀬の右手に集中する。

数秒遅れて紗季もゆっくりとビーカーに目を向けた。

「ホントにそっちで良いの？」

「今更変えないよ」

「そっちが毒入りかもしれないよ？」

「だから、これで良いんだってば！」

まだしつこく揺さぶってくる紗季に対して苛立ちを覚えた奈々瀬

は、彼女に向かって怒鳴りつけた。しかし暖簾に腕押しと言ったような様子で紗季は相変わらずの薄笑いを浮かべている。

奈々瀬は手に取ったビーカーを見詰める。

「奈々瀬、ルール分かってるよね。一度これで良いって宣言したらもう変更はきかないんだよ」

分かってるよ、と返す奈々瀬。

そしてもう一つのルール。飲むときは一気に飲み干さなくてはならない。奈々瀬は頭の中でそのルールを思い浮かべて、大きく深呼吸をした。

そして。

奈々瀬はビーカーの中身を一気に喉に流し込む。

その様子を紗季と三人の立会人は食い入るように見ていた。期待と不安の入り混じった表情の立会人達に対して、ただ一人紗季だけは感情の読めない冷ややかな目で奈々瀬の喉の動きを観察していた。

飲み干した奈々瀬が机に、割れてしまいそうな勢いでビーカーを置く。息を切らしている奈々瀬の姿を四人はじっと見ていた。

そして。

奈々瀬は机に突っ伏すように倒れ込んだ。彼女は真っ赤な顔をして言葉になっていない苦しげな呻き声を上げる。

奈々瀬！　と立会人達は悲鳴にも似た声を上げた。

紗季は今まで通り上品に笑っている。

「ほら、言ったでしょ。そっちが毒入りかもしれないよって。ホントに人の忠告はちゃんと聞くもんなんだよ」

獣のように唸って喉を掻き毟る奈々瀬を見下ろして悦に浸る紗季は、まさに悪魔のように邪悪な高笑いを上げた。机に這いつくばる奈々瀬は充血した目で縋(すが)るように紗季を見ている。そしてがたがたと震える手を勝者の彼女に伸ばした。

「負け負け、奈々瀬の負けよ」

目に涙を溜めて見上げる奈々瀬を切り捨てた紗季は本当に愉快そうに、映画に出てくるような悪い魔女に似た甲高い笑い声を上げて

いる。
　立会人達は目の前で起こる凄惨な様子を信じられないといった様子でいる。その中で最初に落ち着きを取り戻した一人が別のビーカーに水を汲んで奈々瀬に差し出す。しかし奈々瀬にはそれすら目に入っていないようだ。
　悶え苦しむ奈々瀬をしばらく見て満足したのであろう紗季は、安全なもう一つのビーカーを手に取った。
「思いっきり笑ったから喉が渇いたわ。これは勝利の祝杯として頂いてあげる。のた打ち回る奈々瀬を見ながら飲む勝利の美酒って所かな」
　勝利とは敗者を踏み躙（にじ）るところに美徳があると考えている紗季。本当に性格が悪い。紗季は悶える奈々瀬を見下ろしてビーカーに口を付け、手首を傾けた。
　そして優雅に喉に流し込む。
「ばーか」
　奈々瀬の声だった。
「引っかかったな。何が勝利の祝杯だよ、私が飲んだのは普通のコーラだったよ」
　何事もなかったかのように立ち上がった奈々瀬はブラウスの袖で口元を拭った。周りの皆は目を丸くしている。中でも一番驚いて目を白黒させているのは勿論、勝利を確信していた紗季本人だった。
　次の瞬間、ガラスが割れる音が凝った空気を切り裂く。
　紗季がビーカーを落とした。それと同時に紗季はその場に崩れ落ちて、汚れた床の上でのた打ち回る。目を真っ赤に充血させてぼろぼろと涙を零す紗季から、つい一分前までの傲慢な姿はもううかがえない。
　痙攣の始まった紗季を、奈々瀬は悠々と見下ろして、ぽつりと零した。
「残念、私の勝ちみたいだね」
　奈々瀬は艶っぽく濡れた舌を出して笑った。

※

夜の湿った空気はアスファルトの匂いをまとっている。
高速道路の高架とそびえる古い工場に切り取られた濃紺の狭い夜空に、不細工で形の悪い下弦の月がふわりと浮かんでいた。
生ぬるい気温とは裏腹に笹中悟は少し冷たい汗をかいていた。
…もしかすると、
…あの事を。
街灯も疎らで、足元も良く見えない暗い場所に立っているのは悟と、もう一人は鮫島と名乗る胡散臭い男。悟はこの男の事を知らない。
和柄のアロハシャツに胸元には金のネックレス。猫背で不健康そうな鮫島はどう見ても性質の悪いチンピラだった。この男とは初対面だが、自分にとってプラスになるような人物ではないという事は判断できる。
「いったい何の用なんです、話ならこんな所じゃなくてファミレスとかでも良いんじゃないですか」
悟は静まり返った夜の世界に耐え切れずに第一声を発した。しかし鮫島はその問いには答えず、にやりと笑って並びの悪い歯を見せた。
「まあそう焦るなよ。一応確認しとくけど、アンタ笹中さんで間違いないんだな？」
悟は一瞬戸惑って曖昧に頷く。
「そうだよな。笹中悟、二十七歳だっけ。間違いないよな。ホント会いたかったぜ、笹中さんよ」
鮫島は先の曲がった煙草に火を点けた。
フルネームも年齢も正しい。どうやら人違いではないようだ。
「だから何の用なんです」
悟は少し語気を強める。

「そんなに焦るなって。ゆっくり説明してやるから」
いやらしく笑う鮫島は口と鼻から一緒に煙を吐いた。
今まで真面目に生きてきた悟はこの手の人種が一番苦手で、学生の頃も所謂不良と呼ばれる者を極端に避けていた。恐かった訳ではないが、関わると自分まで馬鹿になると思っていたからだ。
会話を交わすだけで吐き気がする。
こんな人物が自分の名前を知っている事に嫌悪感を覚えた悟は眉間にしわを寄せて鮫島から視線を外した。にやにやと頭の悪そうな緩んだ顔をしている鮫島を見ているとだんだん腹が立ってきた。
学生時代に空手を経験している悟は、たとえいきなり襲われてもその状況を打開する力も十分あるし、鮫島より背も高い。この男が自分に何らかの因縁をつけて絡んできたのだとしても、腕力では勝る自信がある。だから鮫島に嫌悪感と不信感はあっても、恐れは雀の涙ほどもない。
それでもこの手の男は何をしでかすか分からない。
人差し指と親指で煙草を摘まんでいる鮫島は煙を吐きながら爬虫類のような目で悟を舐めるように見ていた。
なかなか話を切り出そうとしない鮫島に対して悟は苛立ち始める。
「用がないんならもう帰りますよ」
吐き捨てるように言った悟は踵を返す。すると「ちょっと待てって」と、鮫島のしゃがれた声が背中越しに聞こえた。
「何です」
苛立ち混じりに言った悟は振り返って迷惑そうに鮫島を睨みつける。鮫島の相変わらずの不愉快な笑みが悟の神経を逆撫でした。
そして鮫島は勿体ぶったように溜めてから口を開いた。
「先月だったかなあ」
悟の背筋が凍った。
…もしかすると、
…あの事か。
明らかに顔色の変わった悟を見て、鮫島は更にいやらしく顔を歪

ませる。まるで獲物に巻きついた蛇のようだ。
「先月…？」
「そうだよ。確か夜の十時頃かな。郊外の国道。ほら、海沿いの工場が並んでる所らへんだよ。アンタその辺り車運転してただろ？」
そう言った鮫島の視線は真っ直ぐに悟の目を捕らえていた。疑問形ではあるがその目が確信を得ている。
「ああ、仕事の帰りに毎日その道を通っていますが。それが何か？」
平静を装ってみたものの、声は震えている。
鮫島はそれを見逃さない。
「アンタ…そこでイケナイ事しなかったか？」
…イケナイ事。
おもむろに首を傾けて悟の顔を覗きこんでくる。煙草臭い。自分の言葉にどんな反応があったか、どれだけ弱ったか、観察されているようでこの上なく居心地が悪い。顔を顰めた悟は思わず身を引いた。
「何の事ですか…」
「トボケんな！」
鮫島のどすの利いた怒声が人気のない夜の高架下に響く。悟は大きな体をぴくりと引き攣らせた。今までの表情とは一転して鮫島は鋭く悟を睨んでいる。
悟が怯んだのを確認すると、鮫島は直ぐににやけ面に戻った。
「笹中さんよお。アンタその夜、そこで人を撥ねただろ…」
その言葉は悟の胸を貫いた。
喉がからからに乾き、視界が霞んでくる。人を撥ねた。その言葉が悟の頭の中で跳ね回って何度も反響する。
「何かの間違いじゃないでしょ…」
「そんなワケねえよ。アンタは誰にも見られてないと思ってたか知らねえけど、俺はこの目でしっかり見たんだからよ」
口籠った悟。その額に冷や汗が滲む。
…視られていたのか。

「暗かったって言っても、あれだけ派手に吹っ飛ばしたんだから気付いてないワケじゃないだろ。間違いなく『やっちまった』って分かってるはずだ。それでもアンタは、ほったらかしでそのまま走り去った。つまり…」

轢き逃げってやつだろ。

鮫島は悟の反応を楽しむかのように溜めてから言った。

「僕はそんなの知らない、僕が轢いたって証拠なんてあるんですか！」

「証拠？　今アンタがここにいる事が証拠なんだよ」

どういう事ですか、と必死に取り繕って返す悟。煙草を一口吸って、悟から滲み出る動揺を確かめるようにしてから鮫島は言う。

「轢いたヤツの車のナンバープレート控えさせて貰ったんだよ。ナンバーからちょっと調べたら名前と住所と連絡先は分かる。それで今日呼び出したらアンタが来たってワケなんだよ」

この男を蛇と形容したのは間違いではなかった。

アンタは立派な犯罪者なんだよ、と言って蔑んだ目を悟に向ける。

轢き逃げ、犯罪者。テレビや新聞でしか見聞きした事のないような言葉を自分に突きつけられた悟は真っ青になっていた。冷たい汗が背中に湧く。

「本当に気付かなかったんだ。暗かったし、あの時は急いでいたから人を撥ねたなんて分からなかったんです。もしそれが本当なら、今から…出頭してきますよ」

悟はそう言って俯いた。

「ウソつけ。往生際が悪い野郎だ」

青ざめた顔で鮫島の顔を見ると、彼は実に愉快そうに笑っている。今の悟とはまるで正反対の表情だ。

「何が気付かなかっただよ。撥ねた後、一回車止めて出てきただろ。それでアンタは轢いた男をきっちり確認してたじゃねえか。それでいてアンタはそのまま車に乗って何事もなかったように逃げたんだ。結局後で救急車は来たんだけどアンタが轢いたオッサン、意識無か

ったぜ。可哀想に、あのオッサン死んじまったんじゃねえかな」
うう、と漏らして言葉が出てこない悟。
「出頭するなら勝手にしろよ。ただ、普通の交通事故と違って轢き逃げは罪が重いぞ。もし相手が死んだりしてたら罰金ぐらいじゃ済まねからな、もしかしたらムショに入って何年も出て来れないかも知れねえぞぉ」
にへらにへらと粘着質のある笑みを浮かべて、鮫島は弱り切って項垂れる悟の表情を下から覗き込む。煙草臭い息が悟の顔にかかる。
追い詰められた。
悟はその場に崩れ落ちるように、アスファルトの上に膝をついた。そして頭を抱えて亀のように丸くなった。
「今…。今ホントに大事な時なんだ。だからバレる訳にはいかなかったんだ」
涙声で語る悟を、鮫島は冷たく見下ろしている。
鮫島のような、社会の底辺にいるようなガラの悪い人間に話しても理解できないだろうが悟は構わず胸中を話し始めた。
「幸せにしたい人がいるんだ。来年の春、僕はその人と結婚する事になってる。でももしあんな大事故を起こしてしまったとなると、会社をクビになるかもしれない。世間体だって悪くなる。そんな事になったら彼女を幸せにする事なんて出来なくなる。人生めちゃくちゃだ」
こんな人間に言っても無駄だと分かっていても、思わず身の上を語ってしまった事に自己嫌悪を覚える。ふうん、と案の定どうでも良いような相槌を打つ鮫島。矢張りこんなチンピラには自分の気持ちなど理解できないんだと悟は歯を食い縛る。
すると鮫島は蹲る悟の前に屈み込んだ。
「そこでアンタに相談なんだよ、笹中さん」
鮫島は馴れ馴れしく悟の肩に手を置いた。その手に汚らわしいものを感じた悟は小さく身震いする。
「相談？」

「ああ、警察には言わねえよ。俺だって警察は嫌いだからなあ。それに、どうせならアンタにはそのまま幸せになって欲しい」
警察が嫌いと言うのは本当だろう。しかし、後に言った言葉は明らかに心が籠っておらず嘘臭い。
「黙っててくれるんですか！」
「勿論さ。ただし条件がある」
悟はふと顔を上げた。そこには本物の蛇のように冷血で人間味のない目をした鮫島の顔があった。
「俺も金に困っていてね。リーマンやってるアンタは少なくとも俺よりは金もってんだろ？　ちょっと分けて欲しいんだよ」
「口止め料って事、か…」
どこまでも腐った人間だ。
「そういう事だ。三百万ほど用意してくれねえか？」
「さ、三百万！」
驚嘆する悟に対して、鮫島は至って当然の事のような顔をしている。しかし一般的なサラリーマンである悟にとって現実的な額ではない。
「借金とかすれば無理な話じゃねえだろ」
「でも…」
「良いのか、周りにバレたらアンタの人生めちゃめちゃになるんだろ。明後日まで待ってやるから工面してくれや」
額に冷や汗と脂汗が混じった物が滲む。
「そんな…明後日までに三百万なんて無理だ…。用意出来る訳がない」
「まあ、頑張ってくれよ」
悟の肩をぽんと叩いて鮫島は立ち上がった。そして短くなった煙草を指で弾く。放物線を描いたオレンジ色の火は工場の塀にぶつかって弾けた。
鮫島は膝をついたままの悟に「連絡待ってるからな」と言い残してから、背中を向けて歩き出した。その言葉も悟の耳には届いてい

ないようだ。
破滅、三百万。
二つの言葉が悟の頭上でめまぐるしく回転している。
「あ、そうそう」
立ち去りかけていた鮫島がふと振り返った。
「カナちゃんだっけ」
その名前を聞いて悟の首筋は冷たくなった。
「確か香那（かな）って言ったよな、アンタの彼女。色白で、真面目そうでけっこう可愛い娘だよなあ。羨ましいなあ」
顔を上げて目を見開く悟。全ての血液が逆流するような感覚が彼を襲った。
「もし笹中さんが無理だって言うんだったら、アンタの彼女に頑張ってもらおうかな。文字通り体張って。胸も大きいし、けっこう良いセンいくと思うぜ」
鮫島は下品な舌なめずりをした。
…香那。
悟の心臓が冷たい血液を全身に送り出して巡らせている。鼓動が高まれば高まるほどに体温が下がってゆく感覚がした。
「香那は関係ない。これは僕だけの問題でしょう！」
「知らねえよ、そんな事。とにかく金になれば良いんだ。お前の女を守りたけりゃ明後日までに三百万用意しとけよ」
鮫島は野卑な笑い声を上げて背を向ける。
歯を食い縛って悟は拳を握りしめた。香那だけは、香那だけは巻き込みたくない。悟にとって彼女は全てだった。
愛している。
彼女の笑顔も、しっとりとした髪も、ふっくらした口唇も、柔らかな肌も、澄んだ声も、甘い香りも。彼女の全てを愛している。この先、死ぬまで一緒に生きてゆきたい。この世で唯一、そう思える女性だった。
純潔で純粋な香那の汚れる様など想像もしたくない。

「アンタが明後日までに金を用意できない事、ちょっと期待してんだぜ」

鮫島は歩きながら言った。

「実はよ…アンタの彼女、思いっきり俺のタイプなんだわ。こう見えて俺ってあんな感じの真面目で従順（おとな）しそうな娘が結構好きなんだよな。そんな子が調教されて夜の店に売られるなんて、想像しただけで興奮してくるぜ」

どくん、と悟の心臓が大きく打つ。

香那が見ず知らずの男の前で肌を露わにし、その体を触られ、舐められ、貪られる。その光景を想像しただけで視界が黒く霞んだ。

「あの娘の調教するのが楽しみだ。最初は泣くかもしれねえけど、大概の女は一か月もあれば慣れちまうんだ。女って俺らが思ってるよりスケベな生き物だぜ。完成したらアンタにも見せてやるよ、淫乱な香那ちゃんをな」

鮫島はいやらしい想像をしながら歩き去ろうとしている。

…香那に手を出すな。

卑しく汚らわしい鮫島に香那の名前を口にされる事でさえ嫌悪を覚えるのに、この男は頭の中で香那を凌辱している。悟は許せなかった。しかし自分が三百万という大金を用意しないと香那は魔の手に落ちてしまう。

そうなると香那は自分の知っている純潔で純粋な香那ではなくなってしまう。

…嫌だ、香那を失いたくない。

香那が香那でなくなってしまう事は、悟にとって全ての幸せと未来を失うのと同じだった。香那の笑顔が頭の中に儚げに浮遊する。

…誰が悪いんだろう。

あの夜、一人の男を撥ねた自分自身だろうか。あんな時間に夜道を歩いていた撥ねられた男だろうか。それとも遅くまで残業をさせる会社だろうか。悟の中で様々な悪の根源が巡る。しかしどれも違った。

悟は目の前で背を向けている男を見た。
…こいつだ。
…こいつさえいなければ。
悟は脇に置いてあったコンクリートブロックを両手で拾い上げて、よろめきながら立ち上がる。それは冷たく重く、いびつな断面が悟の指に食い込んだ。
鮫島は姿勢の悪い蟹股歩きで真っ暗な夜道を進んで行っている。その後を悟が音を立てないように近付いてゆく。
こんな男、いない方が社会の為なんだ。
そう何度も自分に言い聞かせる。すると鮫島は煙草に火を点ける為に立ち止まった。その背後に悟が静かに忍び寄るが、鮫島が気付く様子はない。鮫島の背中に手が届く程の距離まで来た時、悟はごくりと唾を飲んだ。
そしてブロックを大きく振りかぶり、鮫島の後頭部めがけて振り下ろした。
軽い感触の後に低い呻き声。鮫島は大きくよろめいてはいたが倒れなかった。どうやら後頭部には命中せず、側頭部を掠めただけだったようだ。不意を突いて一撃で決めるつもりだったが失敗してしまった。
悟の全身から冷や汗が噴き出る。
「てめえ…何のつもりだ！」
頭から血を流す鮫島は僅かに恐怖の混じった声で言った。まさか温厚そうな悟が攻撃してくるとは思っていなかったのだろう。
「香那には、手を出させない…絶対に」
目を合わせた瞬間に鮫島は恐ろしい獣と対峙したかのようにぴくりと引き攣った。悟はブロックを再び握り直して、鮫島の頭部に叩きつける。骨の軋む鈍い音に続いて、泣き声に似た悲鳴を上げる鮫島。
今度も狙いは外れたが、咄嗟に頭を庇った鮫島の腕と指がへし折れ潰れた。

「や、やめろって、彼女には手ェ出さねえから。な、な？」
悟は聞く耳を持たない。
媚びるような目をした鮫島に更にブロックを叩きつける。顔面に当たり、とうとう鮫島はその場で仰向けに倒れた。
「痛てえ、痛てえよぉ」
鼻血を垂らしてアロハシャツを汚す鮫島の上に馬乗りになる悟。再びブロックを大きく振りかぶった。悟は潰れた手で顔を守ろうとする鮫島を見下ろした。
そして顔面めがけて重いブロックを振り下ろす。
何度も何度も。手で守ろうとしてもお構いなしに、歯が折れようともお構いなしに、許しを請われてもお構いなしに。
この手のチンピラの言う事は信用できない。「もうしない」「何でもするから」と口では言っておきながら、後で必ず仲間を連れて報復に来るに決まっている。だから二度と会う気も起こらないように徹底的に痛めつけるべきだ。
鮫島の鼻は折れて曲がり、歯も何本かなくなっている。鼻腔や口から血が溢れて呼吸を遮っているのか、鮫島は苦しげにごぼごぼという音を鳴らしていた。その赤黒い血は悟のズボンにもかかり、形の不揃いな水玉模様を作っていた。
このまま殺してしまっても良いのではないか。
悟はそうとさえ思った。こんな人間、一人この世からいなくなったところで悲しむ者などいないだろう。
寧ろいなくなった方が皆喜ぶかもしれない。もしここで本当に自分と香那から手を引いたとしても、また他の誰かに同じような脅迫をするに決まっている。それならここで殺してしまうべきだ。
悟は無情なほど淡々と、単純作業のように鮫島の顔面を潰していた。鮫島は時々血反吐を出すだけで抵抗すらしなくなり、顔ももう原型を留めていなかった。
あんた、何やってるの！
ふと背後から甲高い叫びが突き刺さり悟は我に返った。立ち上が

って振り返ると、一本道の奥に柴犬を連れた中年女性が悟を見て震えている。

「け、警察呼ぶわよ」

女性は悟の姿を頭の先から足のつま先まで見渡しながら厳戒姿勢を取っている。はっとなった悟は凶器となった血塗れのブロックをその場に捨てた。

「あの…違うんです…」

悟が弁解しようと女性に歩み寄ろうと足を踏み出したら、その女性は短い悲鳴を上げて後ずさった。顔にまで返り血を浴びた悟と、その足元には顔面を潰され動かなくなった鮫島の姿がある。

誰がどう見ても悟が悪者だ。

「僕はこの男に脅されて…」

一方的な悪者という誤解は解いておかなくてはならない。悟が腫れ物に触れるように慎重に女性に近寄ろうとする。

「誰か助けて、殺される！」

夜を切り裂くような悲鳴。更に叫んだ内容もサスペンスドラマのように分かりやすい。悟は思わずその場でたじろいで後ずさった。

今の悲鳴の所為か、近くの何軒かの住宅の窓に電気が灯った。

気が動転した中年女性はまだ訳の分からない事をわめき散らしている。このままだと警察が駆けつけて来るのも時間の問題だ。

悟の足元では鮫島が血の混じった真っ赤な泡をぶくぶくと口から溢れさせている。この状況を見ると、どう考えても自分が加害者だ。警察に捕まると傷害罪に問われるし、更にこの前の轢き逃げの件もばれてしまう。

そうなってしまえば未来はない。

「仕方なかったんだ、僕は悪くないんだ」

悟はがたがたと震える足を無理矢理動かして、その場から逃げ去った。背後から女性の喚き声が響き続ける。

…僕は悪じゃない。

悟は走った。

未来を、幸せを守る為に。

※

冷蔵庫を開けた奈々瀬はビーカーにミネラルウォーターを汲んで一気に飲み干した。そして直ぐに同じビーカーにもう一度汲み直す。
「ほら、紗季も飲みなよ」
流し台に顔を突っ込むようにして咳込んでいる紗季に水の入ったビーカーを差し出すと、彼女も一気に飲み干して、机の上に乱暴にビーカーを置いた。「実験器具は大事に扱いなさいよ」と奈々瀬がからかっても紗季は無視して水道の蛇口を捻って水勢を増した。
「どう、生き返った?」
「全く…まだ喉が焼けるように痛いよ」と紗季。
彼女は泣き出しそうな顔をして水道で何度もうがいしている。その様子を見て奈々瀬は笑った。
「ハズレのコーラにはタバスコ一本全部入れようって言ったのは紗季でしょ。完全に致死量越えてるじゃん。私達は反対だったでしょ」
紗季はぐうの音も出ない。

紙町女子高等学校、科学部三年の五人組は理科準備室に集まっていた。
九月になって新学期が始まり、彼女達の部室兼活動場所である理科実験室の掃除と荷物整理をしている途中に、いつのまにかタバスコロシアンルーレットが始まっていたのだった。
気が付けばもう夕方。
片付けもほとんど終わらない内に日が暮れようとしていた。
流し台に立ってビーカーを洗うのを手伝う奥山(おくやま)アルマは、奈々瀬と紗季を茶色い瞳で見比べて感心したように言う。
「紗季のプレッシャーの掛け方すごいよね。見てる方まで緊張したよ。やっぱ特進クラス同士の心理戦って見応えあるね」

「特進クラスだからってこんな遊びには関係ないでしょ」
念入りに口を濯ぎながら紗季が答えた。喉がひりひり痛むのか何度も咳払いを繰り返している。
そんな彼女を見てアルマは口元に手を添えて上品に笑った。腹を抱えて大笑いという姿は、育ちの良いアルマからは想像もつかない。
紗季は口に含んだ水を流しに吐いた。
「ああ、まだ舌が痛い…。このタバスコドリンクって、みんなが思ってるよりずっと強烈なんだからね。嘘だと思うんだったら飲んでみなよ、そのお人形さんみたいな顔も不っ細工に歪むよ、きっと」
心なしか紗季の声はがらがらと濁っている。
「そんな事言われたら飲むわけないじゃん」
洋画の女優がするような手のひらを上に向けて首を傾げる仕草も、混血であるアルマには良く似合う。
「くっそー。その前にこの借りは絶対に返すからね、奈々瀬！」
いつでもどうぞ、と返して奈々瀬は舌を出した。
「これで紗季とは五勝五敗一分ね。今の所イーブン。もう次の勝負で決着にしようじゃないの」
「五勝五敗一分。そうよ、あの引き分けさえなければ今日で決着だったかもしれないのにねえ、くるみチャン…」
紗季はタオルで口を拭きながらじろりと小宮くるみを睨みつけた。
くるみは頭を抱えて小動物じみた素早い動きで机の影に隠れようとする。待ちなさい、と奈々瀬に鋭く呼び止められると、申し訳なさそうに顔を出した。
「いや、その…あれはですね」
弁解しようとするくるみを二人が睨む。もめている原因は夏休み前に行われたワサビ寿司ロシアンルーレットの事である。
「アンタの中途半端な優しさが、この争いを生んだんだよ」
「あ、ああ…申し訳ない」
くるみは申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた。
ワサビ寿司の時の戦いではくるみが「毒」を仕込んだ。しかしワ

サビの量が少な過ぎて、刺激物に免疫のある二人にはどれがハズレか判らず、結局二人で美味しく寿司を堪能しただけという和やかな結果に終わってしまったのだった。

「もう済んだ事だから良いんだけどね」

じゃあもう怒らないでよ、と小声で洩らしたくるみは二リットルのペットボトルに入れて常備しているウーロン茶をごくごくと飲む。気の小さい彼女は、拙(まず)い状況に陥ると緊張の所為で酷く喉が渇くらしく、その都度ウーロン茶をがぶ飲みするのだ。どこか愛嬌のある憎めないその姿も科学部の名物になっている。

「ところで次はどんな勝負するの？」

ビーカーを洗い終えて水滴を切るアルマは期待するような目で奈々瀬と紗季を見比べていた。

「そうだなあ。例えば、フグ刺しロシアンルーレットとか？　くるみが適当に捌(さば)いたフグ刺しを交互に食べるの」と奈々瀬。

「いやいや、それってマジで死んじゃうじゃん。トテロドトキシンだっけ。神経毒を甘く見ちゃ駄目だよ」

苦い顔をして首を横に振る紗季。

「冗談だって、流石に死んじゃったら洒落にならないでしょ」

準備室の片づけを続行しながらも、頭の中は面白いゲームについての事でいっぱいの科学部メンバー。次は誰が、どのような物を口にして醜態をさらすのだろうという事ばかり考えていた。

奈々瀬はカーテンと窓を開けて空気を入れ替える。

夏の終わりと秋の始まりを告げる涼しい風が吹き込んできた。入り込んできた新しい空気に、薄いガラス窓がみしりと軋む。

三階の理科準備室の窓からは中庭が見える。昼休みにはベンチに座って学食で買った昼食を食べる生徒達で賑わっている中庭も、今はもう誰もいない。池の水面が真っ赤な夕焼けを寂しげに反射させているだけだった。

ふと、秋の匂いがした。

「うわあ、随分涼しくなってきたね」

準備室の隅で、ホルマリン漬けの解剖されたカエルが入った瓶を愛おしそうに拭く水谷麻衣子（みずたにまいこ）は、感情の籠らない声でぽつりと呟いた。

「もう九月だもん。じめじめむしむしの夏ともおさらばよ。今月末には夏服ともおさらばになるのかな」

奈々瀬の言葉にこくりと頷いた麻衣子は、縁なし眼鏡の奥にある眠たげな眼で夕焼け空を眺めている。彼女のショートヘアがふわりと秋風に揺れていた。

三年の彼女達が夏制服を着るのはこの夏が最後。このまま涼しくなると、もう二度と紙町女子の夏制服に袖を通す事はなくなってしまうのだ。そう考えると奈々瀬は少し名残惜しいような気がした。

奈々瀬と紗季の熱戦で、じっとりとむせ返っていた準備室に新鮮な空気が柔らかく入り込んでくる。五人は久しぶりに新鮮な地上の空気を味わうモグラのように、揃って大きく深呼吸をした。

「高校生活最後の夏も終わっちゃったんだね」

麻衣子が薬瓶の整理をしながら淡泊に呟く。彼女の無感情な声でそう言われると余計に寂しい気がする。

「夏が終わったって事は、ここからは受験勉強漬けの毎日になるのかな」

紗季の言葉に奈々瀬は「げっ」と声を漏らして苦い顔になった。勉強など、夏休みは宿題を形だけ片付けたぐらいで、他には全くと言って良い程やっていなかった。受験勉強という言葉を聞くと胸が苦しくなる。

「アルマは良いよね、推薦で大学決まってるし」

すると困った顔でアルマは微笑む。ビスクドールのような彼女の白い肌は窓から差し込む夕日に照らされて紅く染まっていた。奈々瀬の言葉には肯定も否定もしないで、アルマは聞き返してきた。

「紗季と奈々瀬はやっぱり国立大なの？」

まあ私はね、と紗季は答えた。奈々瀬も身を乗り出して慌てたように、そうそう私も国立だよ、と続ける。あまり勉強していないの

で胸を張って言えない。
もう九月。高校生活も残す所あと僅かだ。
他府県の大学の薬学部への推薦が決まっているアルマ。大学へは行かずに爬虫類ペットショップでバイトしようかな、などと言っている麻衣子。一方で特進クラスの奈々瀬と紗季は国立大学への進学を期待されている。そしてマイペース過ぎるくるみはまだ具体的な志望校すら曖昧模糊な状態だった。
進路が決まっている者、決まっていない者それぞれだが、半年後には科学部の五人もそれぞれの道に進んでしまう。一年で科学部に入部した時から、楽しい事も辛い事も分かち合って一緒に馬鹿をやってきた仲間とも、もう直ぐ離ればなれになってしまうのだ。
いつかはその時が来ると分かっていたのだが、いざその時が近づいてくると気持ちが落ちてしまう。
いつまでも高校生のまま、馬鹿なゲームばかりやっていられたらどれだけ楽しい人生なんだろうと、科学部の五人は思っていた。
そう、馬鹿なゲームを。
「暗くなるのも早くなったなあ。よし、五時半までには片付けちゃおう。それからみんなで駅前のカフェでお茶しよっか」
紗季が提案すると、他の四人も「賛成！」と声を揃えた。
カフェという目標が出来て彼女達の作業速度が増す。後でお茶するという事が決まっているにもかかわらず、くるみはペットボトルのウーロン茶をがぶ飲みしている。そんなに水分を取っていると、美味しい紅茶の味が分からなくだろうと思ったが、重い荷物を運んだり体を動かしたので喉が渇いたのだろう。喉を鳴らしてウーロン茶を飲むくるみの姿を見ていると、こちらまで喉が渇いてくる。
奈々瀬は薬品棚の整理に取り掛かった。
茶色い瓶にはいずれもラベルが貼られている。塩化ナトリウムやエタノールなど授業でもよく使用するものから、いつ使用するのかも分からないような薬品まで、恐らく百以上の薬品が棚の中に並んでいる。

その中の一つを手に取り、目を細めてラベルを見る。
「ねえ、α‐ヒドロキシプロピオン酸って何？」
「何それ、そんなの三年間で一度も使った事ないよね」とくるみ。
使わなそうなら捨てちゃえば、と言った紗季はこちらに目もくれずモップ掛けをしている。そうだね、と下顎を突き出して同調した奈々瀬は薬品瓶の蓋を開けた。
中には白い粉末が入っていた。
シンプルな瓶、シンプルなラベル。茶色い薬品瓶に入った粉末は不思議な魔力を帯びているように、奈々瀬の知的好奇心を掻きたてる。もしかして危険な薬品なのだろうか。しかし液体ではないし、少しぐらい触ってみても大丈夫だろうと、奈々瀬はそろりと瓶の中に指を伸ばした。
「何してるの奈々瀬！」
空気を切り裂くような叫びに奈々瀬はぴくりと引き攣った。
その場の全員が作業の手を止めて奈々瀬に注目する。声を上げたのはアルマだった。彼女は真っ青な顔をして奈々瀬を見ている。そしてその震えた口唇を動かして、震えた声を発した。
「今…α‐ヒドロキシプロピオン酸を触ったの？」
「え、ちょっと触ってみたんだけど…どうしたの」
奈々瀬がそう答えるとアルマは両手で口元を覆って大きく目を見開く。
まずかったのだろうか。取り乱すアルマを見て奈々瀬にも不安が伝染する。え、何なの何なの、と奈々瀬は狼狽していた。
するとアルマが一言だけ口にする。
劇薬よ、と。
「ちょっと待ってよ、これってもしかして猛毒なの？」
奈々瀬は慌てて瓶の蓋を閉めて机の上に置いた。その近くにいたくるみも逃げるように瓶から離れた。
「でもちょっと触ったぐらいだよ。飲んでもいないし、目にも入ってないから大丈夫だよ、ね？」

奈々瀬が一歩進むと、アルマは距離を置くように後ずさった。同じように他の三人も奈々瀬から一歩離れる。

…何なのよ。

皆はまるで化け物を見るような目で奈々瀬を見ている。奈々瀬の胸の中で、上手く表現出来ない灰色の不安がふつふつと泡立ち出した。するとアルマが何度か深呼吸して息を整えてから口を開く。

「奈々瀬、落ち着いて聞いてね。α‐ヒドロキシプロピオン酸は経皮でも危険なの。しかも指先でしょ。爪の間から毒素が侵入して、やがてそれが全身に回って、嘔吐や目まいの症状が表れるの。それから、最悪の場合…」

そこまで言ってアルマは口籠った。

「もしかして、私…死ぬの？」

アルマは目を伏せるように頷く。

死。その言葉が脳裏を過った奈々瀬は、弾かれたように流し台に駆けて蛇口を捻る。勢い良く出る水に、薬品の付いた指を晒してごしごしと血が滲むほど擦った。

死にたくない。まだ死にたくない。

「ねえ、奈々瀬」

不意に名前を呼ばれて振り返ると、麻衣子が例の劇薬の瓶を持っていた。人差し指で眼鏡のブリッジを押し上げた彼女はおもむろに薬品瓶を開けた。彼女が瓶の口をこちらに傾けると中の白い粉末が見える。

すると麻衣子は瓶の中に手を入れた。

「ちょっと麻衣子、何してるの！」

奈々瀬が叫ぶと麻衣子は僅かに口元を綻ばせた。彼女が何を考えているのか全く分からない。麻衣子は更に驚くべき行動をとる。

粉末をつまみ上げ、それを自らの舌の上に乗せた。

「ま、麻衣子…」

奈々瀬は目を丸くして絶句した。驚愕する彼女の目を見たまま、麻衣子は長い舌を口の中に戻してあの白い粉末を味わうように口を

動かしている。
「全く、アルマも意地悪だよ」
麻衣子がアルマの方へ目配せする。すると彼女は柔らかそうな栗色の髪を揺らして、くすくすと笑っている。
…え、何？
「これは猛毒でも何でもないの。α‐ヒドロキシプロピオン酸ってただの乳酸だよ」
「乳酸…」
そう乳酸、と言って頷く麻衣子。
「知ってるでしょ、筋肉疲労の原因物質って言われてたやつ。食品添加物として使われてるから口に入っても死なないよ」
「そうだったの！　という事は…」
ちらりとアルマの方を睨むと、彼女はピースサインをこちらに向けていた。どうやら彼女に一本取られたようだ。
「それにしても奈々瀬の焦り方…面白かったなあ」
普段は無表情な麻衣子が愉快そうに声を出して笑う。
滅多に感情を表に出さない彼女の笑いの琴線は人の恥ずかしい姿らしい。あまり褒められた趣味ではない。その横でアルマも口元を押さえて肩を震わせながら笑っていた。
「ちょっと、こっちは本当に死ぬかと思ったんだからね！」
笑われて悔しくなった奈々瀬がアルマと麻衣子に突っかかって行こうとする。すると間に入って来た紗季が「はいはい、さっさと掃除終わらせちゃおう」と奈々瀬の背中をぽんぽん叩いて薬品棚へ促す。
机に置いてあった瓶を手に取って憎々しげに睨む。ちくしょう、アンタの所為で恥かいたじゃないの。奈々瀬は薬品瓶に心の中で文句を言ってから薬品棚に戻した。
固体、液体別に五十音順に薬品を並べ終わった。こうして並べると改めてまだまだ知らない薬品が多かった事に気付く。特に奈々瀬の視線の高さから外れていて、普段なかなか目にしない一番上の段

に見覚えのない薬品が多い。
…何だ、あれ。
一番上の棚の奥、炭酸カルシウムの薬品瓶の後ろに何かが挟まっている。紙切れだろうか。奈々瀬は背伸びをして棚の奥に手を伸ばす。ほぼ手探り状態で瓶を倒さないように慎重にさっき見た紙を探す。
…あ、あった。
奈々瀬がその紙を引き抜くと埃も一緒に落ちてきた。咳払いをしながら肩に掛かった埃を払っていると、隣の書棚の整理をしていたくるみがやってきた。
「どうしたの、何その汚い紙？」
彼女はペットボトルに口を付けたまま質問する。奈々瀬の手にあるのは折り畳まれたノートの切れ端だった。よくあるキャンパスノートなのだが、相当古い物らしく全体的に変色しているし端もぼろぼろに朽ちかけて柔らかくなっている。
「ああ、何か棚の奥に挟まってたんだけどね。何だろう」
「もしかしてラブレターとかかな？」
何故かほんのり頬を赤らめているくるみ。見ちゃおうよ、と奈々瀬に寄って来る。
「何言ってんのよ。女子高でラブレターなんか落ちてる訳じゃないでしょ」
「いやいや分かんないよ。別の学校の男の子から貰ったのかもしれないし。あ、ウチの学校生徒は女子しかいないけど…もしかして生徒と教師の禁断の愛とか？　それか女同士の、もっと禁断の愛かなあ？」
くるみは自分で言っておいて興奮したのか、またウーロン茶をがぶ飲みする。二リットルのペットボトルが空になってしまいそうだ。そんな大量の水分がこの小さな身体の、いったいどこに入っていっているのだろう。
「ホント想像力が豊かな事。くるみは恋愛小説でも書いてみたらど

う？　それだけ空想妄想が働くなら面白いのが出来るんじゃないかな」

まさか本当にラブレターな訳がないだろう。

それでも奈々瀬の頭には「もしかしたら」という事が植え付けられていて、ラブレターではないにしろ、ゴシップの類のものを少し期待してしまっていた。

奈々瀬は畳んである紙切れを開く。

…何なの、これ。

その中を見た瞬間、彼女の頭に電流が走った。それはラブレター以上に刺激的な内容だった。

ねえ何なの？　と背伸びしたくるみが手元を覗き込んでくる。すると他の三人も奈々瀬達の様子に気づいたようだ。

「ちょっと、みんな見てよ。何か面白い事書いてあるよ」

奈々瀬は草臥（くたび）れた紙を机の上に広げた。五人はノートの切れ端を取り囲むようにして、机の周りに集まった。しわしわの黄ばんだ紙を丁寧に手で伸ばす奈々瀬。力加減を間違うと破れてしまうどころか風化してしまいそうだ。

「科学部サバイバルゲーム？」

首を伸ばして目を細める紗季が一行目の文字列を口にした。

「今まで私達がやってた遊びより面白そうじゃない？」

それぞれの顔を奈々瀬が見回すと、四人は真剣に文字を追いながらもこくりこくりと首肯している。

そこに記されてあったのはサバイバルゲームのルール表。雑な箇条書きで表されているだけだが、シンプルでいて面白味があって彼女達の心を掴むには十分だった。

◆科学部サバイバルゲーム◆

？日常生活中、参加者同士で毒を仕掛ける（ワサビでもタバスコでも何でも可）。

？自ら降参を表明しない限り何度でも復帰できる。

？一度降参した者への攻撃は禁止する。
？参加者以外への攻撃は厳禁とする。
？開始から三ヶ月を経っても参加者が二人以上残っている場合は引き分けとする。
？万が一のため、参加の際に「自殺」という旨の遺書を直筆で用意する。

「へえ、さっきみたいにわざわざ場を設けずに、常に勝負が続いてるって事か。私達が今までやってたのと全然違うじゃん」
紗季はその紙切れを手に取って興味深そうに頷きながら眺めている。
彼女の言うとおり、このルールならロシアンルーレット方式にしなくても良い。期間中ならいつでもどこでも勝負ができる。
裏を返せば家でも学校でも二十四時間気を抜けないという事になる。
「じゃあ、スタートから三ヶ月の間なら、予告なしで食べ物に変な物を入れても良いって事だよね。例えば後でこっそり誰かさんのペットボトルに辛子を入れるとか」
丸椅子に座って頬杖をつく麻衣子はくるみを見て薄く笑う。ぴくりと反応したくるみはウーロン茶の蓋を固く閉ざして背中に隠した。
それにしても…。と、顎に人差し指を置いて難しそうな顔をするアルマは、紗季の持つ紙切れを覗き込んでいる。
「随分古い紙だけど、これって誰が書いたんだろうね」
「さあ。でもタイトルで『科学部』って書いてあるし、きっと昔の科学部の先輩なんだろうね。私と紗季がやってたタバスコロシアンルーレットにしても、去年の先輩がやってたんだし」
先人の知恵、とでも言うべきだろうか。
くじ引きのようなゲームばかりしていた彼女達にとって、この発想は目から鱗だった。とてもではないがこのサバイバルゲーム方式のルールは思いつかなかっただろう。

紙町女子の科学部は昔からこんな遊びばかりしていたのかと思うと、奈々瀬は会った事もない先輩達にどことなく親近感を覚えた。

くるみが何か言いたそうな顔で口をぱくぱくさせている。どうしたの、と奈々瀬が尋ねると彼女は「ここ」と言って?を指差した。

「遺書って、何で要るんだろう…ね」

それは全員が引っ掛かっていた事らしく、くるみの言葉に五人とも黙り込んだ。さらには「自殺」という物々しい言葉の存在感が、高校生同士の遊びにしてはあまりに大き過ぎる。奈々瀬は何も答えられない。

まさか、死者まで想定したゲームなのだろうか。

「雰囲気作りでしょ?」

アルマが軽い口調で答えた。彼女は続ける。

「やっぱりこういうゲームって入り込まなくちゃ感じが出ないでしょ。遺書を書くって事はゲームに参加するって意思表示と儀式の意味があるんじゃないかな」

彼女の言うとおりだ。部活メンバー同士の遊びが殺し合いに発展するなどあり得る筈がない。それでも遺書を書くという行為自体が不思議なリアリティを生み、よりゲームへのめり込むことが出来るきっかけとなる。

アルマの言葉を借りると、まさしく儀式だ。

「ちょっと、麻衣子…何してるの?」

麻衣子は机の上にノートを出してボールペンで何やら書き始めていた。ふと手を止めて奈々瀬の顔を見上げる。

「何って、遺書書いてるの。みんなもやるでしょ、科学部サバイバルゲーム」

眼鏡の奥の虚ろな瞳は真剣そのものだ。どうやら冗談ではないらしい。

「よし、私も」

「紗季!」

麻衣子に後れを取るまいと紗季までノートを取り出して遺書を書

き始める。それに続いてアルマまで机の上にノートを開いた。三人は黙々と、架空の死の理由を考えて文字にしてゆく。

お父さんお母さんごめんなさい。もう生きてゆけません。全てが嫌になりました。辛いです。悲しいです。苦しいです。さようなら。

三人は思い思いの文面を綴ってゆく。後ろ向きで絶望的な言葉を書いているにもかかわらず、その顔は妙に生き生きしていて気味が悪かった。

…毒を仕掛けるサバイバルゲーム、か。

…アブナイ遊びだなあ。

奈々瀬は三人の様子を窺いながら迷っていた。仲の良い科学部メンバーの全員が敵になり、どこからともなく自分に毒牙を向けてくる。ゲームが始まれば、今の自分達の関係が崩れてしまうかもしれない。

良くない事だ。そう思いながらも奈々瀬の手が疼く。目の前に極上のスリルがぶら下がっているのだ。

…まあ、ちょっとぐらい。

奈々瀬は鞄から英文法のノートを取り出して一枚千切り、机の上に置く。

「私が一番になるから、よろしく」

「やっぱり乗ってきた。奈々瀬にはさっきの借りを返さなきゃね」

と紗季。

あっ、と隣でくるみが声を漏らしたと同時に、先に遺書を書き始めていた三人が奈々瀬の方を見て微笑んだ。

「仲間外れは嫌だよ！」

全員参加するような空気に炙り出されたように、くるみも鞄からノートを取り出して机の上に力強く置いた。

科学部三年の全員がサバイバルゲームに参加する事になった。

…ちょっくら、やってみようかな。アレの練習だと思って。

…そう。これは練習。

かりかりと鉛筆の音だけが響いていた時、紗季が口を開いた。
「思ったんだけどさ、科学部サバイバルゲームって名前ダサくない？」
確かにヒネリがないよね、とアルマもそれに同調した。くるみと麻衣子は別に気にしていない様子だったが、紗季とアルマは「何か他に良い名前はないのか」という目で奈々瀬に催促してくる。
「奈々瀬、何か思いつかない？」
何で私に振るの、と思いながらも奈々瀬は腕を組んで考えていた。
…毒を仕掛け合う科学部の私達、でしょ？
最近の流行語で、インドア派の女性を家ガールと言ったりアウトドア派の女性を山ガールと言ったりするのを思い出した。そして今、英文法のノートの切れ端を使っていた事から一つ思いついた。
奈々瀬は書き慣れた筆記体でノートにペンを走らせる。
―Ｐｏｉｓｏｎ　Ｇｉｒｌ―

正義から悪へ

何とか戦隊、何とかレンジャー。

名前などすっかり忘れてしまったが、幼い頃の悟は戦隊物ヒーローが大好きだった。確か金曜日の夕方に放送されていたような気がする。

幼稚園から帰ってきて手洗いうがいを済ませるなり大急ぎでテレビを点けた。幼い悟は番組が始まる十分以上も前からテレビの前で正座して待っていた。その姿を見た母親は呆れたように笑っていたが悟自身は真剣そのものだ。ブラウン管の中のヒーローの活躍を応援する事が悟の一週間の中で最も大切な時間だった。

街に現れた悪の怪人と五人のヒーローが戦い、最後には巨大化した怪人を合体ロボに乗ったヒーロー達が力を合わせて打ち倒す。毎週そのパターンの繰り返しだった。

強きを挫き、弱きを助ける。そして正義は必ず勝つ。

ありきたりな展開だが、そのヒーロー達は幼い悟に正義のなんたるかを教えてくれた。悟にとってまさに正義の教典だった。

おかげで彼は意味もよく分からないのに「正義」という言葉が好きになり、「正義」に憧れるようになった。正義とは良い事、そして強くて正しい事。それが幼い彼なりの正義の認識だった。

世界を征服しようとしている怪人は見紛う事なき完全な悪。それと戦う五人のヒーローは疑う余地のない純潔で完璧な正義。完全なる勧善懲悪の構図がブラウン管の中にはあった。

そして幼い悟は思った。

世界の全ては正義と悪で出来ているのだろう、と。

警察が正義の味方で、警察に捕まる人が悪者。世界中で起こっている戦争も正義の国と悪の国が戦っていると思っていた。悟の中には白と黒しか存在しなかった。

そして幼い悟は思った。

僕は正義の味方になりたい、と。
迫りくる悪を倒し、困っている弱い人達を守りたい。その為に少しでも強くなりたいと願って、ヒーロー達の活躍を毎週食い入るように観ていた。正義のヒーローはいつも孤独だった。正義の味方はたった五人しかいない、しかし悪の怪人は大勢の戦闘員を連れて来る。リーダー格の怪人を倒しても、次の週にはまた別の怪人が現れる。倒しても倒してもきりがない。悪の怪人が現れ続ける限りヒーローは戦い続けなければならない。
そして幼い悟は思った。
この世界には悪が多過ぎる、と。
いくら正義のヒーローが強くても、たった五人しかいないのでは世界中の悪を懲らしめる事は出来ない。悪者の数だけ、いやその何倍もの人が悪者に苦しめられている。そう思うと悟は自分が何もできない事を歯痒く思った。
そして幼い悟は思った。
心の底から悪が憎い、と。

悟は運転席に座るなりクーラーをつけた。
真夏日のピークは越えたらしく、日が沈んでからは少し涼しくなってくる。しかし日中は車内でもエアコンをつけていなければ汗が噴き出るほどの暑さだ。夏の名残はまだまだある。
助手席に鞄とサマージャケットを投げ置いてネクタイを緩める。煙草をくわえてアクセルを踏み、陽炎の揺らめくアスファルトの上を走り出した。
…今日はあと二件回ったら終わりだな。
赤信号で手帳を確認して今日回る営業先を確認する。予定通り順調にいくと今日は七時には家に帰れそうだ。煙草の火を消して窓を開けて換気をすると、外から熱気が入り込んできて悟の背中に汗が滲む。
しばらくして窓を閉めると煙草の匂いはある程度消えたが、染み

ついた薬品の鼻を衝く臭いは消えなかった。
悟は、企業相手の医薬品の営業をしている。オフィスの薬箱の中身の補充のルート営業だ。彼は毎日同じ時間に起き、同じ道を運転して、同じ営業先を回って、同じように頭を下げるという判で押したような生活を送っていた。
そんな生活が退屈だと思う人もいるかもしれないが、野心もなく刺激を求める事もない悟には全く苦でなかった。
煙草も二十歳になってから吸い始めたし、酒も付き合いでしか飲まない。ギャンブルなど、もっての外だった。真面目が服を着て歩いているような彼の事を退屈で面白味のない人間だと評価する人間も少なくない。しかし大きな喜びはないが、深い悲しみもない穏やかな毎日が悟は好きだった。
こうして人生がのんびり過ぎていけば良いのに。
悟はそう思っていた。
やがて海が見えてきた。太陽の光を反射させてきらきらと光る波の眩しさに悟は目を細める。カモメかウミネコか知らないが、灯台のすぐ傍の水面の上で群れを成している。その下に魚が沢山いるのだろうか。
臨海都市部のオフィス街を車で走るのは気持ちが良い。ふと外の空気が吸いたくなって窓を開けると海鳥の鳴き声と一緒に潮風が吹き込んでくる。そう言えば今年も海水浴に行かなかったな、などと考えながら彼は胸一杯に潮風を吸い込んだ。
気分が良くなってスピードが上がっていたらしい。スピードメーターを見て法定速度を少し超えていた事に気が付くと、悟は静かにアクセルを緩めた。
海に面したビル、七階のオフィスに注文されていた薬を持っていく。そこの窓からも眩しい海が見えた。こんな所で働けたら良いな、とは思わなかった。良い眺めだとは感じるが現状に満足している悟に欲はなく、いつも通りフロントで解熱剤と頭痛薬を三箱ずつ置いて領収書を切ってビルを後にする。

手の届く幸せがあればそれで良かった。

大型ドラッグストアで缶コーヒーを買って喉を潤す。医薬品の販売営業をしながらドラッグストアに立ち寄るのは何か変な気分だったが、いつもの事なので気にならなくなっていた。国道沿いにある上に駐車場が広くて車を停めやすいのでちょうど良い。

エアコンの効いた車内で冷たい微糖のコーヒーを飲みながらのんびりと休憩していた。煙草は一日五本までと決めているので、後は仕事が終わるまで吸わない。いつも通り、ここの駐車場でダッシュボードに置いていた携帯電話を確認する。

―このメールを見てるって事は休憩中かな？　残りのお仕事頑張って！

恋人の香那からのメールだった。

いつもこのタイミングでメールチェックをすると香那からのメールが入っている。彼女も悟の生活リズムを把握しているらしく、今の状況をぴたりと言い当ててくる。それが嬉しく思えた。営業マンの顔になっていた悟も、つい表情を緩めてしまう。それもいつも通りの事だった。

いつも通り仕事を続けられていて、いつも通り香那からメールが届く。

いつも通り…。

それが悟の幸せだった。

昨夜、その幸せは血塗(ちまみ)れの危機に晒された。しかしその翌日も悟と香那のいつも通りは穏やかな小川の流れのように変わらずに続いている。

悟は幸せを守れたのだった。

陽は随分傾いていた。

昼の時間もだんだん短くなっているらしい。

最後の営業先に着いたのは夕方六時を回っていた。大きなオフィス街にある小さなビルの小さな事務所。何台かの事務机に何台かの

パソコンが並んでいる。商社を営んでいるらしいが、どんな仕事をしているのかまで悟は知らない。

受付で声を掛けると、いつも通り人の良さそうな中年男性が出てくる。縁なし眼鏡を掛け、草臥れたワイシャツを着ている白髪混じりの男性は、典型的な「おじさん」と呼ばれる人種だ。確か山崎さんという名前だった。

「ああ、笹中さん。いつもありがとうね」

「いえいえ。こちらこそいつもありがとうございます」

悟は愛想の良い笑顔を見せて頭を下げる。

「ええと、今日は湿布が三ケースと胃薬が一箱でしたね」

悟が持参した薬箱を開くと、つんと鼻を衝く臭いが漂う。薬品の匂いにもすっかり慣れてしまった。

注文の薬を山崎さんが持って来た薬箱に詰めてゆき、ついでに他の薬の使用期限も確認する。齢を取った社員が多い所為か、悟が回っている他のオフィスよりも薬の消費量が多いような気がした。

薬を詰め終わると今度は山崎さんが深々と礼をした。

仕事ですからお気になさらず、とは言えなかった。色々なオフィスを回っていれば色々な人がいる。山崎さんのような人もいるが、中には悟のような営業マンをぞんざいに扱う人もいる。悟は、気さくで礼儀正しい山崎さんがどことなく好きだった。

「ところで笹中さんは車で通勤してるのかい？」

話好きの山崎さんはいつも何かと話しかけてくる。若い人と話す機会が少ないので、悟の事を珍しく思い興味を持っているのかもしれない。

「はい。営業は社用車で回っていますけど、いつも会社までは自分の車で通勤していますよ」

悟も領収書を切りながら答える。

「事故には気を付けなよ。先月すぐそこの工場の近くでも事故あったの知らない？」

「先月ですか」

領収書を受け取った山崎さんは小さく頷いた。
「そうそう、交通事故があったんだよ。しかも轢き逃げらしくてね、轢いた方はまだ見つかってないらしいよ。逃げたっていつかは警察に捕まるのに…全く悪い奴もいるもんだねえ」
…先月の交通事故、轢き逃げ。
悟は冷静を取り繕いながら薬箱を整理している。今自分がどんな表情をしているのかと心配になった。
「まあ、笹中さんは真面目な人だから轢き逃げなんてしないだろうけど、くれぐれも安全運転でね」
そう言って山崎さんは目じりにしわを寄せて笑った。
「ええ、気を付けます。ありがとうございます」
悟は愛想の良い顔で頭を下げた。
少し胸が痛んだ。

全ての営業を終えて営業所に戻る頃には暗くなっていた。
デスクに座って今日販売した薬の書類をまとめてから「お疲れ様でした」と残っている社員に一声掛けてから営業所を後にした。
社員同士の関わりは極めて希薄だ。
しかし人付き合いがそれ程得意ではない悟にとってそれぐらいがちょうど良かった。決して彼の務めている会社が人間関係の悪い職場という訳ではない。ただ悟が必要以上の関わりを避けているだけだった。
職場で悟が嫌われている訳でもない。営業成績も良く、何でも器用にこなす彼の評価は社内でも低くはない。愛想も良く上司からも気に入られているし、同僚や後輩からも頼りにされている。
ただ、付き合いは悪い。仕事が終わってから同僚や上司に飲みに行こうと誘われても何かと理由をつけて断ってきた。いつも通りが崩れる予定を入れるのが堪らなく厭だったからだ。
イレギュラーな誘いはすべて断ってきたが、前もって予定されている社内の飲み会には参加している。それでも飲みすぎる事なく、

かと言って飲まない訳でもなく、無難に制御して飲んでいた。
今日はちょっと…。この後予定が…。言葉を上手く濁しながら飲みの誘いを断っている内に、誰も悟を誘わなくなっていた。
それで良かった。
いつも通りを守れるのなら、それで良かった。
目立たず、嫌われず、好かれず。誰も目に留めないアスファルトの隙間に生える植物のような穏やかで静かな生活が好きだった。
誰よりも幸せになりたい。
そんな事は一度たりとも思った事がない。
仕事をして、いつか結婚して、子供を育てて、齢をとって。そして安らかにベッドの上で人生の幕を下ろす。
そんな普通の人生が彼の幸せだった。
会社が契約している月極の駐車場に停めてある自家用車に乗った悟はネクタイを外して助手席に置いた。
エンジンをかけた時、デジタル時計には七時と表示されていた。いつもより少し遅い時間で、悟は少し不愉快な気分になる。胸ポケットから携帯電話を取り出して「ちょっと遅くなったけど今仕事が終わったよ」と香那にメールを送ってからアクセルを踏んでゆっくりと車を走らせ始める。
ラジオをつけるとニュースが流れていた。どうやら総理大臣が交代するらしく、新しい首相の名前が告げられている。
「おいおい、また代わるのか」
独り言でラジオに話しかける悟。
そうは言っても政治にはあまり関心がない。どうせ名前を憶えても、どうせまたすぐに交代するのだろうとうんざりしていた。半年ごとに総理大臣が代わったりする変化の激しい政界に、悟はどうもついてゆけない。
変わらないのが一番良い。心の中でそう呟いた。
窓を開けると昼間とはうって変わって涼しい風が入り込んできた。もう夏が終わるのだと実感できる。淡い紺色の空を見上げると、こ

の前と少し形の変わった月が雲の間から顔を出していた。
暗くなってきた所為で、行き交う通行人の姿も随分見えにくくなってきた。部活帰りの高校生の自転車が車道にはみ出して走っていて危ない。
―くれぐれも安全運転でね。
山崎さんの言葉を思い出して、悟はスピードを落とした。
その時、ふと耳障りなエンジンをふかす音が後方から聞こえた。
そして一台の原付が凄いスピードで悟を追い越して行った。
悟の眉間にしわが寄る。
後続車を挑発するように蛇行する原付に二人乗りをした少年達。
彼らはヘルメットも被らず品のない茶色い頭を見せていた。さらに後ろに乗っている少年が火の点いたままの煙草を道路に投げ捨てる。
存在悪。
そんな言葉が悟の頭に浮かんだ。
別に悟は警察官でも裁判官でもなんでもない。それでも悪という存在が嫌いだった。知性もない、モラルもない醜い悪。見ていると嫌悪感を覚える。
「ゴミめ。さっさと死ねよ」
思わずそんな事を呟いた。
総理大臣が交代するよりも、法律が改正されるよりも、そんな人間が同じ社会にのうのうと生きている事の方が悟にとって大問題だった。
クラクションを鳴らされる少年達は、下品で間の抜けたエンジン音と共に次々と車を追い越して行く。
悟は彼らの後姿を睨みつけていた。
街のいたる所、どこにでも不良はいる。それも必ず群れで行動している。彼らがコンビニの前でたむろしている姿を見ただけで苛々する。
―害虫駆除だ。
ふと、そんな言葉を思い出した。

大学の空手部時代、悟と同じような考えを持っている仲間がいた。
ある日、部員五名で「町の掃除」という名目の下、不良狩りを行う事になった。不良が嫌いな悟は興味本位で不良狩りに着いて行く事にした。悟達は皆、体も大きく胸板も厚い。中には有段者も混じっている。
今から悪の巣窟に乗り込んで悪者を一掃する。自分達は悪の怪人と戦う正義の戦隊ヒーローだ。不意に子供の頃の淡い記憶が蘇った悟は少し胸が躍った。悟は何度も手を閉じたり開いたりして拳の感覚を確かめた。
深夜のコンビニへ行くと案の定、駐車場で不良が三人たむろしていた。
この人種はまるで灯りに集まる蛾のように夜のコンビニで群がる習性があるらしい。しかし蛾と違って食べかすや吸殻を散らかす分さらに始末が悪い。その姿を見た瞬間から、悟の胸の中は濁った泥水で溢れ返るようになっていた。
ここで害虫共に正義の鉄槌を下すのかと思った。
しかし、そんな綺麗なものではなかった。
空手部仲間の一人が雑貨屋で売っているようなニット製の覆面を被った。覆面と言っても何とかレンジャーや何とかライダーのようなヒーローの物とは程遠い。どちらかと言うと泥棒やテロリストのような悪者が被っている物だ。すると他の仲間も彼に続いて顔を隠す。悟にも覆面を手渡された。
これから社会の為になる良い事をするのになぜ顔を隠す必要があるのだろう。そう思っていると、仲間の一人が座り込んでいる不良達に向かって駆け出して、その中の一人の顔面に思い切り跳び蹴りを入れた。
アスファルトの上に倒れ込んだ不良は鼻と口から血を噴き出している。前歯も何本か無くなっていた。他の二人が何かを喚いて立ち上がろうとしたとき、こちらの仲間がその二人に不意打ちを仕掛け

る。残った不良の一人は腹を蹴られ、もう一人は髪を掴まれて顔を殴られていた。
「害虫駆除だ」
誰かがそう言った。
そこからはまさしく袋叩きだった。
逃げようとバイクに向かって這う不良の頭を踏みつけて、顔面をアスファルトに押し付ける。一人が羽交い絞めにしてもう一人がサンドバッグを叩くように腹を殴る。頭を抱えて丸くなった不良をサッカーボールのように蹴る。
冷たいアスファルトに転がる不良達の事を、誰ももう人間とは思っていない。不良達は日頃の鬱憤を晴らす為のおもちゃになっていた。
悟はその様子を見詰めてただ立ち尽くしていた。
憎々しく思っていた不良も、よく見ればまだ高校生ぐらいの年の頃で、自分達よりも年下だ。そんな彼らが泣きながら「勘弁して下さい」と許しを乞うている。それでも悟の仲間達は聞く耳を持たず少年達を殴り、蹴り、暴行を続けている。
以前、悟の知人の誰かが「不良は健康保険証を持っていないようなもの」と言っていたのを思い出した。普段は反社会的に傲慢に振る舞っているが、いざと言うとき何の保護もなく誰も守ってはくれない。
その通りだと思う。
彼らを助けてくれる者はいない。当たり前の事だろう。彼らは悪だ。正義の味方に倒されるべき悪者を助ける神様などいない。
悪い不良に制裁を下している自分達は正義だ。世間に迷惑をかけるのが悪で、それを誅するのが正義だ。その筈だ。
正義の対義語は悪。幼い頃からずっとそう思って生きてきた。
しかし目の前の光景を見ていると自分の考えが正しいのか少し疑ってしまった。辺りには飛び散った血や折れた歯が転がっている。
悟の仲間は無抵抗の少年達を殴って蹴って引き摺り回す。覆面に隠

されたその顔は、きっと笑っているのだろう。
これは正義の鉄槌などではない。ただの暴力だ。悟の目の前に正義の味方は一人もいなかった。
悪だ。
どっちも、悪だ。
もう悟は何が正義で、何が悪か分からなくなった。真の悪を見極める目を手に入れるしかない。そう考えた。
それ以来、悟が「町の掃除」に参加する事はなかった。
仲間達が空手部の打ち上げなどの酒の席で、不良狩りの事を自慢げに後輩に語っている場面も時々目にした。粗野な身振り手振りを交えてその時の状況をわざわざ再現する同輩にも眉をしかめたが、その話に目を輝かせている後輩にも嫌悪を覚えた。
悪だ。
正義の味方に憧れて、強くなる為に幼い頃から武道を続けている。しかし正義を求めて門を叩いた空手部の中にも微細な悪が混じっていた。悟が求めているものは絶対的で完全な正義。汚れのない純白。幼い頃に見た、ブラウン管の向こうで戦っていたヒーロー達のような真の正義。
偽物などいらない。

いつのまにか完全な夜になっていた。
都市部から離れるほど車の数も疎らになり、気が付けば悟の前には一台の車も走っていなかった。赤信号で止まっても後続車は来ない。
静かな夜だった。
この後、家に帰って風呂に入って夕食をとる。それから香那と電話で喋ってから煙草を一本だけ吸ってベッドで眠る。それが悟のいつも通りだ。
眠りに就く前に香那の声を聴くのは本当に気持ちが落ち着く。電話越しでも透明で癖のない澄んだ声。彼女の声には悪の色が全くな

い。街に出ると下品で我の強い女性も少なくないが香那は全く違う。
毎晩何気ない事を香那と話してから眠り、毎朝同じ時間に起きて仕事へ行く。そして同じ時間に帰ってきて電話越しに香那の声を聴いてから眠る。
この単調で穏やかなサイクルが死ぬまで続くのだと悟は思っている。
悟のマンションまでおよそあと十五分。
胸ポケットから煙草を取り出して火を点ける。箱の中にはあと一本だけ残っていた。一日五本、まるで医者から処方された薬のように決まった時間にだけ吸うので、いつも悟の煙草はちょうど四日でなくなる。今日がその四日目だった。
窓を開けて換気をすると、冷たい夜の空気が入って来る。秋の匂いがした。
ラジオからは爽やかなクラシック音楽をバックミュージックにした天気予報が流れている。明日の降水確率は〇パーセントで一日中晴れが続くらしい。明日もいつも通り晴れらしい。
天気予報が終わり、アナウンサーの声が神妙なトーンに変わった。この声の調子からすると、小学生の福祉活動の様子や動物園のパンダの話題などではないだろう。
何があったのだろうと、悟は耳をそばだてた。

昨夜、●●市の高架下で男性が仰向けに倒れているのが発見されました。
同日午後十時頃、付近に住む女性から「若い男同士が喧嘩をしている」との通報があり、警察が駆けつけたところ、同市在住の鮫島翔平さん（二十九）が頭から血を流して倒れていました。
警察によりますと、鮫島さんは近くにあった鈍器で何度も頭を殴られていたという事です。
鮫島さんは病院に搬送された後、間もなく死亡が確認されました。
通報した女性は「もう一人の男が走って逃げていった」と証言し

ており、警察は殺人事件として逃げた男の行方を追っています。

悟の息が止まった。

…鮫島。

ラジオから流れるその名前を聞いて悟は愕然とした。それはまさしく昨日悟と会った男、そして悟が正義の鉄槌を下した男の名前だった。

あの後、鮫島は死んだという。

…僕が、殺したんだ。

悟の手がみるみる震えだし、今夜は随分涼しいというのに額から大量の汗が流れ始める。全て冷や汗だ。悟は車を路肩に停めて、ハンドルを握りしめたまま項垂れた。肌の表面が凍るように冷たいのに内側は焼けるように熱くなっている。

―警察は殺人事件として逃げた男の行方を追っています。

―逃げた男の行方を追っています。

―追っています。

アナウンサーの言葉が悟の頭の中で何度も跳ね回る。

警察は正義の味方で、悪者を捕まえるのが仕事だ。そんな事は小さな子供でも知っている。だから警察が追うのは悪者だ。悪者は警察から逃げる。

…それなら、

…僕は、悪なのか。

悟のいつも通りは、少しずつ崩れ始める。

煙草の灰がぽとりと落ちた。

※

夏川奈々瀬が麻衣子の家を訪れたのは六時前だった。

「遅いよー。言ってた時間より三十分も遅れてるじゃない」

先に着いていた小宮くるみは口唇を突き出して文句を言う。そし

て座卓の上にはお決まりのペットボトルが置いてあった。
「ごめんごめん。仕方ないでしょ、特進クラスは毎日七限まで授業があって、場合によっちゃその後に補習まであるんだから」
「あんまり遅いもんだからウーロン茶全部飲んじゃうところだったんだよ」
お茶は関係ないでしょ、と胸の中で呟いて苦笑する奈々瀬。彼女も鞄を置いてカーペットの上に腰を下ろした。
昨日始まったサバイバルゲーム、ポイズンガールはまだ大きな動きを見せていない。ただ科学部の五人は昨日と比べてどこかよそよそしくなったような気がする。相手がどう出るか、お互い探り合っているような緊張感があった。
「あれ、麻衣子は？」
「麻衣子なら台所。奈々瀬がさっき『もうすぐ着く』ってメールくれたときに、紅茶用意してくるって言ってたよ」
随分気が利くのね、と言って奈々瀬は胸元のボタンを一つ開けて手で扇ぐ。九月になって少し涼しくなったものの、ここまで走って来たので汗ばんでしまっていた。
「飲む？」
くるみがいつものウーロン茶を差し出してくる。もう直ぐ紅茶が入るんだから我慢するよ、と言って奈々瀬が断ると、彼女は差し出した手を引っ込めて自分でがぶ飲みした。くるみの喉の音がリズム良く聞こえる。
「それよりこの部屋で一人にされる身にもなってよ。麻衣子は『可愛い可愛い』って言ってるけど、流石にちょっとキツイって」
くるみは膝を抱えて小さく丸まり、辺りをきょろきょろと見回す。
「確かに。麻衣子の趣味はちょっと強烈だからね」
奈々瀬の背後で物音がする。
部屋の中の気配に集中すると、物音がするのは背後だけではない。この部屋のいたる所から物音がする。
麻衣子の部屋には大小さまざまな水槽が所狭しと並んでいる。

彼女はその中の生き物達と共同生活を送っている。水槽と言っても飼っているのは金魚や熱帯魚ではない。金魚が入っている水槽もあると言えばあるのだが、決して金魚をメインとして育てているのではない。あくまでも金魚は他の住民の餌として生かされているだけだ。

カエル、カメ、トカゲ。

果ては一メートル近くあるヘビまで。

多種多様な爬虫類が水槽の中で蠢(うごめ)いている。毒々しい極彩色をしたカエルやとぐろを巻いたヘビを目の前にすると小心者のくるみが怯えるのは勿論、それなりに胆(きも)の座った奈々瀬でさえ尻込みしてしまう。

一般的に忌避される事が多い動物だがこれが麻衣子の趣味で、彼女はホルマリン漬けのカエルの瓶に頬擦りするほど爬虫類を愛好しているのだ。

「流石は爬虫類レディこと水谷麻衣子。強烈だわ」

蠢く黒い影たちに囲まれた奈々瀬は苦笑せざるを得ない。

しばらくしてドアが開く音が聞こえる。麻衣子が部屋に戻ってきた。

「いらっしゃい奈々瀬、遅かったじゃない。あまりに遅いもんだから、くるみがずっと文句言ってたんだよ」

いつも通りの抑揚のない声でそう言った。

まだ制服を着たままの彼女はポットと三つのカップを乗せた盆を両手で持っていた。麻衣子はテーブルに盆を置くと、機械のように全く無駄のない動きでカップを奈々瀬達の前に置いて紅茶を淹れる。仄かに甘いジャスミンの香りがした。

「それにしてもさ、麻衣子も女の子なんだからもっと可愛い物とか置かないの？」

最初に口を開いたのはくるみだ。彼女は小さな爬虫類動物園を見渡して苦い顔をしている。

「可愛い物って？」と麻衣子が返す。

「たとえばクマのぬいぐるみとかさあ、色々あるじゃん」
「ぬいぐるみじゃなくてもカエルとか可愛いじゃない。ぶくぶく顎の下膨らましてる姿とか癒されるよ」
麻衣子は奈々瀬の隣にある水槽に視線を向ける。
六十センチ規格の水槽の中から、紫色の身体に黒い斑点のあるカエルが虚ろな目をして奈々瀬を見ていた。対して奈々瀬も顔を顰めて極彩色のカエルを凝視する。
「何、このカラフルなカエル？」
「ああ、その子？　コバルトヤドクガエルって種類なの」
ヤドクガエル！　と驚いたくるみは座ったまま後ろに飛び退いた。彼女の反応を見た麻衣子は満足げに表情を緩める。一方の奈々瀬は興味深そうに水槽に顔を近付けていた。カエルと奈々瀬の顔は、ガラス越しにくっつきそうになっている。
「何かテレビで聞いた事あるよ、その種類。確か毒があるって…」
「そう。皮膚から分泌される体液にアルカロイド系の神経毒を持つ有毒生物。少量でも血管に入れば大人も死んじゃうの。南米産のカエルで、鏃（やじり）にその体液を塗って狩猟に使われてたからヤドクって名前が付いたんだよ」
麻衣子は何やら難しい事を言っているが、要するに危険な生物だという事らしい。ヤドクガエルがそうであるように、キノコにしても昆虫にしても、自然界で派手な色をしているものに毒があるという事は定説のようだ。
そうだ毒で思い出したけど…。麻衣子はそう口にして奈々瀬達に向き直った。
「もう始めてる？」
「始めてるって、何の話？」
奈々瀬は首を傾げる。
「ポイズンガールだよ。今日で二日目だけど早速もう誰かに毒を仕込んだりしたのかなって思ってね」
そう言って麻衣子は僅かに目を細めた。すると奈々瀬はうーん、

と唸って座椅子の背もたれに体を預ける。
「とりあえず様子見だね。他のメンバーがどう出るか見てから動こうと思う。だからまだ派手な行動はしてないよ」
奈々瀬は人差し指でこめかみをとんと敲いた。すると隣でくるみも、うんうん頷いてポニーテールを揺らしている。穏健派というか小心者の彼女は、奈々瀬のように攻撃の様子を窺っている訳ではなさそうだ。
「麻衣子はもう動き出してるの？」
秘密、と言った麻衣子は湯気の立つカップに薄い口唇を付ける。カップに隠された口元は笑っているようにも見えなくない。眼鏡の奥の瞳からは内面を読み取る事が出来ず、麻衣子という存在がいやに遠く感じた。
もうポイズンガールは始まっている。
今までのロシアンルーレット形式とは違って、日常のありとあらゆる物にハズレが仕掛けられている可能性がある。つまり二十四時間気が抜けない。自分が口にしようとする物、触れようとする物すべてに仕掛けがあるような気がしてきて、ゲーム開始二日目にして早くも気疲れしてきた。
それにしても上手く出来たルールだよね、と麻衣子。彼女はカップをテーブルに置いてから続ける。
「まず一度ハズレを引いても、自分で降参を認めない限り何度でも復帰できるって所が良いよね」
それに対して顔を顰めたのはくるみだった。
「なんで？　何回も復活してくるんだったら、そんなのいつまで経っても決着が着かないじゃん」
「そう、チマチマやってたらその内飽きてくるよね。そこで三ヶ月って期限があるのよ。三か月以内に他の参加者を降参させるには、いつも通りタバスコやワサビなんかでやってる場合じゃないでしょ。このルールには参加者をエスカレートさせる仕掛けが張り巡らされているってワケよ」

奈々瀬は科学部五人の顔を順々に思い浮かべた。幸か不幸か、今回のポイズンガール参加者は、自分を含めて負けず嫌いが揃っていた。誰一人として自ら負けを認める姿を想像出来ない。これは間違いなくエスカレートする事が予想される。

「激辛系じゃいつまでも勝負がつかないって言うけど、じゃあ麻衣子はどういう物を使う気なの」

そうねえ、と呟いた麻衣子はヤドクガエルの水槽に目を向ける。

彼女の視線に気付いた奈々瀬とくるみの表情が警戒を示した。麻衣子の冷たい瞳を見ていると首筋が冷たくなる。

「アンタ何考えてんのよ」

奈々瀬が咎めると麻衣子は小さく息を漏らして微かに笑む。普段、鉄仮面のように表情を変えない麻衣子が少しでも口元を綻ばすと妙に幼く見える。

「冗談よ。いくらなんでもアルカロイドは流石にやり過ぎって事ぐらい私にだって分かるよ」

「当たり前でしょ！」

奈々瀬が顔を顰めて声を荒げても、麻衣子は飄々として片眉を上げた。するとペットボトルを握りしめたくるみが口を開く。

「でも確かにいつも通りの毒じゃ誰も降参なんてしないよね。だからって本物の毒物を使わないにしても、いつものよりもキツイ仕掛けをして病院に運ばれたりなんかしたら…大事になるじゃん」

「だから、その為の遺書でしょ」

麻衣子が無機質に言い放った。

彼女の解釈と無味乾燥な考えに奈々瀬達は寒気を覚えた。しかし麻衣子の言うとおりに解釈すると、遺書の意味が表れてくる。昨日アルマは、遺書は雰囲気作りだと言い切っていたが、やはりその他にも遺書の役割はあるらしい。

ゲームがエスカレートして、たとえ病院に運ばれるような毒を飲んでしまったとしても昨日書いた遺書があれば自殺未遂として片付けられる。そしてゲームは続行される、という事だ。

たとえ誰かが死んでもゲームは止まらない。
「ポイズンガールとは、奈々瀬もまた上手く名付けたものね」
麻衣子は感情のない瞳を奈々瀬に向ける。
麻衣子は友達だ。
しかしここからの三ヶ月に限っては危険な敵の一人だ。麻衣子だけではない、隣にいるくるみにしても同じだ。これからは科学部五人の一挙手一投足に注意を払わなければならない。
仲の良い友達が敵になる。奈々瀬はこのポイズンガールというゲームの本当の意味を知ったような気がした。
「ところで、誰が最後まで残ると思う？」
ふと麻衣子の瞳から冷たさが消えた。つい今まで機械のような冷徹な印象だったのに、もう普段の表情に戻っている。声に抑揚がないのは変わらないが…。彼女の切り替えの速さにはいつも驚かされる。
「奈々瀬なら『優勝は私だ』って言いそうだけど、もし自分以外が最後まで勝ち残るならって考えてね」
腕を組んだ奈々瀬は、再び自分を除いた科学部の顔を思い浮かべる。
ふと隣にいるくるみに目を向けた。
正直くるみが最後まで勝ち残る可能性はないだろうと考える。小心者の上に優しすぎる彼女が、負けず嫌いの他の四人をギブアップさせるような強烈な仕掛けを盛る事は出来ないだろう。
もしくるみが最後の二人まで残るとしたら、逃げて隠れて生き残るパターンが考えられる。彼女の危機察知能力と危機回避能力は小動物並みに発達している。それでも攻撃を仕掛けられない彼女は、やがて罠にかかり負ける。もしくは最後まで逃げ切って引き分け。
とにかく彼女が最後の一人になるイメージが出来ない。
「くるみは誰だと思う？」
そう麻衣子に促されたくるみは、しばらく考えた末に口を開く。
「何となくだけど…アルマのような気がする」

奈々瀬と麻衣子は同時に頷いた。

奥山アルマ。

理数科在籍の彼女は、普通科や特進クラスとはまた違った雰囲気を持っている。

さらに別世界の雰囲気を際立たせているのはその美しい容貌だろう。人形のように整った目鼻立ちに、雪のように白い肌。淡い栗色の髪をした彼女はハーフで、母親がドイツ人らしい。

父親が医者で、彼女自身も幼い頃から医者を志して医者になる為の教育を受けてきた。科学部の中でも最も薬学に精通しているのは彼女で、薬品の扱いにも慣れている。もし、このポイズンガールがエスカレートして本物の薬物まで使用し始めたとしたら間違いなく彼女は脅威になるだろう。

何よりアルマが長けているのは心理戦の強さにある。

従来のロシアンルーレットで勝負している時も、常にポーカーフェイスで全く感情を表に出さない。そして色素の薄い茶色の瞳でこちらをじっと見ているのだ。勝負の時、アルマの考えている事が全く読めない。

きっと彼女は表情一つ変えず食べ物に仕掛けをして、それを誰かが食べる様子を何食わぬ顔で見ているのだろう。いや、確実な勝利を確信した最後の瞬間だけ上品に笑うかもしれない。

普段は気さくで冗談もよく言う普通の女子高生なのだが、そういった心理戦の時に限って全てが一変する。敵に回すと恐ろしい。

アルマが最後まで残る可能性は十分ある。

「確かにアルマは侮れないね。今までのロシアンルーレットでもかなり戦績良いし、勝負掛けてくる時のプレッシャーが普通じゃないもん。奈々瀬もアルマが最後まで残ると思うの？」

アルマは強敵だ。しかし奈々瀬は首を横に振る。奈々瀬にとっての一番の脅威はアルマではない。

「紗季…」とぽつりと呟く。

「やっぱり。奈々瀬はそう言うと思った」

ライバルだもんね、と麻衣子は付け足す。
彼女の傍らにある水槽の中で白いヘビが音もなくオブジェの木に巻きついて、血のように真っ赤な目をこちらに向けた。水槽のヘビは様子を窺っているように奈々瀬の方をじっと見ている。
篠原紗季は蛇の化身だ。
彼女は奈々瀬と同じ特進クラスで、学力テストでも体育の運動能力テストでも、そして科学部のゲームでも全てにおいて奈々瀬と互角だった。周りからはライバル同士と言われ、奈々瀬も紗季の存在をいつも意識していた。しかし紗季はそれ以上だった。
奈々瀬には負けたくない。
その執念が彼女を動かしていた。何かにつけて紗季は奈々瀬と競おうとする。奈々瀬に勝つ事だけを意識して生きていると言っても過言ではない。紗季のような執念深い女は油断ならない。
ふと昨日のゲームで紗季を下した時の事が脳裏を過る。長い黒髪を床に散らばらせて這いつくばる紗季の目を思い出して鳥肌が立った。
それは蛇そのものだった。
紗季は間違いなく奈々瀬を執拗に狙ってくる筈だ。虎視眈々と期を窺って、油断した途端に彼女の毒牙の餌食となってしまうだろう。仮に今度も彼女に勝てたとしても、こちらも無傷では済まないかもしれない。
「紗季は奈々瀬に勝つまで絶対に降参しないだろうね。私達も三年でもう卒業だし、こんなふうにゲームするのも最後になると思う。だから奈々瀬には死んでも勝ちに来ると思うよ」
…死んでも、か。
蛇は首を千切られても、まだ牙を剥いて襲いかかって来ようとする。死んでもという言葉が比喩には聞こえなかった。
「ところで、麻衣子は誰が勝ち残ると思うの？」
話題を進めたのはくるみだった。
自分達の事ばかり話していて、麻衣子の優勝候補者の事を聞いて

いなかった。奈々瀬は甘い香りのジャスミンティーに口を付けて、上目遣いに麻衣子の顔を覗いていた。

麻衣子は、奈々瀬がお茶を飲む様子をじっと見ていた。

「あれ、今日はお砂糖入れないの？　奈々瀬っていつもならアップルティーでもピーチティーでも、お構いなしにお砂糖入れまくるのに」

「うん。だってポイズンガールは始まってるんだからね」

奈々瀬がカップを置いて麻衣子の目を見据える。

すると麻衣子の顔が一気に強張った。平和だった部屋は突然空間が歪んでしまったかのように緊張感が溢れる。何が起こっているのかよく分からない様子のくるみは不思議そうに二人の顔を見比べていた。

奈々瀬は湿った口唇を指で撫でる。

「もともとカップには何も入ってなかったし、同じポットから淹れたのを麻衣子も飲んでるから、このお茶はまず安全なんだよね」

でもね…。奈々瀬がそう付け足そうとすると麻衣子の表情が険しくなった。取り繕おうとしているが、顔の筋肉がぴくりと引き攣るのを隠しきれていない。

奈々瀬は砂糖の小瓶を爪で弾く。

「このお砂糖はちょっと信用できないなあ。麻衣子はお砂糖入れてないし。だいたい麻衣子ってさっきからこの瓶ちらちら見過ぎなんだよね」

指摘された麻衣子はぎこちなく瓶から視線を逸らす。すると、くるみが横から手を伸ばして砂糖の小瓶の蓋を開けた。

「奈々瀬、これ普通のお砂糖じゃない？」

二人の顔色を窺うようなくるみの声。奈々瀬は麻衣子の目をしっかりと捕らえたままくるみに答える。

「この瓶に仕掛けをするなら、ぱっと見た感じではお砂糖じゃないってバレないものにしてある筈だよ。だってお砂糖を入れるのは私だし、見ただけでバレるような物なら仕掛ける意味がないからね」

くるみは瓶の中にある粉末を手に取って恐る恐る舐めてみる。
「塩だよこれ！」
やっぱりね、と漏らした奈々瀬は溜息を吐いた。
「こんな事だろうと思ったよ。危ない危ない、気付かずにいつも通りの量を入れてたら海水みたいになってたね…」
そう言って鋭く麻衣子を睨みつける奈々瀬。
すると麻衣子は開き直ったように笑顔を見せた。もともと表情の乏しい彼女がこんなに笑うのは珍しい。
「もうちょっとで上手く引っ掛かると思ったんだけどな。やっぱり奈々瀬はただ者じゃないね。まるで野生動物みたいに常に警戒を解かないもん」
一頻り笑うと彼女はまるで電池が切れてしまったように無表情に戻る。そして麻衣子は静かに口を開いた。
「最後まで勝ち残るのは夏川奈々瀬。あなただと思う」
不意に名前を呼ばれた奈々瀬の耳がぴくりと反応する。
「誰が何と言おうと私は奈々瀬が残ると思う。インパクトでは紗季やアルマの方があるかもしれないけれど、きっと奈々瀬は爪を隠してるんでしょ。いつも私達と一緒にいるけれど奈々瀬だけは別の次元の生き物のような気がする」
「何訳わかんない事言ってるのよ」
苦笑して首を傾げる奈々瀬だが、一方の麻衣子は真剣そのものだ。
「奈々瀬。あなた私達に言えない事…あるでしょ」
…言えない事。
思わず奈々瀬は口籠った。
一瞬強張った奈々瀬を、くるみと麻衣子は見逃さなかった。そして麻衣子は機械のような声で言った。
―私は奈々瀬が一番こわい。
冗談で言っているのではないようだ。麻衣子は至って真面目な表情で奈々瀬を見据えている。
「こわいって、どういう事よ」

「何となくそう思うの。奈々瀬は私達とゲームをしている時、本気じゃないのに本気のふりをしてる。大人が子供相手に遊んでいるような…そんな気がする」
「馬鹿な事言わないでよ。負けたらタバスコだよ、本気に決まってるじゃん。私は常にいっぱいいっぱいだよ！」
しかし麻衣子は怪訝な顔をしていた。うそつき。彼女の目はそう訴えかけているようだった。
三人はふと黙り込んだ。

紅茶が冷めてゆく。
いつまで続くか分からないその気まずい沈黙を破るようにドアが開く。三人は一斉にドアの方を見た。
「あ、お姉ちゃん」
第一声を発したのは麻衣子だった。
「奈々瀬ちゃんとくるみちゃんが来てたのね」
お姉ちゃんと呼ばれた女性は胸の前で小さく手を振った。奈々瀬とくるみは軽く会釈をして、おじゃましてますと答える。
麻衣子の姉は、彼女と同じく眼鏡を掛けていて麻衣子よりも少し長い髪型をしている。麻衣子がそのまま大人になったような感じだ。
「職場の人のお土産でクッキー貰ったんだけど、みんなで食べなよ」
そう言った麻衣子の姉はにんまりと表情を和ませた。
彼女が麻衣子と大きく違う点は、表情が豊かだという事だけだろう。麻衣子の姉はゆっくりとした動作でテーブルにクッキーの缶を置いた。細身のジーンズに包まれたすらりと長い脚、薄手のニットに浮き上がる胸の形。大人の身体だ。
奈々瀬はこっそり自分の胸を触って、少し落胆した。
「アーモンドが乗ってるのは数が少ないから早い者勝ちだよ」
麻衣子の姉が缶の箱を開けると、様々な種類の高級そうなクッキーが詰まっていた。くるみは真っ先にアーモンド入りのクッキーを手に取った。今度は麻衣子が用意したものではないので何の仕掛け

もされていないだろうと、奈々瀬も一つ手を伸ばした。
全員がクッキーを口に含むと、また沈黙が始まった。その静けさに居心地の悪くなった麻衣子は、リモコンを手に取ってテレビをつける。
たとえ誰にも相手をされなくても、テレビは勝手に喋り続けて沈黙を作らないようにしてくれる。奈々瀬は普段あまりテレビを見ないのだが、こういう時テレビもそれなりに便利だと思った。
夕方のニュースが放送されていた。
「あれ？」
頓狂な声を上げたのはくるみだった。
「これって結構近所じゃない？」
調子外れなくるみの言葉で、他の三人もテレビに注意を向ける。画面に映し出される場所には奈々瀬も見覚えがあった。
「学校の裏手の鉄工所だ。ほら、隣に高速道路もあるから間違いないと思う」
人気のない通りを五人程の警察官が何やら調べている映像とキャスターの重々しい口調から、良いニュースでない事は容易に想像出来る。やがてキャスターは殺人事件という言葉を口にする。
「最近物騒になったもんだよね」
クッキーをかじりながら、ブラウン管を見詰めて顔を顰める麻衣子の姉。
昨日の真夜中、工場前の通りで男性が鈍器で殴られて、搬送先の病院で死亡した。通報者の話によると、被害者の鮫島という男が何者かと激しく言い争っていたという話だ。
そこで被害者である鮫島翔平の写真が表示された。
「うわあ、チンピラだねえ」
実にどうでも良さそうな感想を述べたのは麻衣子だ。
「チンピラ同士の喧嘩で死人が出るなんて。平和そうなこの街でも夜はやっぱり危険なんだね」と、麻衣子の姉。
眼鏡の姉妹はテレビに向かってこくりと頷いている。

犯人はまだ捕まっておらず、依然逃走中であるらしい。警察も評判よりは優秀らしく、国内で殺人を犯して時効をむかえた例は極めて少ない。犯人はこのまま逃げ切れると思っているのだろうか。

奈々瀬は興味なさそうにテレビを見ていた。

想定された死

形の悪い月は更に高く昇った。
悟はマンションの近くにある駐車場に車を停めた。しかしエンジンを切ってシートベルトを外しても、まだ車から降りようとしない。彼はそのままハンドルに突っ伏して頭を抱えていた。
…どうしよう。
…どうすれば良い。
先程のニュースを頭の中でしつこいぐらいに反芻する。
あの後、鮫島は死んだ。自分が殴ったから死んだ。自分が殴り殺したのだ。殺した、殺した、殺した、殺した。
殺した。その言葉の持つ事実が死神のように悟の両肩にまとわりつく。少しでも気持ちを落ちつけようと深呼吸をするが、吐くその息は弱々しく小刻みに震えていた。
鮫島は悪い奴だった。
自分を強請(ゆす)り、さらには香那にまで手を出そうとした。あの男は正真正銘の悪だ。真面目に生きている人達に害をもたらす事はあっても、益をもたらす事は断じてない。だから鮫島がこの世に存在する価値などなかった。
殺して何が悪い。
―害虫駆除だ。
いつか誰かが言った言葉をふと思い出した。
鮫島は自分の弱みにつけ込んで寄生して金をせびろうとしていた。まさに害虫、悪そのものではないか。鮫島をあのまま放っておけば香那にも手を出したに違いない。自分は香那を守った正義だ。正義の味方が悪を成敗した。それの何が悪いのだろうか。
悟は必死に自分自身を正当化しようとした。
しかし彼も良識のある大人だ。いかなる理由があろうと殺人は許されないという事ぐらい解っている。

もし本当に自分が正しいと思っていたのだったら、あの時なぜ逃げたのだろうか。自分が正義なのだったらこそこそと逃げる必要などなかった。目撃された時に「悪者をやっつけた」と堂々と言えば良かったのだ。

それが出来なかったという事はやはり悟自身にも悪い事をした自覚があったのだ。そもそも鮫島に脅されていたネタが先月の轢き逃げの一件。

罪を重ねてしまった。一つの罪を隠すのにもう一つの罪で塗り潰したのだ。

悪人。

頭に浮かんだその言葉が自らの胸を貫いた。

荷物を持って車から降りると、外は思っていた以上に肌寒かった。寒く感じるのは気温の所為だけではないだろう。

マンションに帰る道のりにある自動販売機で煙草を買おうと立ち止まる。自動販売機が放つ明るさに悟は思わず身を竦めた。自分はなぜ光に怯えているのか。本来、明るい場所を嫌うのは悪者の筈だろう。自分は悪者を成敗した正義だ。それなのになぜ光から顔を背けようとするのか。

悟は自らにそう語った。

しかし小銭を取り出そうとする悟の指は小刻みに震えていた。

買った煙草をポケットに入れて、悟は足早に夜道を歩いてゆく。無意識に街灯の下を避けながら歩き、マンションの前に着くと鞄から部屋の鍵を取り出した。

エレベーターもない三階建ての小さなワンルームマンション。この二階の角部屋で悟は生活している。

鍵を開けてドアを開けると、身に馴染んだ空気を感じる。帰って来たのだと実感して、ようやく肩の力が抜けた。鞄を床に置き、ネクタイを外すと悟は電気も点けずにそのままベッドに仰向けに倒れ込んだ。

男の一人暮らしにしては整然としている部屋だ。時々来てくれる

香那が整理整頓を手伝ってくれているおかげもあるが、もともとこの部屋には物が少ない。ベッドとテーブルと小型冷蔵庫。それと十四型の小ぶりなテレビぐらいしかなかった。

悟はベッドに倒れたまま、ぴくりとも動かないが目は開いている。まるで死体のようだ。それでも頭の中はどす黒い暴力の記憶が目まぐるしく回転していた。冷たいコンクリートブロックの感触、鮫島の肉の感触がその手に蘇る。

台所の蛇口がリズム良く水滴を零す音を奏でていた。ひたひたひた、と。

真っ暗な部屋の中でデジタル時計の無味乾燥な光がいやに眩しい。悟は恐ろしくて目を閉じる事が出来なかった。目を閉じてしまうと自分の身体を暗闇に飲み込まれてしまうような気がした。闇に染まると悪になる。それが何よりも恐ろしかった。

舌の上がざらざらに乾き出す。

悟は大きな体をのそりと起こして電気を点け、冷蔵庫から麦茶を取り出してコップに注ぎ、それを一気に飲み干して無理矢理喉を潤した。

空になったコップをシンクに置いて、またベッドに戻ってくる。

…香那。

不意に彼女の声を聞きたくなった。普段なら彼女と電話している時間なのだが、どうしても携帯電話に手を伸ばせない。香那の声を聞きたくて堪らないのだが、今日は何も話せないような気がする。

何かあったの？　そう尋ねられるのが恐かった。

悟は再び体を起こしてベッドに腰掛ける。そして本日最後の煙草に火を点けて、肺の深くまで不健康な煙を吸い込んだ。赤く燃える火種から立つ紫煙が真っ直ぐ上に昇り、天井にぶつかって散ってゆく。

一本吸い終わると、ポケットから買ったばかりの煙草を取り出して包みを剥がす。そわそわと落ち着かない手つきでさらに一本取って火を点けた。一日に五本と決めていたにもかかわらず、それはそ

の日六本目の煙草だった。
また少し、いつも通りが崩れた。
煙たくなった部屋を換気しようとガラス戸を開けてベランダに出ると、相変わらずの見晴らしの悪い風景。
洗濯物は今朝仕事前に取り込んでおいたが、エアコン室外機の上に革靴を干したままだった。ベランダにぽつんと靴だけが置いてあると、飛び降り自殺の現場みたいになってしまっている。駐車場から悟の部屋のベランダを見た人も、もしかすると同じような事を思ったのだろうか。
隣のコインパーキングが見える。停めてある白い乗用車のボンネットの上で二匹の野良猫が月光浴をしている。どこか微笑ましい光景に悟は久しぶりに笑顔を見せた。
その時、甲高いインターフォンが鳴った。
突然の音にぎくりとした悟は急いで部屋に戻り煙草の火を消す。
「はーい」と返事をしてもドアの向こうからは何の反応も返って来ない。
…こんな夜にいったい誰が。
時間的に新聞の営業や宗教の勧誘とは考え難い。そうかと言っても連絡もなしに突然訪ねて来るほど仲の良い友人もいない。
「香那かい？」
もしかすると彼女が驚かそうとして訪ねて来たのかもしれない。ここしばらく会っていなかったので、悟はドアの向こうの相手が香那である事を期待していた。
しかし彼の呼び掛けに返事なかった。代わりにインターフォンをもう一度鳴らされる。急かされているようで気分が悪かった。
玄関で恐る恐るドアノブを回し、悟は開きかけた扉の隙間から様子を窺う。そこには背広を着た中年男性と、もう一人若い男が立っていた。二人とも体格が良く、背も悟より少し高い。香那だと期待していた分、気持ちの落差は激しかった。
「笹中悟さんですね」

「ええ、そうですが…何か」
男達は軽く頭を下げると、中年の男の方が「ちょっと宜しいですか」と尋ねてきた。悟は「はぁ」と気のない返事をする。そして男達が胸ポケットから取り出した物を目にした悟は心臓が止まりそうになった。
警察手帳だ。
「少しだけ笹中さんにお伺いしたい事がありましてね」
何でしょうか、と冷静を保ちながら応答しているが既に悟の目の前は真っ白になっていた。刑事たちは自然な動作でドアを開け切って玄関に入って来た。
ベテラン風の中年刑事が指に唾をつけて手帳を捲る。その間も後ろに控えている若い刑事が悟に睨みを利かせていた。この二人には隙がない。
「ええと。鮫島翔平という男を知っていますか?」
…鮫島!
中年刑事は首を傾けて悟の顔を覗き込む。まるで悟の表情の変化を観察しているようで居心地が悪い。悟は一瞬たじろいだ。
焦るな、まだ僕を捕まえに来たと決まった訳じゃない。悟は自分にそう言い聞かせて自らを落ち着かせる。
「確か…さっきニュースで聞いた名前ですが。近所で殺人事件があってんですよね。ブロックで殴られた人でしたっけ」
悟が答えた途端、後ろの若い刑事がぴくりと反応するが、それをベテラン刑事が目で制した。
「ええ、そうです。そこの高架下で起きた事件の被害者の方です。その事で近隣の方に聞き込みを行っているんですよ」
まだ自分に的を絞られていた訳ではなさそうだと悟は胸を撫で下ろした。上手くあしらえば切り抜けられる。そう思っていた時、中年刑事はさらに踏み込んだ質問をして悟を揺さぶってくる。
「笹中さんは直接鮫島さんと面識はないのですか?」
「ありませんね」

堂々と答えると、中年刑事が難しそうな顔をして眉を寄せた。それに連動するように悟の胸の中にも靄がかかる。
「あれ、おかしいですね」
わざとらしい声で言った中年刑事は手帳を睨みながら首を傾げる。
「おかしいって…何がです？」
「いや、実はですね。被害者の鮫島さんの携帯電話を見たら、最後の発信記録が笹中さんの番号になっていたんです。それで少しお話をと思いまして…」
…しまった。
もう目星を付けられていたのか。そう確信した悟の背中にじわりと汗が浮かぶ。ふと顔を上げると二人の刑事がじっくりと悟の顔を観察していた。
「間違い電話でしょ…」
「ちょっと、それは無いと思うんですがね」
「なぜです？」
「鮫島さんの電話にあなたの番号が登録されていたんです、笹中悟というフルネームでね。だから番号の押し間違えで笹中さんの電話に掛かってしまったというのはちょっと考えられないんです」
…余計な事をされた。
脅迫しようとしていた相手の番号をわざわざフルネームで登録するなよ、と悟は内心で叫びたかった。刑事の責めはさらに続く。
「鮫島さんはあなたの番号を登録しているんですよ。番号登録するような人と、本当に面識がないんですか？」
これは聞き込みではなく尋問に変わりつつある。
ベテランの詰問と若手のプレッシャー掛けに晒され続けて、悟の精神力もかなり摩耗してきた。
「少なくとも僕の知り合いに鮫島という人はいません。僕の番号だって、仕事で一方的に登録していたんじゃないですか。例えば販売営業のテレアポとか」
我ながら見え透いた言い訳になってきたと悟は内心で落胆する。

案の定ベテランの耳を誤魔化す事は出来ず、逆に憐れむような目を向けられた。

「ニュースでも流れてたから言いますけど、鮫島さんは無職だったんです。だから仕事で番号を登録というのは、ちょっと…」

形勢はさらに傾いてきた。何も言い返す事が出来なくなってきた悟はぐっと言葉を飲み込んだ。

刑事は眉にしわを寄せたまま続ける。

「ああ、それとね。鮫島さんは何で殴られたんでしたっけ？」

「ブロックでしょ。仕事帰りに車のラジオでニュース聞いていたんですよ。さっきも言いましたけどね」

返答した瞬間、その場の空気が固まった。

誰も口を開こうとしない。すると中年刑事がぎょろりと目を剥いて悟の顔を下から覗き込んだ。

「おかしいですね…笹中さん」

中年刑事が演技臭い困った顔をしている。まるで笑いを堪えているかのような表情に悟は酷く困惑する。

「違うんですか？」

「いえいえ、凶器は間違いなくブロックです。ちょうどマンションの下の駐車場の塀に使われているようなコンクリートブロックですよ。それは間違いありません」

ただね…。

中年刑事は間を開けてからそう呟いた。しかしその続きは勿体ぶったようになかなか言わない。彼らはまた悟の顔を観察している。

後ろの若い刑事が一歩前に詰め寄ろうとする。先程は若手の行動を止めた中年刑事だったが、今度は若手の動きを止めようとはしなかった。分からない所で何かが展開してゆくような事態に悟の冷や汗が止まらない。

やがて刑事が口を開く。

「ただ…凶器は、鈍器としか報道されていない筈なんです。ニュースでもブロックとまで詳しく言ってないんですよ、ねえ」

そんな…。と、声を漏らした悟。二人の刑事が、無言のプレッシャーを掛けて迫ってくる。二人の屈強な男にじっと見詰められている悟は思わず顔を伏せた。

「間違いありませんよ。凶器に関しては警察が報道規制をかけていますから。テレビ、ラジオ、新聞、インターネットでも報道されていないんですね。だから凶器の事を知ってるのは警察関係者と…」

現場にいた人間だけです。そう刑事は付け足した。

…もうお終いだ。

これ以上言い逃れは出来ない。

悟は絶望に打ちひしがれた。冷たくなった体は感覚が麻痺してもう何も感じる事が出来なくなった。

このまま自分は悪のレッテルを張られた殺人犯として、刑務所に入れられて過ごす事になる。最悪のヴィジョンを思い描いた悟は目の前が真っ白になった。

悟の絶望をあざ笑うように、台所の蛇口がひたひたと水滴を垂らしている。

全てが終わった。

「下に車を停めてますんで、続きはそこでお話ししましょうか」

中年刑事は若い刑事に目配せして合図を送る。すると若い刑事は悟に出てくるように促した。

「ちょっと、待ってくれませんか…」

悟の声に、手を伸ばそうとした若い刑事の動きがぴたりと止まる。まだ言い訳をすると思ったのだろうか、彼は厳つい顔をさらに強張らせる。

「部屋の鍵、ジャケットの中なんです」

今更抵抗して逃げるつもりはない。悟はベッドの上に脱ぎ捨てられてあるジャケットを力なく指差した。

「取って来ても、良いですか」

悟の言葉に難渋を示した若い刑事を無言で窘(たしな)めた中年刑事。彼は「どうぞ」と言って手のひらを上に向ける。

「ありがとうございます…」
目を閉じて頭を下げた悟は部屋の中に戻り、大きく息を吐いた。
その吐息は酷く疲れているようで、なお且つ震えている。
…僕はもう、悪者だ。
これから長い取調べがあって、酷い言葉を沢山浴びせられるのだろう。その手に掛けた鮫島も悪人とは言え家族も友達もいた筈だ。
これからは彼らに償う為に生きていかなければならない。
おもむろにジャケットを羽織って覚悟を決める。
その時、テーブルの上の携帯電話が震え出した。
電話が掛かって来たのだ。待たされて苛立っている様子の若い刑事の視線を気にしながら悟は携帯電話を手に取った。
…香那。
愛しい香那からの着信だった。
悟の大きな手の中で、携帯電話はぶるぶると振動し続けている。
早く出て、と願うように悲しそうに震えている。
悟はちらりと刑事達の方を見た。
「恋人からです。ちょっとだけ…ほんのちょっとだけ、出ても良いですか」
険しい顔をして何か言おうとする若い刑事を制したベテラン刑事は、低くて優しい声で「出てあげて下さい」と言った。
悟は目に涙を浮かべて受話ボタンを押して電話を耳にあてた。そして電話の向こうの香那が何かを言い出す前に、二言だけ呟いた。
―香那、ごめんね。
―愛してるよ。
それだけ言って悟は電話を切った。
ポケットに携帯電話をしまった悟は呆然と立ち尽くして今までの半生を思い返す。思えば不器用な生き方ばかりしていた。この世の全てを正義と悪に分けて、徹底的に悪を忌み嫌って生きてきた。
悟の中に白と黒は存在しても、灰色という中途半端なものは存在しない。

そんな不器用で真っ直ぐ過ぎる悟を苦手がって離れてゆく者も少なくなかった。自分の考え方が極端に偏っているというのは悟自身も分かっている。理解されないのなら、されなくても構わないと悟は思っていた。

しかし、それでも香那だけは一緒にいてくれた。

香那は等身大の悟を愛してくれて、不器用な悟の全てを包み込んでくれる。香那の柔らかい身体を抱き締めていると、死んでもこの人を守りたいという気持ちになる。自らの正義の全てを賭けて。

愛してるよ。

最後の電話でそう言ってから、さらに香那への思いが強まった。自分は香那の傍にいて彼女を守り続けなければいけない。自分は香那を守る正義のヒーローでいたい。香那の前では悪の怪人になり下がる訳にはいかない。正義のままでいなければならない。

絶対的な正義のままで…。

また携帯電話が震え始める。

着信は勿論香那からだった。口下手で照れ屋の悟から突然「愛してる」などと言われて困惑しているのだろう。その取り乱した様子で電話を掛け直している香那の姿を想像して、悟の表情が微かに綻んだ。

…香那を、失いたくない。

「おい、早くしなさい！」

若い刑事がとうとう痺れを切らして声を荒げた。

悟は玄関の刑事達に向かって深々と頭を下げる。そして静かに頭を上げると、二人の刑事は怪訝な顔をして悟を見ていた。

「刑事さん…ごめんなさい」

悟は満面の笑顔でそう言った。

…まだ捕まる訳にはいかない。

素早く振り返った悟は弾かれたようにベランダに向かって駆け出した。背後で中年刑事の言葉にならない驚嘆の声が聞こえる。

悟はそのまま室外機の上に干してあった革靴を手に取って、躊躇

なしに勢い良くベランダから飛び出した。
ふわりと宙に浮く身体。
真っ暗な闇の世界に飛び込んだ悟。真っ黒な悪の世界に飛び込んだ悟。
駐車場に停めてある車の白いルーフがゆっくりと近付いてくる。
驚いて逃げようとする猫、後ろで聞こえる若い刑事の怒鳴り声。全てがスローモーションに感じた。
悟はルーフに着地した。その衝撃で耳が割れるような大きな音が夜の住宅地に響く。上手く受け身を取った悟は身を翻して地面に降りた。そして靴も履かないまま一目散に駆け出す、さらなる暗黒が待つ世界に向かって。
――待て！
――絶対に逃がさねえからな！
背後から中年刑事のしゃがれた声がした。それでも悟は振り返る事もせずに、がむしゃらに走り出した。
何も見えない暗闇に向かって、目的地もないままただ全力で走る。とにかくこの場から一歩でも遠くに行かなければならないと本能が言っている。夜の空気が、溶けたバターのように悟の身体にまとわりつく。それを振り払うように必死で走った。
自宅の方から階段を駆け下りる騒がしい物音が聞こえる。
その音を聞いて悟の心臓は破れてしまいそうな程に鼓動する。血相を変えた刑事達がもう真後ろまで迫ってきているのかも知れないと思うと、恐ろしくて振り返る事が出来なかった。
走れ！
頭の中で誰かが叫んだ。その声に従って悟は走り続ける。素足に石が食い込んでもひたすら走る。
悟は走る、自らの愛を貫く為に。
悟は走る、自らの正義を守る為に。

※

同じ制服を着た少女の群れの中に奈々瀬とくるみもいた。
河川沿いの堤防が通学路になっていて、朝のこの時間は紙町女子高校の生徒が行列を作って歩いている。
奈々瀬は歩きながら大きく息を吸う。水と河原の草が混じり合った匂いが爽やかな朝を演出してくれていた。
おはよう。
何気ないあいさつの言葉が周りで交わされている。それで昨日と同じように、今日が始まってゆく。おはよう、その言葉は昨日と変わらない退屈で平和な一日が、今日にも訪れるようになる魔法なのかもしれない。
しかし奈々瀬達にその魔法は効かなかった。
「くるみ、あれから何か変化は？」
するとくるみは目を細め、苦い顔をして答える。
「昨日はねえ、細かいのは色々あったんだけど、サンドイッチに大量ワサビが一番きつかったかな。悶絶しちゃったよ」
「うわぁ、強烈だね。でも犯人、私じゃないからね」
分かってるよ、と言ったくるみは口唇を尖らせた。
「犯人は多分アルマだよ。あの子、理数科のくせに昨日はなぜか普通科の教室ウロウロしてたんだもん」
ポイズンガールは確実に動き始めている。
ここ数日で奈々瀬もかなりの仕掛けをされた。勘の良い奈々瀬は毒が口に入る前にある程度察知出来ていて、被害を最小限に抑えられている。しかしくるみに関してはかなりの被害を受けているらしい。
それでも降参しないくるみには感心させられる。
「アルマは手加減知らない子だからねえ、仕掛ける毒の量も無茶苦茶でしょ」
「そうそう、ホント死ぬかと思ったからね。だから今日からお弁当は持参しない。昼休みまでずっと見張ってなきゃならないもん」

「じゃあお昼どうするの？」
「学食で買ってその場ですぐに食べる！」
くるみは無駄に気合の入った声で言った。
「ルールでは参加者以外への攻撃は禁止でしょ。だから最初から学食のパンに仕掛けをしておくような無差別攻撃は出来ないじゃん。つまり、その場で食べてしまえば確実に安全なのだー」
一気に喋って喉が渇いたのか、彼女は鞄からいつものペットボトルを取り出した。食べ物は持って来ないようにしたがウーロン茶は持参しているらしい。
自信満々の表情で鼻を鳴らすくるみを見て奈々瀬は溜息をついた。
「何だよ奈々瀬。この作戦にケチつける気？」
「いやいや、その作戦は良いと思うんだけどさ、そんな事もう誰だって気付いてるよ。私だって初日からそうしてるし、麻衣子なんか昼ごはん食べないぐらいだよ」
そうだったの、と呟いたくるみは眉尻を下げて固まった。
奈々瀬達は消耗していた。今までのロシアンルーレット形式とは違って「どちらに」「どれに」ではなく、「何に」毒が入っているか分からない状況が彼女達の精神を大きく削り続けている。
「ところで、奈々瀬はもう動いてるの？」
「うーん。今の所とりあえず様子見かな。仕掛けようにも皆なかなか隙がないし、今までみたいに一緒にいる時間も減ったしね」
奈々瀬は空を見上げて目を細める。
科学部メンバー同士の関わりは希薄なものになっていた。廊下ですれ違ったりしたときには話したりもするが、今までのように一緒に遊んだりはしなくなっていた。
仲が悪くなったり関心がなくなった訳ではない。むしろ今まで以上にお互いを意識するようになっている。奈々瀬自身も今、目の前にいない紗季とアルマと麻衣子の事が気になって仕方がない。こうしている間にも何か仕掛けられていたらと考えると気が休まらない。彼女達が今どこで何をしているのだろうと頭の中で想像と予想が膨

らむ。
お互いが敵。
仲が悪くなった訳ではないが、お互いに敵同士だ。
ゲーム開始から三日が経った。今まではお互いに探りを入れていて、特に目立った行動はしていなかった。しかしそれぞれの警戒心も高まり、ガードも固くなった所でそろそろ新しい展開が起こるかもしれない。
「くるみ。今日からは本当に気を付けた方が良いと思う」
「分かってるって。だから今日から学食のパンしか食べないって言ってるじゃん。私の口に毒が入るって事はもうないよ」
「甘いよ、くるみ」
奈々瀬はくるみの言葉に割り込んだ。くるみは目を丸くして顔全体に疑問符を浮かべている。彼女は分かっていないようだ。
「くるみも含めて私たち全員、食べ物には気を付けてるでしょ。極端な話、このまま全員学校で何も食べないようになったらどうする？」
それは、と呟いたくるみは難しい顔をして腕を組む。
「決着が着かないまま全員引き分けとか？」
面白くないよー、と眉を寄せるくるみ。その様子を見ていた奈々瀬は重たい口調で呟いた。
「それで引き分けなら、良いんだけどね」
くるみは怪訝な顔をして奈々瀬の顔を覗く。
「引き分けになるどころか、もっとエスカレートするパターンもあるよ。むしろそっちの方が起こるかもしれない。私が思い付いたんだから他の誰かも思い付いてる筈だよ、実行するかどうかは別としてね」
「なになに、もう。真剣な顔しちゃって。何か知ってるならもったいぶってないで早く教えてよ。だいたい誰もご飯食べないんじゃ仕掛けようないって」
くるみは妙に早口になっている。奈々瀬はゆっくりとくるみの目

を見た。そして彼女は静かに口にする。
「毒ってさ、別に口からじゃなくても良いんじゃない？」
目を丸くするくるみ。
その瞬間、二人の耳には周りを歩く他の女生徒達の喋り声が全く届かなくなった。まるで別世界に隔離されたようだった。
「ルール思い出してみてよ。一つ目に『日常生活中、参加者同士で毒を仕掛ける』ってあったでしょ。食べ物にしか仕掛けられないってって決まりはないんだよ」
「え、じゃあご飯食べなくても危ないじゃん！」
小さく頷く奈々瀬は続ける。
「皮膚の上から、傷口から、粘膜から。ルールで禁止されていないって事は、体に毒が沁み込めばどこからでも良いって事なんだよ」
「でも口からじゃないと、あんまりダメージなさそうだね」
「何言ってんの、逆よ。口からだと消化器を通るからある程度まで無毒化できるけど、口以外はそうはいかない。場合によっては口以外の方がはるかにダメージ大きいよ」
納得いかなそうに首を傾げるくるみ。いまいちイメージが湧かないのだろう。くるみに想像しやすいように説明してやる必要がある。
「確かくるみってコンタクトしてたよね」
「してるよ。それがどうしたの？」
「って事は疲れ目用の目薬も持ってるよね。もしその中にタバスコでも入れられてたらどうする？」
その言葉を聞いた途端くるみは竦み上がった。そんな目薬が目に入った場面を想像しているのか、彼女はきつく目を閉じて激しく顔を振る。それに合わせて彼女のツインテールも勢いよく跳ねる。
「ルールに付け加えがあったでしょ『ワサビでもタバスコでも何でも可』って。何でも使って良いんだよ。タバスコがちょっと目に入っても失明まではしないかもしれないけど、仮にこれが漂白剤とかだったら…」
「そんな…死んじゃうよ」

くるみの幼い顔が歪んでゆく。
「目に漂白剤で死んだりはしないと思うけど、もし仮に死んじゃったりしても…私達、遺書書いちゃったじゃん」
奈々瀬がそう言うと、くるみはみるみる青ざめてゆく。
あの時書いた遺書はポイズンガールへの参加表明書であり死の同意書でもある。ゲームの先にある死という可能性がちらりとくるみの脳裏を過ったのだろう。彼女は恐ろしいイメージを振り払うように再び頭を振って、そしてウーロン茶をごくごくと飲む。
やがて紙町女子高校が見えてきた。堤防を歩く生徒達の列は砂糖菓子を目指す蟻のように真っ直ぐ正門をくぐってゆく。
あの門をくぐれば今日もいつもと同じ校舎が見える。しかし、あの門を過ぎれば今日も何が起こるか分からない。
門の前で一瞬立ち止まったくるみの肩を励ますように優しく叩いた奈々瀬は「行こう」と耳元でささやいて促した。
そろそろゲームは動き出すだろう。

特進クラスの教室はくるみ達普通科とはフロアが違う。
一緒に階段を上がっていて三階でくるみと別れる時、彼女はどこか寂しそうな顔をしていた。心細そうと言った方が正確かもしれない。くるみは別れ際に細い声でこう言っていた。
じゃあまた昼休みにね、と。
各学年に二つずつある特進クラスの教室は四階に集められている。つまり四階には特進クラス以外の生徒はいない。
普通科の生徒はそんな四階の事を「天上界」と呼ぶらしいが、奈々瀬は自分が天上人のような存在だと思った事などは一度もない。だから嫌味に聞こえるのでその呼び方が好きではない。
四階に上がった途端に真面目そうな生徒しかいなくなるのは確かだ。他のフロアと雰囲気が違うというのは間違いない。
おはよう夏川さん。
廊下を歩いていると奈々瀬と同じ特進クラスの生徒達が上品な声

で朝のあいさつをしてくる。奈々瀬も「おはよう」と返す。奈々瀬はすれ違う生徒みなに声を掛けられていた。他学年の生徒まであいさつしてくる。

しかし全員が彼女の事を「夏川さん」と呼ぶ。

誰も「奈々瀬」とは呼んでくれない。

特進クラスで奈々瀬は浮いていた。

度のきつい眼鏡を掛けていて、趣味は読書、運動は苦手だが勉強はできる。それが普通科から見た特進クラスのイメージだった。実際そのイメージは的中していて、四階には絵に描いたような真面目少女がごろごろいる。

しかし奈々瀬はそのイメージに該当しない。

視力は両目とも2・0あるので当分眼鏡の世話になる事はない。本を読むのも好きだが、基本的に外に出て活動する方が好きだ。

奈々瀬は中学時代、陸上部に所属していて県大会でも好成績を残している。陸上以外でも、球技も器械体操も何でもそつなくこなす事が出来る。基本的な身体能力では同い年の男子の平均を超えるほどあった。

勉強が出来るという点においては奈々瀬も特進クラスの例に漏れていない。それどころか彼女の成績は学年でトップだった。

奈々瀬は浮いている。

クラスで奈々瀬は一人でいる事が多い。しかしそれは嫌われて避けられているのではなく、何でも出来る奈々瀬に皆近付き難いのだ。特進クラスの生徒達はいつも遠くから羨望の眼差しを向けている。

奈々瀬本人は勉強や運動が出来るからと言って気取ったりはしないのだが、どうしても周りは「特別な子」という目で見てくる。結果、奈々瀬とは皆一歩退いて接するようになっていた。彼女はそれがあまり好きではなかった。

特進クラスは「S？」と「S？」というクラス分けになっていて、奈々瀬はS？の象徴として他学年からも憧れられている。

しかし何も奈々瀬だけがずば抜けている訳ではない。一学期末は

学年トップを取った奈々瀬だったが、中間では二位だった。
一学期末で二位、中間で一位だったのが、紗季。
彼女と奈々瀬が常に一位二位争いをしている。あまり奈々瀬はこだわっていないようだが、紗季は何かと奈々瀬に張り合ってくる。
いつの間にか「S?の篠原紗季」「S?の夏川奈々瀬」という構図が完成していて、何かある度に比較されて話題になった。奈々瀬はあまり注目されても恥ずかしいので少し迷惑に思っていた。
紗季だけは彼女の事を「奈々瀬」と呼ぶ。紗季だけは奈々瀬を特別扱いしない。特進クラスに友達と呼べる者は紗季しかいなかった。
教室に入り、自分の席に鞄を置いた奈々瀬。
近くの席でお喋りしていた三つ編みのクラスメイトが「おはよう」と声を掛けてきたので、奈々瀬もあいさつを返してにっこり笑った。
もう一人のショートヘアの子も小さく手を振ってくる。
「ちょっと寒くなってきたね」
「うん。いよいよ夏も終わりって感じかな」
「確かにそんな感じ。夏川さんも風邪ひかないようにね」
「ありがとう」
何て無機質なのだろう。
何て形式的な会話なのだろう。
奈々瀬との会話はそれでお終い。三つ編みとショートヘアは再び自分達の会話に戻っていった。彼女達は昨日のテレビ番組の話をしているが、奈々瀬はその話題には入る事が出来ないらしい。奈々瀬が会話を許されているのはあいさつとお座なりの世間話だけ。本当にそれだけだった。
なぜなら奈々瀬はあくまでもS?の象徴だから。
象徴である彼女には人格を与えられていない。皆の中で奈々瀬に私的な事など存在しないのだ。奈々瀬という存在は崇拝すべき偶像だった。
奈々瀬は席に着いて鞄を開けた。一時間目の準備をしようと英文法の教科書を取り出している所で、彼女はぽつりと声を漏らした。

「あ、しまった…」
彼女が顔をしかめて紙をかき上げていると、隣の席にいたショートヘアが心配そうに声を掛けてきた。
「どうしたの？」
「いやあ、ノート持ってくるの忘れちゃったんだよね」
やっちゃったよ、と苦笑する奈々瀬を見て三つ編みが目を丸くしていた。
「へえ…夏川さんでも忘れ物する事あるんだね」
…あるよ、人間なんだから。
「じゃあ一枚あげるよ」
そう言って三つ編みは自分のノートのページを一枚破ろうと手を添えた。すると奈々瀬は慌てて「いいからいいから」とれを制した。
「気持ちは嬉しいんだけど、破ったらノートが解(ほつ)れちゃうじゃん。それは流石に悪いよ。確か理科準備室に新品のルーズリーフ置きっぱなしだったから、ちょっとダッシュで取って来るわ」
奈々瀬は二人に両手のひらを向けて立ち上がった。
「いいの？」と三つ編み。
「気にしないで」
「何か困った事があったらまたいつでも言ってよ」とショートヘア。
「うん、ありがとう」
お決まりの締め言葉。毒にも薬にもならない言葉で彼女の会話は締め括られた。
やはり距離を感じる。
奈々瀬はせかせかと歩き始めた。
勉強出来る事は悪い事なのだろうか、運動神経が良いのも避けられる要素なのだろうか。もし自分も普通の女の子だったら、クラスの皆ももっと気軽に話しかけてくれるのだろうか。ぎこちなく視線を逸らされたりしないだろうか。
もし…普通だったら。
…普通って何だろう。

奈々瀬は普通という意味が分からなかった。皆と同じような物を好み、皆と同じような平均的な成績で、皆で同じルールを守り、皆と同じような人生を歩む。それが普通というものなのだろうか。

そうだとすれば、奈々瀬は普通にはなれない。

今から五年前、中学一年の秋。彼女の身に起きた惨劇を目にした時から、奈々瀬は普通に生きられない運命になっていた。

奈々瀬は廊下ですれ違う生徒の顔をちらりと覗いてゆく。この紙町女子高校の、特に特進クラスの生徒は皆純粋そうな瞳をしている。汚い物や穢い物を一度も見た事のないような澄んだ瞳だ。まるで曇りのないガラスのようだ。

きっと「見た事」がないのだろう。しかしそれも当たり前だ。普通に生きていれば、滅多に目にするような事ではないのだから。

人が死ぬところなど…。

奈々瀬は普通に生きている。しかし奈々瀬の中での普通は他の人と比べて大きく歪んでしまっていた。

あの日から…。

階段を下りて、三階フロアの突き当りに理科準備室はある。三階を特進クラスの生徒が歩いていると目立つ。しかもそれが「S?の夏川奈々瀬」ならなおさらだ。無数の視線がちくちくと奈々瀬に突き刺さる。

普通科の生徒の視線は、特進クラスの控えめなそれとは違う。奈々瀬に向けられているのは純粋な好奇の視線だ。

足早に、半ば小走りに廊下を進んで、廊下突き当りにある理科準備室の扉を開いた。

ゲームが始まって以来、科学部同士で集まる事もなくなっていたので久しぶりに入る準備室だった。掃除をした日が最後だっただろうか。

外の世界から切り取られたように静かだ。

見慣れた準備室は整然としていて、三日前に整理整頓した時のままになっていた。カーテンを開きっぱなしの窓から射し込む朝日に、

きらきらと舞う埃が光っている。
だれも使わなくても埃は溜まるのか、いやむしろ誰も使わないからこそ埃が溜まっているのだろう。
…確かルーズリーフは。
奈々瀬は背伸びして本棚の一番上の段を調べている。並ぶ本の背を指先で触れながら探していくとルーズリーフを探していると直ぐに見つかった。フィルムに包まれたままのそれを取り出して、教室に戻ろうとする。
ちらりと部屋全体を見回した時、奈々瀬は微妙な違和感を覚えた。
…何だろう、何か違う。
自分達が掃除した後、授業で理科室を使用したクラスは全学年で見てもなかった筈だ。つまり自分達科学部が最後にここに入った人物だという事になる。だから三日前、最後に視たこの部屋のレイアウトが変化する筈はない。
しかし妙な違和感がある。
ちらりと薬品棚に目を向けた奈々瀬は凍りついた。
…ここは私が掃除したから良く覚えてる。
硫酸、そして水銀。
その二つの瓶が、なくなっている。
二つとも劇薬だ。場合によっては人の命すら奪いかねない危険な薬品だ。三日前は確実にあったが、今はなくなっている。そんなに一気に使い切る薬品でもないので、もしかすると誰かが持ち出した可能性もある。
自分以外の四人の顔が脳裏を過る。
四人の不敵な笑みを想像した瞬間、奈々瀬の心臓はばくんと鳴って跳ね上がった。もし科学部の誰かがそれらの薬品を持ち去っているのなら、このゲームで油断するととんでもない目に遭うかもしれない。
少なくとも薬品を持ち出した人物は、殺す気でゲームをしている。
握りしめていたルーズリーフのフィルムが、いつの間にかくしゃ

くしゃによれてしまっている。その手にじっとりと汗をかいていた。
そして一時間目の始業ベルが鳴り響いた。

午前の授業は特に問題なく終わった。
問題というのはもちろん授業内容が難しいなどという事ではない。誰からの攻撃を受ける事がなかったという意味で「問題」なかった。
昼休みはくるみと一緒に昼食をする事になっていたので、約束通り学食の購買部の前で待っていると、彼女は人混みに流されるようにしてやって来た。
奈々瀬の姿を確認すると背の低いくるみはジャンプしながら手を振っている。奈々瀬も彼女に向かって手を振って応えた。
「遅いよ、くるみ！」
そう声を掛けると彼女はペットボトルを握りしめて一生懸命奈々瀬のもとに駆けてきた。その姿がまるで懐いたウサギのようでどこか微笑ましい。くるみは息を切らしながら奈々瀬の前に立った。ごめんごめん、と言い終わらない内にくるみはペットボトルに口を付ける。
すでに学食は込み合っていた。食券機には長蛇の列が出来ていてテーブルもほとんど埋まってしまっている。僅か五分出遅れただけでこの有り様だ。
奈々瀬は背伸びして奥の方まで見渡す。
「うわあ、混んでるね。中で食べたかったんだけど、これは中庭コースかな」
「ええ、そんなあ。私、完全にハンバーグランチのお腹になってたのに」
遅れてきたのは誰かな、とくるみを睨むと彼女はおずおずと首を竦めた。
「じゃあおにぎりでいいや…」
くるみは小さい身体をさらに小さくしてそう呟く。
誰が言い出した訳でもないのに、学食のテーブルは学年と学科別、

部活別に分かれていた。まるでそれぞれの縄張りが決まっているようだ。上級生になるほど奥のテーブルに座っている。

どうやら科学部の三年は自分達以外には誰もいないらしい。

いつもなら科学部五人で一番奥の円卓を囲んで昼休みが終わるギリギリまでお喋りしているのだが、それももう出来ないようだ。

…そうだ、みんな敵なんだ。

ゲームの緊迫感が彼女達の中を少しずつ裂いている。

奈々瀬は購買で玉子サンドとパックの牛乳を買い、くるみは梅のおにぎりを買ってから食堂のおばちゃんにウーロン茶を補充してもらっていた。

各々の昼食を持って中庭に出ると、昼休みはいつも賑わっている筈の中庭に全く人がいなかった。池で泳ぐ鯉以外に生命の気配がしない。

「あれえ。誰もいないよ」

くるみは難しい顔をして中庭を見渡している。

「あ！」

くるみがベンチの横にある立札を指差した。それには「ハチに注意　近付かないように」と書いてある。

「なるほど、誰もいない訳だ」

ふと辺りを探すと隅にあるプレハブの物置の軒に大きな蜂の巣があり、その周りを数匹の蜂が飛び回っていた。もう夏が終わって蝶や蛾もあまり見なくなったのに、彼らはせっせと巣を守ろうとしている。

生きようとしているのだ。

巣の下の地面には無数の蜂の死体が転がっている。彼らは食べ物の有る無しに関係なく、冬を越せない体の仕組みだというのに、それでもまだ生きようとしているのだ。

もしかすると、もう長く生きられない事は彼ら自身も良く分かっているのかもしれない。それでも必死にあがいて生きようとしている。

自らの運命に抗うように。
「場所変えよっか、刺されても嫌だし」
うん、と返事したくるみはいつの間にか奈々瀬の背後に回っていた。どうやら蜂が恐いらしい。
二人は中庭を後にして運動場脇のベンチまでやって来た。
ここにも誰もいない。どの時間帯でも校舎の影になって日の当たらないこの場所は心なしか他より肌寒いような気がした。昼休みの寂しい運動場には二人の足音以外には何の音もない。耳を澄ますと校舎から生徒の笑い声が仄かに聞こえる程度だ。先程の中庭よりもずっと寂しい。
奈々瀬は金網フェンスにもたれて座り、膝の上に玉子サンドと牛乳を置いた。彼女の隣にくるみもちょこんと腰掛ける。
ほとんど言葉を交わさないまま奈々瀬は玉子サンドの包みを剥がして一口齧ると、乏しい食感の後にマヨネーズの酸味がじわりと口の中に広がる。不味くはないが特別美味しいという訳でもない。値段相応の味だ。
「ところでさ、くるみもこのゲームに参加してるんだよね？」
そうだよ、と返事したくるみは大きく口を開けて梅のおにぎりを齧る。しかしおにぎりは、ネズミに齧られた程度ぐらいしか減っていない。もちろんおにぎりが大きいという事ではなく、彼女の口が小さいのだ。
「分かってるの？　じゃあ私も敵なんだよ」
「だから分かってるって」
無防備な表情でおにぎりを齧るくるみは、さも当然のように答える。彼女の小さな手の中でようやく梅が見えてきた。
あまりに警戒心がない彼女に奈々瀬は少し苛立った。
「じゃあ何で私と一緒にいられるのよ」
するとくるみは口唇の端にご飯粒を付けたまま、丸い目で不思議そうに奈々瀬を見ている。
「何でって、私と奈々瀬は昔から友達じゃん」

くるみは当然でしょうという顔を奈々瀬に向けている。
「アンタ、まさかそれだけの理由で…」
「そうだよ。だって奈々瀬とは幼稚園からずっと一緒でしょ。中学だって三年間ずっと同じクラスだった」
「まあそうだけど、さ」
奈々瀬は怪訝な顔でくるみを見詰めている。
それに対してくるみは相変わらず無害な笑顔でおにぎりを齧り、梅干しの酸っぱさに肩を震わせていた。彼女はせわしなくペットボトルのキャップを開けて、学食で補充してもらったばかりのウーロン茶を喉に流し込む。
そしてくるみは幸せな溜息を吐いた。
「私は奈々瀬と違って頭も良くないし運動神経もないけどさ、それでも奈々瀬は私と一緒にいてくれた。私はそれがすっごい嬉しいんだよ」
「何なのよ。急に…」
「中学の地区総合体育大会の時、奈々瀬はハードル走で優勝したよね。私、競技場まで一人で観に行ってたんだよ」
「マジで！」
奈々瀬の頬が少し赤らんだ。
「マジだよ。恥ずかしいから来ないで良いって奈々瀬は言ってたけど、どうしても気になったからこっそり観に行ったんだ。他の中学のエースがいっぱい出てる中で奈々瀬はぶっちぎり一位でゴールしたんだよね。確か大会新記録だっけ。あの時の奈々瀬はホントにカッコよかったなあ」
「やめてよ、照れ臭いから」
奈々瀬の手の中で玉子サンドが温かくなっていた。
「奈々瀬がカッコいいのはその時だけじゃないよ。小学校の運動会でも大活躍だし、私が男の子にチビって言われてからかわれてた時もいつも守ってくれた。奈々瀬は私の親友で、私の憧れ」
奈々瀬は私の正義のヒーローだよ。くるみはそう結んでまたおに

ぎりに口を付けた。いつの間にか彼女は半分以上食べてしまっていた。

いつの間にか自分の方が食べるのが遅くなっていると気付いた奈々瀬は残っていた玉子サンドを口に放り込んで咀嚼する。

「正義のヒーローって…。馬鹿の事言わないでよ」

…正義？

…私が一番似合わない言葉でしょ。

「だからゲーム中でも私は奈々瀬と一緒にいるつもりだよ。今回のゲームも私は奈々瀬が優勝すると思ってるしさ。奈々瀬が優勝するように協力するつもりだよ」

くるみは手に残ったおにぎりを一気に口に放り込んだ。それを胃に流し込もうとペットボトルのキャップを開けたが、彼女の小さな手からキャップが零れ落ちた。あっ、と声を漏らして前屈みになったくるみだったが、キャップは彼女から逃げるように地面を転がってゆく。

二人はキャップの行先を目で追ってゆく。ころころ転がるキャップはやがて誰かの足にぶつかって止まった。

奈々瀬はゆっくりと視線を上げてゆく。

そこに立っていたのは篠原紗季だった。

薄く微笑んだ紗季は音も無くゆっくりとした動作でキャップを拾い上げる。屈み込んだ動きに合わせて、彼女の長い黒髪がはらはらと肩から零(こぼ)れてゆく。

「紗季！」

奈々瀬は身構えた。彼女は蛇だ。紗季はこのゲームで最も危険になる人物だと奈々瀬は考えている。

紗季は下目遣いに二人を見比べた。

「やだなあ、そんなに警戒しなくても良いじゃん。私だってまだこのゲームの事は探り探りなんだからさ」

目を細めた紗季は拾ったキャップを差し出してくる。するとくるみが奪い取るようにしてキャップを取り返し、慌てて蓋を閉めた。

その態度に一瞬顔を歪めた紗季だったが、すぐに不敵な笑みに戻った。

「あら、つれないのね。くるみったら」

紗季はくるみの目をじっと見ている。

くるみは即座に紗季から距離を取って、奈々瀬の隣に戻ってきた。普段は楽観的なくるみも、まるで蛇を恐れるネズミの本能のように、紗季の発する禍々しい瘴気のようなものに警戒したようだ。

奈々瀬も警戒態勢を取る。

「何の用なの…」

「用？　別に何もないけど。ちょっと見かけたから話し掛けただけ」

友達なんだから別に普通じゃん。紗季はそう続けて口唇に人差し指を置いた。

「奈々瀬。アンタ楽しんでる？」

「何を？」

ゲームに決まってるでしょ、と答えた紗季は軽く両手を広げた。それは不吉をもたらす凶鳥が両翼を広げているようだ。

「それにしてもドキドキだよね。生きてるって感じを改めて実感するわ。準備室で例の紙切れを見付けてくれた奈々瀬には本当に感謝してるんだよ」

「何言ってるんだよお！」とくるみが言った。

「今アンタ達ご飯食べてたでしょ。美味しいよね、ご飯。私もポイズンガールを始めてからご飯が美味しいんだよ。お皿を見て、もしかしたらこの中に自分を死に追いやる程の毒を入れられてるかもって思いながら食べるでしょ」

恍惚の表情を浮かべる紗季は湿った舌で唇を舐める。

「もしかしたら私これで死んじゃうかもって考えながら口に運んでね、良く噛んでも何も変な味がしなかったとき、ああ私って生きてるんだって味がするんだ」

生命の味だよ、と紗季は強調した。

「生きてるって、ちょっと言い過ぎじゃないの」と奈々瀬は首を傾

げる。
　すると紗季はさらに不思議そうな顔で奈々瀬達を見た。
「どうして？　みんなそういう覚悟でやってるんじゃないの？」
「覚悟って？」
「殺される覚悟じゃん」
　紗季が言葉を発した瞬間、奈々瀬の背筋が凍った。
　紗季は平然と言ってのけたが、冗談で言っている訳ではない。彼女は死を当然のように受け入れている。
「だってみんなであの時書いた遺書ってそういう意味でしょ？　今私達がやっているのは死を想定したゲームなんだよ」
　そう言って紗季は奈々瀬に顔を近付けた。紗季の顔は近くで見ても整っていて肌も陶器のようにきめ細かい。その綺麗さが今はどこか怖ろしげだ。
　奈々瀬も一歩も退かずに紗季の目を見据える。
「私はアンタと殺し合いをする為にゲームに参加したんじゃない」
「確かに殺し合いが目的じゃないよ。でも結果的に死が付きまとうって事なの。どんなスポーツでもそうでしょ。試合中でも練習中でも常に死は直ぐ隣り合わせ」
　紗季は奈々瀬の目元に掛かった髪に息を吹きかけて、じっと瞳を覗き込んでくる。そしてゆっくりと身を引いた。
「これは非日常の環境の中で生命の大切さを再確認する為のゲームなの。その結果、誰かが死んじゃっても仕方ない事なんだよ。私はみんなにもその大切さを味わってほしい」
　そこまで言った紗季はくるみに視線を向ける。
「あと、やらなきゃ自分がやられる弱肉強食の自然の摂理もね。くるみもいつもみたいに逃げてるだけじゃ全員の餌食になっちゃうよ」
　くるみの身体がぴくりと引き攣る。彼女が警戒態勢を取ったのは隣に座っている奈々瀬にも分かった。
「二人は正義の味方って信じる？　馬鹿馬鹿しいよね。この世には正義も悪もありゃしないんだよ。あるのは強者と弱者の違いだけ」

そして紗季は口元だけで薄く笑う。
「ねえ奈々瀬。アンタは勝って強者として生を噛み締めたい？　それとも負けて弱者として生を惜しみたい？」
――はぁ、ワケわかんないよ。
そう言って紗季を遮ったのはくるみだった。
「くるみ…」
奈々瀬が心配そうに彼女を窺う。
不愉快そうな顔をして思い切って口を挟んだのは良いが、どうも落ち着かないようだ。紗季の発する緊張感に耐え切れなくなったのだろう。その証拠に彼女の呼吸は僅かに震えている。
「さ、さっきから黙って聞いてたら意味わかんない事ばっかり言っちゃってさ。なにゲームにマジになってんのよ。それに誰が餌食になるって？」
刹那、顔を歪めた紗季だったが直ぐに穏やかな表情に戻ってくるみに答える。
「くるみは直ぐに降参しちゃいそうなんだけどねえ」
「しないよ！」
そう言い放ってくるみは少しだけ奈々瀬に身を寄せた。虚勢を張っていても内心では怯えているのが手に取るように分かる。恐らくそれは紗季にも伝わっているだろう。
「チビだからって馬鹿にするなっつうの！」
くるみは落ち着かない手つきでキャップを開けてウーロン茶をがぶ飲みした。彼女の喉が脈動する様子を紗季はじっと見ている。
またあの蛇のような目だ。
すると紗季はその目を細めた。
「ああ、そうそう。そう言えばさっき、くるみのキャップ拾った時に殺鼠剤仕込んでおいたんだけど、大丈夫かな？」
紗季の顔が邪悪に歪む。
奈々瀬は弾かれたように立ち上がってくるみのペットボトルを払い落とした。アスファルトの上に転がるボトルの口から、泡だった

茶色い水がとくとくと流れ出している。くるみはその場に蹲って酷く咽(むせ)ている。

「痛い！　口がヒリヒリするよぉ！」

目に涙を浮かべるくるみは乱暴に口唇を擦(こす)る。

「吐き出しなさい！」

奈々瀬はくるみの背中を激しく擦(さす)って彼女に胃の中の物を吐かせる。くるみは喉に指を突っ込んで今飲み込んだ毒物を吐き出そうとする。彼女の手は袖口まで涎(よだれ)でべとべとに汚れていた。

愉快そうに二人を見下ろしている紗季を、奈々瀬は鋭く睨みつけた。

「紗季！　アンタ何て事するのよ！」

取り乱した奈々瀬達を見ながら紗季はまるで絵本に出てくる悪い魔女のようにけらけらと笑っている。

「大丈夫大丈夫。本当は香水ちょっと振り掛けただけだから。死にはしないよ」

ちょっと苦かったかもしれないけどね、と言って紗季は両手のひらを上に向けた。くるみはまだ少し咽ながらハアハアと息を整えている。涙目になった彼女の口唇から涎がつうと糸を引いて垂れ下がっている。

紗季がくるみの隣に屈み込むと、くるみは怯えたように身を引き攣らせた。そして紗季は愛おしそうにくるみのツインテールに指を絡める。

「そんなに怖がらないでよ」

紗季はくるみの口唇に人差し指をあてて、べとべとの涎を拭ってやった。

「くるみにも分かったでしょ。ね、美味しいでしょ、生きてるって事は。これからはくるみの大好きなウーロン茶がもっと美味しく感じられるんだよ」

紗季！　と奈々瀬は叫んだ。

すると紗季はゆっくりと立ち上がって、くるみの唾液が絡みつい

た人差し指を口に含んで、それを味わうように舌で撫でた。
その様を見た奈々瀬は金縛りにあったように動けなくなった。
…紗季は、異常だ。
「勝つ事だけが、私は生きてるんだって実感させてくれる。勝たなきゃ私は死んでるのと一緒なのよ」
紗季は自分とくるみの唾液が混じった舌を奈々瀬に見せつけて、恍惚とした表情を浮かべる。
「奈々瀬。私はあなたに勝って生命を味わいたい。極上の生命をね…」
そう言い残して毒蛇は去って行った。
運動場脇の寂しい空間にはくるみのえづく音だけが弱々しく聞こえている。奈々瀬は紗季の背中に目を向けながら軽く口唇を噛んだ。
…死ぬ覚悟が出来てるんだったら、本当に殺してあげようか？
…ついでに。

LD50

蝉が鳴いている。
悟は小豆色のドアの前に立っていた。
薄いドアの向こうから数人の声が聞こえる。大人にしては甲高く、どうやら中学生ぐらいの少年の声のようだ。
その声は愉快に笑っている。
その声は言う。
―うげえ、ホントに取れたよ！
―えっぐいなあ、きゃはは！
蝉が鳴いている。
少年達の声は楽しげで、テレビゲームでもしているかのようだった。夕闇に包まれた閑静な住宅地にその笑い声が響く。
けらけら、と。
吐き気がする。ドアの隙間から生臭い臭いが漏れ出してくるような気がした。悟は息を飲んで立ち尽くした。
…この中で、何が。
蝉が鳴いている。
こみ上げてくる胃酸を無理矢理に嚥下して額から垂れる冷や汗を拭う。意を決した悟はインターフォンを鳴らす。すると少年達の楽しげな声で賑わっていたドアの向こうは、まるで蝋燭の火が消えるように静まり返った。
悟はドアを叩いて叫ぶ。
―警察だ！　ここを開けなさい！
すると、ごそごそと何かが動くような音が聞こえたが直ぐにまた静まった。ドアを隔ててお互いの緊張感が高まる。
階段を上ってくる音がした。大柄な制服警官が階段を駆け上がってきたのだ。警官は悟の顔を認めるや否や直ぐに表札の部屋番号を確認した。

―笹中。ここか、苦情があった部屋は。
―はい。でも何か様子がおかしいんです。
悟はもう一度インターフォンを鳴らしたが、今度は一切反応がない。
蝉が鳴いている。
―留守じゃないのか？
―いえ。先輩が来る前は中で子供の声がしていたんです。一度僕がインターフォンを押してからコレですよ。
悟は憎々しげにドアを睨んで溜息を吐いた。
その時、部屋の中からボトリと床に物を落とす音が聞こえ、続いて「やべっ」という声がした。少年の声だ。
―居留守使ってやがったのか。
舌打ちをした先輩は激しくドアを叩く。
―警察だ！　いるんだったら開けなさい。お宅の部屋がいつもうるさいって苦情が出てるんですよ！
反応はない。
このまま居留守を使って出て来ないつもりだろう。悟は諦め半分にドアノブを回してみる。
すると、鍵が開いていた。
悟はゆっくりとドアを引く。ぎいぎいと錆びた音を立ててドアが開くと、凝っていた空気が一気に外に逃げ出してきた。
食べ物が腐ったような臭いがする。
ゆっくりとスローモーションのようにドアが開き、外の夕日が薄暗い部屋の中に流れ込んだ。汚れた畳の上に散らかるテレビゲーム機や漫画。そして三人の少年の姿が暗闇の中に浮かび上がってくる。黒い世界が徐々に露わになる。
悟は目を見開いて固まった。
蝉が鳴いている。
奥に座っている二人は無表情に、無感情に悟を見ている。そして一番手前で玄関に背を向けて立っている少年は右手に黒く汚れた糸（のこぎり）

鋸を握っていて…。
左手には…左腕を握っていた。
手前の少年は静かに振り返り、他の少年と同じような瞳を悟に向けた。彼は切断面からだらだらと茶色い液体を垂れ流す腕を持って溜息を吐いた。
戦慄する悟はおそるおそる少年の足元に目を遣った。畳の上に青いビニールプールが広げてある。その中に肌の変色した幼い子供が、打ち捨てられたように全裸で横たわっていた。
恐らく男の子だろう。げっそり痩せて手足もマッチ棒のように細く、全身に青痣と火傷痕がある。
そして左腕がない。
―あ、あ…。
悟は震えて声も出せない。
その代りに、蝉が鳴いている。
先輩も悟と同じようにただ立ち尽くしているだけで、部屋の中に広がる異世界を見詰めている事しか出来ないようだった。すると手前にいた少年が左腕の断面を眺めながら、困った顔をして鼻で笑った。
―見つかっちゃったなあ。
少年はけらけらと無邪気に笑い出す。すると他の二人も釣られて笑い出した。惨殺死体を前にして無邪気に笑う少年達の姿はまさに異常だった。
―ホント、もうちょっとで上手く隠せたのに。
―でも実験成功したんだし良いんじゃね？
まるでテレビゲームで負けた時程度の軽さだ。彼らの清々しい表情には全く罪の意識はない。
悟の手がぶるぶると震える、歯もがちがちと鳴る。
…悪だ。
…醜い悪だ。
胸の中にどす黒い憎しみの水が溢れ返る。悪だ、こいつら全員悪

だ。生かしておく訳にはいかない。今すぐ退治しなければ。
殺せ、殺せ、殺せ。
―クソガキ共がぁ！
金縛りから解き放たれた悟は咄嗟にガンホルダーに手を掛けて拳銃を引き抜いた。悟の怒声にたじろいで笑うのを止めた子供達はびくりと肩を引き攣らす。
きっと今も、罪の意識を感じたから怯えたのではない。ただ悟の怒鳴り声が恐くて怯えたのだ。彼らに怒りは微塵も伝わっていない。
悟は糸鋸の少年に銃口を向けた。
―笹中ぁ！
怒りに身を任せる悟を、先輩が体を張って押さえ込んで手から拳銃を奪い取った。それでも悟は獰猛な獣のように呻って少年達に飛びかかろうとしている。
それを見ていた少年達は引き攣った笑みを浮かべている。
大人って馬鹿だねえ、彼らの光を宿さない冷めた目はそう言っていた。
―やめろ笹中、落ち着け！　今、署から応援を呼んだから俺達はここで見張ってるだけで良いんだ。だから余計な事はするな！
悟はそれでも暴れ続ける。そして悟は目を剥いて少年達を指差す。
―お前ら自分が子供だからって何でも許されると思ってんだろ。ふざけんな、僕が絶対に許さないからな。お前らみたいな悪者こそ死刑台に送られるべきなんだよ！　そうだ死刑だ！　お前ら全員死刑だ！
死刑だ！　と声を嗄らして叫ぶ悟を先輩が更に強い力で抑える。
―それでも法律がお前らを守るなら、僕がお前らを殺してやる…。
―いい加減にしろ笹中！
先輩大きな拳が悟の頬に叩き込まれた。あまりの衝撃に意識が飛びそうになった悟だったが真っ赤に充血した目で少年達を睨んで叫ぶ。
―お前らなんか地獄へ落ちてしまえ！

蝉が鳴いていた。

◆

歪（いびつ）な月は高く昇る。

息を切らす悟は本能的に人気のない通りを選び、気が付けば導かれるようにして川沿いの堤防を歩いていた。額に汗を滲ませながら、右手に革靴を提げて裸足のまま砂利道をとぼとぼと歩き続ける。

青白い月明かりが眩しい。

自分の姿が照らされるのを嫌った悟は月から顔を背け、堤防を下って河原を歩くようにした。湿った土が素足に伝わる。気持ち悪い。

目の前には彼岸花の群生地が広がっていた。

…ああ、もう秋なんだな。

こんな時になって初めて季節の移り変わりを感じた。月光に照らされた赤い花の群れが悟を誘っている。

膝の高さまで伸びた彼岸花達をかき分けながら悟は歩いた。

見渡す限りの赤の真ん中に立ってぼんやりと夜空を見上げた悟はポケットから携帯電話を取り出す。七件の着信があり、その内六件は香那からでもう一件は知らない番号からだった。恐らく自分を追う警察からだろう。

市街地とを結ぶ紙町大橋の下に身を隠すように腰を下ろした悟。

コンクリートが冷たい。品のない落書きだらけの暗い橋の下で悟は膝を抱えている。日の当たらないこの空間は悪がいるべき場所だ。悟は頭を掻きむしった。

どうして僕はこんな場所にいるのだろう。

悟は煙草に火を点けてから今までの経緯を反芻した。殺人犯として自分が追われているのは鮫島を殺害してしまったからだ。鮫島を殺したのは、彼が自分を脅迫してきて香那にまで手を出されそうだったから。鮫島が脅迫してきたのは、自分が轢き逃げをしたのを見られたから。

結局は自らの過ちの所為だ。
…やはり僕は、悪なのか。
今の自分にこの薄汚い橋の下が似合っているような気がして吐き気がした。今の自分はどんな顔をしているのだろう。見たくはなかったが知りたかった。
その時、悟の携帯電話が振動した。
突然の事に驚き、慌てて青白く光るディスプレイを確認すると電話が掛かってきている。発信先は香那からだった。
煙草の火をもみ消して受話ボタンを押すと、愛おしい声が悟の名前を呼んだ。
『悟君？　あ、やっと繋がった。今まで何してたの』
いや別に、と悟は口籠った。電話の向こうで、怪訝な顔で首を傾げている香那の姿が容易に想像出来る。
『それよりさ、さっきの電話何だったの。今日の悟君ちょっと変だよ』
「いや、何ていうか、その…急に言いたくなってさ」
愛してるってね、と悟が言うと電話口の向こうで香那のクスッと笑う声が聞こえた。声の感じで分かる。彼女は今ベッドに寝転がっているのだろう。二人並んで寝ていた時と同じ質の声だ。
やっぱり変なの。そう言って香那はまた吹き出した。悟も同じように「変だろ」と言って笑った。
『もう家にいるの？』
悟が答えるまで少し間が空いた。
「まあ、ちょっと外に出てるよ」
そうなんだ。そう答えると香那は黙り込んだ。沈黙を埋めるように、肌寒い風が河原に吹き抜けて彼岸花達を揺らす。
『もしかして、私に隠し事してない？』
「ごめん、ちょっとだけしてるかな…」
悟は小さく苦笑する。
『悟君の事だから浮気なんかしないと思うからまあいいか。コソコ

ソされるよりそうやって堂々と隠し事される方が気持ち良いよ』
「おいおい、堂々と隠し事って何だよ」と悟は顔をしかめた。香那はこうして時々変な言い回しを使う。
『堂々と隠し事…確かに変だね』
香那は電話の向こうでうんうんと頷いているのだろう。その様子を想像して悟の胸は温かくなった。確かな日常がここにはある。しかしこの日常にも、もう別れを告げなくてはならない。そう思うと言葉が続かなかった。
『何か言いたい事があったんじゃないの?』
黙り込んでいた悟を促すように香那が問い掛ける。
「あはは、やっぱり香那は鋭いな」
悟君の考えてる事なら九割は分かるよ、と香那は言う。
…言いたくない。
悟の頭にある言葉を口にしてしまうと、いつも通りの生活が更に遠い所へ行ってしまう事になる。それでも言わなければならない。
「あの、さ。実は…しばらく会えなくなる、かもしれない…」
沈黙。
黙り込んだ香那が何を思っているのか悟には分からない。怒っているのか、驚いているのか、それとも悲しんでいるのか。今回ばかりは彼女の表情を想像できない。風に吹かれた河原の草がざわめき悟の胸を騒がせる。
『ああ、何となくそんな気がしてたんだ』
香那は溜息を漏らした。
しかし怒っているようでも呆れているようでもない。彼女の真意は読み取れないものの悟は少し安心した。泣かれるのが一番辛い。
「理由はあんまり聞いてほしくないんだけどさ、決して香那の事が嫌いになっちゃったワケじゃないよ」
『分かってるよ、そんな事ぐらい』
彼女はいつも通りの口調で言った。そのいつも通りが悟にとっては愛おしかった。

「電話もメールもしばらく出来なくなるかもしれない。また落ち着いたらこっちから連絡するよ」
『分かった。待ってるよ悟君』
「迷惑ばっかりかけてごめんな。今度美味しいパスタでも食べに行こう…」
―愛してる。
最後に二人は同時に言った、まるで合言葉のように。

闇にも目が慣れてきた。
月明かりが眩しいぐらいだ。
携帯電話をしまった悟は身体に破損個所が無いか確認する。二階から飛び降りた上に、素足のままここまで駆けてきたのだから、知らない内にどこか怪我をしている可能性も十分ある。
怪我があるとしたら足だろう。
ぼろぼろに破れた靴下を脱いで両足を確認すると、案の定ガラスや小石が食い込んでズタズタに切れていた。とりあえず突き刺さっていた異物はすべて指で取り除いたが、赤黒い血液がじわじわと滲んでいる。放っておいて化膿してしまっては厄介なので直ぐにでも消毒する必要がある。
靴下の汚れていない部分で血を拭って、形だけの処置は施しておいた。
ジャケットとスラックスのポケットを探って持ち物を確認する。家に帰ってきたままの格好で飛び出したのでろくな物は入っていない。
財布の中には一万円札が二枚。あと使えそうな物は銀行のキャッシュカードぐらいだ。確か口座には八万円程残っている。ジャケットの胸ポケットには煙草とライター、そして携帯電話と仕事用の名刺。キャッシュカードや携帯電話は使えば自分の位置が特定されてしまう。使えそうな物どころか、持っていてはまずい物が多い。
悟は血の滲んだ足で無理矢理革靴を履いて重い腰を上げた。

遠くでパトカーのサイレンが聞こえる。自分を追ってきているのだろうか。念入りに辺りを確認しながら堤防の上に登った。

これからの生活の準備をしなければならない。

橋の近くにあったコンビニに入った悟は電燈の明るさに目を細める。店内に設置された監視カメラがじろじろと視ている。一人暮らしの悟にとって親しみ深いコンビニが、こんなにも居心地が悪いものになるとは夢にも思わなかった。

カメラから顔を背けるようにして店内を進み、ＡＴＭで口座にあるだけの現金を引き出した。これで手持ちの金は十万円。これだけあれば贅沢しなければ逃亡資金として一か月は持つかもしれない。

次に新しい靴下と包帯と消毒液、それと菓子パンを棚から取ってレジに並ぶ。いらっしゃいませと形式的に言って客の顔も見ようとしない無愛想なバイトがレジを打っていたが、逆に今はそんな店員の方が都合が良かった。

トイレ借りて良いですか。そう悟が言うと店員は「どうぞ」と愛想なくトイレの方を指差した。

トイレに監視カメラが無い事を確認し、個室の鍵をかけた悟は水道で足を洗って買ったばかりの消毒液で傷口を念入りに消毒する。トイレットペーパーで血と泥の混じった消毒液を拭き取って新しい靴下を履いた。こまめに消毒して通気性を保っていればその内傷も塞がるだろう。

他に怪我をした箇所がないかと鏡に向かって改めて確認する。明るい所で見るとジャケットが随分汚れている事に気が付いた。脱いで確認すると幸い破れはなかったが、所々埃（ほこり）や砂が付いて白く汚れている。汚いジャケットを着ていては逆に目立ってしまう。悟はジャケットの汚れを手で払い、落ちにくい所は軽く水を付けて拭き取った。

綺麗になったジャケットを羽織り直して再び鏡に向かう。

他に汚れや怪我はないかを探していたが、一番変わった部分は自身の顔だった。ファッションに無頓着な悟は普段から鏡を見る事が

少ないのだが、流石にこの変化には気が付いた。
目は落ち窪んで頬も少しこけたような気がする。老けた、痩せた、そのどちらとも言い表せない。とにかくこの二日で急激に顔立ちが変わっていた。何より大きな変化は瞳から光がなくなっている事だ。
…誰だよ、お前。
洗面台に手を突いた悟は力なく笑った。すると鏡の中の男も同じように笑う。それで、ああ自分なのだと納得する。
あまりの変化に悟自身も鏡の中の人物が誰なのか直ぐに理解できなかった。少なくとも、どこからどう見ても正義の味方には見えない事は確かだ。
ありがとうございますと言われる事なく悟はコンビニを出る。
…これからどうしよう。
まだ遠くでサイレンが聞こえる。悟は逃げるように元いた川の方へ歩いてゆく。暗い方暗い方へと歩いてゆく。
夜の紙町大橋は車通りも少ない。
行くあてはないが、今すべき事は一つ。一刻も早く自分が笹中悟であるという事を捨てなければならない。
悟は橋の上から免許証の入った財布と携帯電話を川に投げ捨てた。これで自分が笹中悟と証明するものはない。
河原から一面の真っ赤な彼岸花がこちらに向かって手を振っている。彼らは笹中悟を弔う花だ。
…笹中悟はもうこの世にいない。
どこか遠くへ逃げよう。
悟は一人川面を見詰めていた。反射した青い月がゆらゆらと形を歪めて浮かび漂っている。悟はコンビニで買った菓子パンを齧った。安っぽい苺ジャムとマーガリンの油っこい味が口の中に広がる。味などどうでも良い。ただ、動ける程度に腹を満たせれば良い。
ふと東北の山奥へ逃げようかと思ったが、以前テレビで「犯罪者は北に逃げる傾向がある」と言っていたのを思い出して却下した。逆に南西諸島の方へフェリーで行こうかと考えたが、それ程の資金

もない。
菓子パンを口の中に放り込んで包み紙をポケットに入れる。
腕時計を見ると時間は十時を回った所だった。まだ十分電車も動いている時間だ。早く行先を決めてしまった方が得策だ、と考えたが直ぐに思い止まった。
恐らく駅には警察が張っている筈だ。だからと言って一旦戻って車を取りに行くのもあり得ない。それこそ家の周りには厳戒態勢が敷かれているだろうし、仮に上手く車に乗れたとしても周辺の道路には検問が設けられている可能性が高い。交通機関を使っての移動はあまりに危険過ぎる。
それでもいつまでも橋の下に隠れている訳にもいかない。こんな所にいるのを見つかれば間違いなく職務質問をされる。
それで、お終い。
それならば人の中に身を隠して様子を見れば良い。悟はゆっくりと川の向こう岸の方に目を向ける。もう夜も更け始めているのにも関わらず、橋の向こうはぼんやりと明るかった。
橋を渡れば夜も眠らない繁華街。
木の葉を隠すなら森の中。下手に遠くへ行くよりも多勢の中に隠れてしまう方が安全だと判断した悟は誘われるように橋を渡り、夜の繁華街にやって来た。
仕事用のスーツで飛び出してきたのは正解だった。同じような服装をした同じような年代の人間が大勢いるおかげで悟の存在も漠としている。森の中で迷彩服を着ているように、夜の街で黒い色のスーツを着ている事は有効だった。
自分が生活していた住宅地とはまるで別世界のような夜の歓楽街。夜でも明るいネオンの街を悟は顔をしかめながら夜の街を歩く。
酔ったサラリーマンの下品な叫び声、コンビニの前にたむろする家出少女、性風俗のキャッチ、道の真ん中を闊歩するヤクザ風の男達。
…悪の巣窟だ。

悟は街自体に嫌悪感を覚えた。どうしてこの街には悪が堂々としているのだろう。悪というものは本来、正義に怯えてびくびくしながら生きている害虫のようなものではないのだろうか。

この街では悪が当たり前のように存在する。

どんな人間でも容易に受け入れてくれる腐った街。そんな中でも悟は肩身の狭い思いをしていた。

この中で、人を殺した事のある者は何人いるだろうか。

悟は肩を落として眠らない街を歩く。途中、風俗の案内所の前を通ると、キャッチにしつこく声を掛けられたが無愛想に無視して通り過ぎた。その度に舌打ちされる。いちいち不愉快な街だ。

この街は自分には合わない。品のない連中に声を掛けられるのが煩わしくなって人通りのない路地に出た。そこはさらに深い暗黒に満ちていた。

街灯もない汚く細い道にはゴミが散乱している。雑居ビルがひしめき合い、壁には刺青スタジオや脱法ドラッグの張り紙がべたべたと貼られていた。雑居ビルのネオンサインには風俗の看板が並んでいる。どれも非常に黒に近いグレーの匂いがした。

時々すれ違う人間もまともな者がいない。ゴミ袋かと思って良く見たらホームレスだったり、酒の瓶を持ったアジア系外国人の二人組がたむろしていたり、大通りより悪の匂いがさらに増している。

気分が悪くなった悟は道の脇に唾を吐いた。

「なあ、背広の兄ちゃん」

黒塗りのワゴン車の隣を通り過ぎた時、背後から声を掛けられた。最初は無視していたが、続けて「アンタだよ、アンタ」と投げ掛けられた。

振り返るとガラの悪そうな若者がワゴン車から降りてきた。悟と同い年か少し年下ぐらいだろう。だぼだぼの上下セットアップの黒いジャージを着ているその男は誰がどう見ても悪人だった。

悟は反射的に身構える。

「おいおい、そんな恐い顔すんなよ兄ちゃん」

妙に友好的な笑顔で男は近付いてくる。馴れ馴れしく肩を組んできた男は「何探してんだよ」と言った。
「探してるって、何の事ですか？」
「隠さなくって良いんだぜ。この時間こんなところ歩いてるって事はコイツを買いに来たんだろ？」
男の口からは仄かに大麻の匂いがする。そして男はポケットから錠剤の五粒入ったジップロックを取り出した。
…ドラッグか。
「最近じゃ高校生だって使ってるけど、コイツはそんな安モンじゃねえよ。ブチ上がるぜ。女に飲ませてセックスするのもアリだ。今日は特別にトモダチ価格で安くしとくよ」
男はにやにや笑いながら悟の目を凝視している。
…誰が友達だよ。ふざけるな。
「悪いけど興味ありません」
悟は男の腕をすり抜けて立ち去ろうとする。しかし「まあそんな事言うなって」と男は悟の肩を掴んだ。
「じゃあ大麻（ガンジャ）とかはどうだ。こっちもなかなか上物だぞ」
…悪だ。
なぜ自分がこんな人間と言葉を交わさなければならないんだ。悟の胸の中で正義の血が拒絶反応を示し出す。
「要らないって」
悟は男を突き飛ばした。男はワゴン車に背中をぶつける。すると一瞬の内に男の形相が怒りに染まった。
「おいコラ、調子乗んなよ」
男は太い腕で悟の胸ぐらを掴む。それを合図にワゴン車のドアが開いて、同じような格好をしたガラの悪い男がもう一人降りてきた。悟はそのままワゴン車のボディに押し付けられて二人の男に囲まれた。
「ナメたマネしてくれてんじゃねえぞ。事務所行くかオイ」
暴力団と思しき組織名を口にしたが、悟は知らない。どうやら彼

らの背後には暴力団関係者が付いているようだ。
群れなければ何も出来ない連中。
悪は必ず群れを作りたがる。
やはりこの世界には、悪が多過ぎる。
「害虫が…」
ぽつりと呟いた悟は男達が反応を見せる前に相手の腕を振り払い、怯んだ黒ジャージの男の鳩尾（みぞおち）に鋭い前蹴りを突き刺した。
呼吸が止まり悲鳴さえ上げられない男は目を見開いて腰を曲げる。
悟は前に一歩踏み込んですかさず顎に膝を見舞い男の顔をかち上げた。苦しげに呻いた男は後ろにのけ反って顔を押さえる。
もう一人の男が反応する前に、悟は素早く体を回転させて男の側頭部に後ろ回し蹴りを叩き込んだ。
遠心力の乗った蹴りをまともに受けた黒ジャージの男は後ろの壁に背中を打ち付けて、そのまま崩れ落ちて気を失った。
ゆっくりと足を引き戻して体勢を整えた悟は深く呼吸をついた。
「お前、ぶっ殺すぞ！」
ようやく動き出したもう一人は懐からナイフを取り出して悟の首元に突きつけた。その切っ先は弱々しく震えている。
「殺す？　そうか、僕を殺すんだな」
悟は一切身じろぎしない。
「こんなものを突き付けて殺すなんて言うって事は、逆に殺される覚悟もあるって事だよな」
悟は震えるナイフの刃を左手で掴んで男の目を真っ直ぐに見詰める。悟の手のひらからひたひたと血が流れる。
「試しに僕に殺されてみるか？」
薄く笑った悟の顔を見て男はみるみる内に青ざめてゆく。
今の悟の表情は、彼が子供の頃に憧れた正義のヒーローとは程遠い。怯えた男はナイフを手放してその場にへたり込んだ。そして化け物を見るような目で悟を見上げて震えていた。
「ホント、下らないよ」

男の足元にナイフを投げ捨て、悟は立ち去る。

悟は歩きながらハンカチで血を拭う。

…出来るだけ目立った事はしたくなかったのに。

近くにあった寂しげな駐車場に身を潜めて、出来たばかりの切り傷の治療を始める。幸いさっきコンビニで買った消毒液と包帯も残っていた。

傷口を確認すると、出血の量の割には思ったよりも傷は深くなかった。消毒して清潔にしておくと直ぐに傷は塞がるだろう。

すると駐車場の前を巡回している制服警官の姿が目に付いた。

…ヤバい！

悟は素早く身を屈めて車の陰に隠れる。息を潜めて警官が立ち去るのを待つ。しばらくして人の気配がなくなると恐る恐る顔を上げた。

悪はこの街に溢れているのに、どうして僕だけがコソコソしなければいけないのだろうか。悟は溜息を吐いた。

僕は悪じゃないのに。

いつまでこんな事を続ければ良いんだろう。

…香那に会いたい。

彼女の顔を思い出した悟は頭を抱えて少しだけ泣いた。

手のひらから流れる血は手首まで滴っていた。腕時計を外して流れた血をハンカチでごしごしと拭き取る。いつの間にかハンカチは悟の血で真っ赤になっていた。

「あー。こんな所にいた」

屈み込んでいる悟の頭上で軽い声がした。男の声だ。不意に声を掛けられた悟は身を引き攣らせる。冷たい汗が背中に滲んだ。

警察か。

そうだとしたらお終いだ。

恐る恐る声の主の足元に目を配る。革のブーツにブラックデニム。どうやら警察ではないようだ。しかしまだ警戒を解く訳にはいかな

い。
　ゆっくりと視線を這わせてゆく。黒いライダースジャケットを気怠く着崩した長髪の若い男が人懐っこい笑顔を見せていた。彼は夜の街がよく似合っている。
「飲みなよ」
　男は缶コーヒーを悟に投げ渡した。悟は反射的に手を構えて受け取った。温かい缶が悟の傷に当たる。
「おっとごめんよ。そう言えば怪我してたよな、手」
　にこにこと柔和な表情のまま男は悟の隣に屈み込んで、自分の缶コーヒーを開けて一口すする。そして男は、悟も飲むように顎で缶を指し示す。悟は難渋を示しながらも小さく頷いて飲み口を開けた。
　悟はじろじろと男の全身を見回している。視線に気付いた男が「ん？」と言って悟の方を見たので、悟は意識して視線を外した。
　男は身を乗り出して悟の顔を覗く。
「見たぜえ。アンタ、ケンカめちゃめちゃ強いんじゃねえか。あんな三段蹴り見た事ねえよ。こっちまで興奮しちゃってさあ、それで付いてきたってワケ」
　悟は溜息を吐いた。
「見てたんですか…」
　まあね、とおどける男は少年のような表情になっている。
「それよりさっきの蹴りって空手？　キックボクシング？　めちゃめちゃカッコイイじゃん。俺にも教えてよ」
　悟は苦笑して誤魔化した。それでも男は気にする事無く続ける。
「実はさ、俺もアイツら気に入らなかったんだわ。不健康な薬ばらまいて金儲けするなんてクソだからな」
　男は快活に笑う。
「俺な、タカトって言うんだ。ツシマタカト」
　九州の対馬に尊敬する人と男は説明した。対馬尊人（つしまたかと）。
「ところでアンタの名前は？」
　悟は「笹中悟」と答えそうになったが口籠った。笹中悟は死んだ

のだ。今の自分に名前などない。黙り込む悟を見て尊人は察したように頷く。
「なるほどね。ワケありって事か…」
ますます気に入ったぜ、と言って尊人は嬉しそうにしている。何が良いのかよく分からないが悟も苦笑して彼に合わせておいた。
「なあ、ナナシさん」
「ナナシ？」
「アンタが名乗らないんだから名無しって呼ぶしかねえじゃん。仕方ねえよ。それよりさ、腹減ってるだろ。今日は気分が良いからオゴってやるよ」
確かに腹は減っている。
しかし逃亡生活中である身であまり人と関わるべきではない。いつ尽きるとも分からない資金の中、食事を奢って貰えるのは魅力的だが顔を知られてしまうというリスクは大きい。
「いや、いいよ。コーヒーだけで十分だ」
すると尊人の表情はしょんぼりと萎れた。まるで子供の用に表情が豊かな男だ。悟からしても不良ぽい見た目はともかくとしてこの男の第一印象は悪くないし、出会い方が違えばもう少し仲良くしても良かったと思う。
「遠慮すんなよ、全部俺が出すから軽く飲もうぜ」
「いやあ、そんな事してくれなくても大丈夫だよ…」
マジかよ、と駄々を捏ねるように長い髪を掻き毟る尊人。その左手首に何か文字が覗いた、マジックで書いたような記号が。
「ちょっと君！」
悟は尊人の左手を掴んで引っ張った。「わわわ、いきなり何すんだよ！」と尊人は驚いている。そして尊人のライダースジャケットの袖を捲る。
「これは…」
尊人の左手首内側にはアルファベットと数字が印字されていた。
『Ｄ－００２１』

…この番号は、もしかして…。
「あちゃー。見られちゃったね」
不審そうな顔をする悟に足して、悟は笑って誤魔化そうとする。
「仕方ねえ。じゃあ俺のヒミツを教えてやるから、気に入ったら仲良くなってくれよな」立ち上がった尊人はポケットからおもむろに安全ピンを取り出した。露わにした針先が月の光を反射させている。
そして尊人は大きく口を開いたかと思うと、自らの舌に針を突き刺した。悟は咄嗟に顔を背ける。突き出した舌は確かに安全ピンが貫通している。それでも尊人は呼吸を乱すどころか、笑顔すら絶やさずにいる。
尊人が安全ピンを引き抜くと、刺さっていた穴からじわりと赤い血が滲んだ。尊人は眉を寄せて赤い唾を地面に吐き捨てる。
「実は俺、痛みを感じない体なんだよね」
無敵のスーパーマンさ、と尊人は歯を見せて笑った。その歯にも少し血が付いていて痛々しい。
…この症状は。
悟は立ち上がって彼の目をじっと見る。
「やっぱり少しお腹減ったかな。」
すると尊人はガッツポーズをして喜んだ。
「それじゃ俺のとっておきの店にごあんなーい！」
尊人は半ば強引に悟と肩を組んで元気な声を上げた。
…痛みを感じなくなる体。
…そしてあの手首に印字されたナンバー。
悟にはその両方に心当たりがあった。
二人はネオンの街に溶けてゆく。

※

毒物。
法医学によると毒物とは、生体に摂取された時に化学的作用によ

って健康を害し、あるいは死に至らしめる化学物質と定義されている。

毒の代表格である青酸カリでなくとも、海水をがぶ飲みすれば塩分過剰摂取で死に至るし、ウィスキーなどの度数の高い酒を一気飲みして急性アルコール中毒で死亡する例も良くある事だ。

つまり量によってはあらゆる物質が毒物になる。

生体に影響を与えるという点では医薬品も十分に毒になる。「どれだけ飲んでも死なない物は薬と呼べない」と提唱する学者もいるぐらいだ。

例えば市販されている風邪薬でもそうだ。丼ぶり一杯分も飲めば含有されている睡眠促進成分の影響で死に至る。これがいわゆる睡眠薬自殺の方法だ。ただし人体は悪影響を及ぼす異物を反射的に体外へ押し出そうとするので、睡眠薬で自殺する場合は薬品に蜂蜜やヨーグルトを混ぜて消化器に馴染み易くする必要がある。

「ホント、何でもある部室だよ」

奈々瀬は読み終わった薬物関連の本を本棚に戻した。

昼休み。学食でいつもお馴染みの玉子サンドを買ってきた奈々瀬は一人で理科準備室に籠っていた。

「要するに分量次第で準備室にあるような薬品でも危険ってワケだ…」

薬品棚には教科書にもよく載っている薬品が並んでいる。比較的危険な硫酸と水銀は既に何者かに持ち去られているのだが、それ以外の薬品でも危険なものは十分にある。例えば硝酸は銅を溶かしてしまう程の強酸性を持っているし、硫黄も農薬に使われているのだから気体にすると危険な筈だ。

学食の前にある自動販売機で買った缶紅茶を開けて喉を潤す。

ほぼ砂糖の味しかしないようなロイヤルミルクティーだが、奈々瀬はまだもう少し甘いぐらいが好みだった。

奈々瀬は温まったスチールの缶から口唇を離した。

中世のヨーロッパでは葡萄酒が親しまれていて、王侯貴族は鉛製

のコップにそれを注いで飲んでいたと言う。しかしコップの鉛成分が酒に溶け出し、それを飲んでいた者は鉛中毒に罹り健康を害した。

金属ですら毒物になり得るのだ。

しかし同じ金属成分が体内に入ると言っても、裁縫針を飲み込んで死亡するのとは訳が違う。それでは金属成分が体に浸透するのではなく、金属の形状によって直接的に体内器官を傷つけられ死亡しているだけだ。これはただの異物の混入であって、毒物とは呼べない。

何より美しくない。

毒は神秘的で華麗でなくてはならない。

人は様々な形で死ぬし、様々な方法で殺される。絞殺、刺殺、撲殺、銃殺と本当にバリエーションに富んでいる。

しかし人を殺すのには直接的な腕力が必要な場合が多く、どれも男性に有利だ。たとえ拳銃を使うにしても、相手と対面しなければいけない訳だし銃自体の重さも非力な女性にとって負担だろう。

だが毒殺は違う。

毒殺の一番の特徴は物理的接触を持たずに相手を殺害できる事だ。知識と計画性があれば相手と一切の接触を持たずに予定通りの時間に殺人を遂行する事も可能だ。毒殺ならば腕力に勝る男性に、女性が不利になる事もない。方法によっては筋肉隆々の巨漢を、か細い女性が音も無く証拠も無く殺害する事も可能なのだ。

奈々瀬はマヨネーズと胡椒のきいた玉子サンドを口に運んで咀嚼する。いつも通りのシンプルな味だ。

…言うなれば毒殺は女性の特権。

…毒物は女の武器。

ミルクティーを飲み終えて缶をゴミ箱に捨てた所で準備室のドアが開いた。音のした方を振り向くと、爬虫類レディこと水谷麻衣子がいた。

「あら奈々瀬か。びっくりした」

とは言っているものの麻衣子の声にも表情にも驚きの色は一切な

い。いつも通りの無表情だ。
「今日はくるみと一緒じゃないの？　珍しいね」
「くるみなら学食に昼ごはん買いに行ったよ。さっき窓から、中庭を走っていくのが見えたから、そのうち帰ってくると思う」
指に付着したマヨネーズを奈々瀬は舌先で舐め取る。
「で、奈々瀬は何してたの？」
準備室のドアを締め、麻衣子は眼鏡を押し上げて奈々瀬を見た。昼休みの理科準備室に科学部のメンバーがぞろぞろと集まってくるのはいつも通りの事だった、ポイズンガールが始まる前までは。
「ちょっと一人で調べ物してた所」と答える奈々瀬。
調べ物？　と麻衣子は抑揚のない声で聞き返してきた。残った玉子サンドを口に入れて頷く奈々瀬は、パンくずを掃って水道で手を洗う。
「うん、薬品について調べてたのよ。実はこないだ紗季が宣戦布告してきてね、あの妖怪蛇女は何しでかすか分からないから防衛策も考えておかないと」
蛇女という言葉に麻衣子は珍しく口元を緩めた。確かにあの篠原紗季を形容するにはこれ以上ない表現だった。
机の上に開かれた植物図鑑にはトリカブトをはじめとする様々な有毒植物が載っている。それを見た麻衣子は僅かに顔をしかめて口を開く。
「いくら紗季でもここまではしないんじゃないの…」
麻衣子の言葉に「いやいやいや」と苦笑して首を横に振る奈々瀬。
「麻衣子も紗季の執念深さを知らない訳じゃないよね。多分、どんな手を使ってでも勝ちに来ると思う。薬品研究所や工場じゃなくても、こんな天然毒なら山の中にちょっと入れば簡単に手に入るでしょ」
奈々瀬は青い花を咲かせたトリカブトの写真に手を乗せた。
一言で毒と言っても、英語圏では毒に対する呼び方が三つもある。ｔｏｘｉｎ（トキシン）、ｖｅｎｏｍ（ヴェノム）、そしてｐｏｉｓｏｎ（ポイズン）だ。アルカロイド系

神経毒のトリカブトやフグ毒などの天然毒をｔｏｘｉｎ。ヘビやサソリが獲物を仕留めるために使用する毒液、いわゆる動物毒をｖｅｎｏｍ。そしてダイオキシンやサリンなど人間が作り出した合成有機化合物をｐｏｉｓｏｎと分類してある。

図鑑を覗き込む麻衣子は眼鏡のブリッジに手を当てた。

「トリカブト…。ＬＤ５０値が１ｍｇ以下の神経毒なんて、ちょっとでも体に入ったら死んじゃうレベルだよ」

「え、エル・ディー・フィフティーって何？」奈々瀬は首を傾げる。

「Ｓ？の夏川奈々瀬にも知らない事ってあるんだね。人間らしいところを見れて何かちょっと安心したなあ」

この手の話は麻衣子やアルマの方が詳しい。麻衣子は奈々瀬の隣に座って図鑑の中の写真を指差す。

「ほら、有毒植物の一つひとつの説明書きにＬＤ５０値って書いてあるでしょ」

麻衣子の言葉に奈々瀬は頷いた。

「リーサル・ドース・フィフティー。簡単に言っちゃえば毒の強さや致死量の目安になる単位だよ。薬物を投与した実験動物の五十パーセント、つまり半数が死ぬ薬量で、それを体重１ｋｇあたりに換算して表すの」

「ふうん。じゃあ数値が低いほど強い毒って事なんだね」

そういう事、と答えた麻衣子は二度深く頷いた。

「例えば体重２０ｇのネズミで実験して半数が死ぬ量が５ｍｇだったとすれば…」

「解った。キログラム換算してＬＤ５０値２５０ｍｇ／ｋｇって事だね。じゃあ同じ薬で体重６０ｋｇの大人を殺そうと思えば少なくとも１５ｇｍ以上必要って事か」

一人で納得したように頷く奈々瀬を見て、麻衣子は薄ら寒さを感じていた。理解の速さも普通ではないが何より彼女が恐ろしく感じたのは、致死量を瞬時に人間に換算していた所だ。

今得た知識は彼女の中で人を殺める方法の一つとして抵抗なく浸

透した。
　体重６０ｋｇとは誰を想定しているのだろうか、と麻衣子は口に出さずに思った。一般的な成人の平均体重の例として考えていたのだと思いたい。
「で、トリカブトは…」
　奈々瀬はトリカブトの毒性を確認する。するとそこにはＬＤ５０値０．３ｍｇ／ｋｇと記されていた。その数値をじっと見詰めている奈々瀬を遮るように麻衣子が口を開く。
「それこそ大人でも１８ｍｇで死んじゃうような猛毒よ。いくら紗季が加減知らずでも、そんな葉一枚ですら危険な物を持ち込んで来るかな」
「その為の遺書なんでしょ」
　奈々瀬の乾いた声に麻衣子の言葉が詰まる。
「この前、麻衣子も言ってたじゃん。全く同じ事を紗季も言ってたよ。このゲームは参加者の死まで想定されてる。危険な毒を使うかどうかは良心次第、ブレーキを掛けるかアクセルを踏むかは自分次第」
　ちなみに紗季にはブレーキなんてないよ、と奈々瀬は言い切る。
「ところでさ、ＬＤ５０値が一番低い毒って何なの？」
「そうねえ。とりあえず一番低いのはボツリヌス菌って食中毒源体が持ってるボツリヌストキシンって毒素かな。確かＬＤ５０値０．０００００１１ｍｇ／ｋｇ」
　何それケタ違いじゃん、と奈々瀬は目を丸くしている。
「ＬＤ５０値だけで考えるなら地上最強の毒素だよ。単純計算すればたった１ｇで二千万人が死ぬぐらいの力があるんだからね。でもあくまでも病原体だから推理小説のトリックの毒みたいな使い方は出来ないけど」
　すると奈々瀬は溜息を吐いた。
「扱いが難しいんじゃ使えないよね。それに入手方法が難し過ぎても駄目だし、だからと言って効果の弱い物だったら量が必要になる

のか…」
　奈々瀬は腕組みをして考え込んでいる。誰にも聞こえないような小さな声でぶつぶつ何かを呟いているのか、彼女の口唇が僅かに動いている。目を閉じて眉間にしわを寄せる彼女は何かのシミュレーションをしているようだ。
　その姿を見ていた麻衣子が表情を曇らせた。
「何考えてるの、奈々瀬」
　静かに目を開けた奈々瀬は麻衣子の方を向く。彼女と目があった瞬間、麻衣子は微かにたじろいだ。
「別に…。色んな毒があるんだなあって思ってただけだよ」
　嘘でしょ、と麻衣子は言う。そして彼女は思い切って言葉を続ける。
「本当は人の殺し方を考えてたんじゃないの？」
　ぱたんと音がする。
　奈々瀬が図鑑を閉じた音だ。彼女は何も答えずに立ち上がり図鑑を本棚に戻しに行こうとする。麻衣子の後ろを通った時、彼女の肩がぴくりと引き攣った。麻衣子には奈々瀬が何を考えているのか判らない。
　奈々瀬は背伸びして最上段の棚に図鑑を戻す。
　そして奈々瀬は麻衣子に向かって微笑んだ。
　その笑顔を見た麻衣子の背筋が凍りついた。奈々瀬のような整った顔の笑みは本当に絵になるが、このような状況の場合は本来の微笑みの効果とは真逆に働く。まさに氷の微笑だった。
「奈々瀬はポイズンガールにあまり興味ないでしょ」
「いや、そんなワケないじゃん」
　他にも読んでいた本を一冊ずつ本棚に戻しながら奈々瀬は答えた。
「ポイズンガールに乗ったふりをして、本当は裏でもっと恐ろしい計画をしてるんじゃないの？」
「私は科学部メンバーに隠し事なんてないよ。ポイズンガールだって正々堂々勝負するつもりだしさ。それに恐ろしい計画っていった

い何よ？」
「例えば…」
例えば？　と聞き返した奈々瀬。
彼女は本を五十音順に並べ直しながら本棚に収めている。その様子を横から見ていた麻衣子はごくりと唾を飲み込んでから言う。
「誰か、本当に殺すつもりなの？」
奈々瀬の手が止まった。
彼女は何も答えない。麻衣子もそれ以上踏み込むことが出来ない。居心地の悪い冷たい沈黙が準備室に満ち始める。すると奈々瀬は細い小指に髪を絡めて耳に掛けた。そしてゆっくりと音も無く麻衣子の方に再び顔を向ける。
彼女の瞳を見た途端、麻衣子の呼吸が止まった。奈々瀬の顔には一切の表情がなくなっている。まるで魂を持たない人形のようだ。
ひみつ…。
そう呟いてから奈々瀬は冗談ぽく笑った。
「私、五時間目が美術なんだ。教室移動とかあるからそろそろ行くね。くるみももう直ぐ戻って来ると思うからヨロシク言っといて！」
奈々瀬は元気良く手を振って準備室から出て行った。
ぴしゃりとドアが閉まると、彼女の圧力から解放された麻衣子は大きく息をした。随分呼吸も乱れている。まるで喉元に包丁を突きつけられているような緊張感だった。
そして麻衣子は思う。
―やっぱり、私は奈々瀬が一番こわい。

七時間目が終わる頃には空も赤くなっていた。
下駄箱でスニーカーに履き替えた奈々瀬は急いで校門に走る。夕暮れの冷たい風が頬を撫でていった。
誰もいない中庭を走り抜ける時、弱々しい羽音が聞こえる。ふと音の方に目を遣ると一匹の蜂が寂しげに飛んでいた。彼の仲間は物置小屋の軒にある巣に群がって家族を守ろうとしている。その下に

は無数の蜂の死骸が転がっていた。死骸は以前見た時よりも増えていた。夏は、完全に終わろうとしている。

門の前には小柄なシルエット。くるみだ。

通学鞄を肩から下げた彼女はペットボトルを握りしめて走ってくる奈々瀬を見据えている。

「遅いよ、奈々瀬」

膨れたくるみはいつも通りの文句を言う。ごめんごめん、といつも通りの言葉を掛けた奈々瀬。笑顔に戻った二人は門をくぐった。

川沿いの通学路にはもう蜻蛉（とんぼ）が飛び交っている。真っ赤な空の下で踊る彼らを見ていると今年も秋が来たのだと改めて実感できる。

しばらく堤防を歩くと紙町大橋が見えてくる。橋を渡ると高層ビルの立ち並ぶ大都会になっていて、奈々瀬達も休みの日には繁華街によく買い物に行く。川を挟んでこちら側は打って変わっての閑静な住宅街。この河川が世界を分け隔てているようだった。

紙町大橋の手前に差し掛かった時、くるみが川の方を向いて立ち止まった。

「うわあ、綺麗な花！」

くるみは子供のようにはしゃいで、転げるように堤防の斜面を下りて行った。川のほとりには気の遠くなるような数の彼岸花が咲いている。目が眩むほどの真紅に染まった光景はとてもこの世のものとは思えなかった。

「ちょっと、くるみ！」

奈々瀬も彼女を追って堤防を下ってゆく。無数の彼岸花に囲まれたくるみはツインテールを揺らしながらくるくると回っている。彼女の黒い髪が真っ赤なキャンバスによく映えていた。

背の高く伸びた彼岸花の花弁が奈々瀬の太腿をくすぐる。くるみは愛おしそうに赤い花を愛でていた。

「あのさあ、確かに綺麗かもしれないけれど彼岸花だよコレ。分かってんの？」

分かってるよー、と言ってくるみはその場に寝転んだ。真っ赤な

花の中に彼女の姿が隠れてしまった。どうやら彼女は綺麗だったら何でも良いらしい。

彼岸花。別名、曼珠沙華（まんじゅしゃげ）。俗称、幽霊花そして地獄花。秋の初めに咲く事から彼岸花と呼ばれているが、これを食べた者は死ぬと言われている事から彼岸花と名付けられたという話もある。

彼岸花は有毒植物だ。

全体にアルカロイド系神経毒であるリコリンを含み、口にした場合には眩暈や吐き気などの症状が表れて、酷い場合には意識が昏倒して死に至る。

くるみは上半身を起こして花の中から顔だけを出した。すると彼女はけほけほと咳込んだ後、ぶるっと身震いした。

「どうしたの、風邪？」

「うん…。何か熱っぽいんだよね」

眉を寄せた彼女は喉を擦ってから立ち上がる。

「何だか懐かしいよね」とくるみ。

「何が？」と奈々瀬。

「昔はこうやって泥んこになって遊んだじゃない」

くるみは彼岸花の真っ赤な花弁を一枚一枚愛おしそうに撫でながら言った。確かに幼い頃はよく外で遊んでいたが、いつの間にか公園で走り回ったり転げ回ったりする事は少なくなっていた。大人になるという寂しさをふと感じた。

「奈々瀬は昔から運動神経が良かったから、鬼ごっこだと男子でも追いつけなかったよね。一輪車に乗れるようになったのも奈々瀬がクラスで一番だっけ？」

そうだっけ、と奈々瀬は照れ臭そうに鼻を擦る。

「今も楽しいけれど、小学生の頃もめちゃめちゃ楽しかったなあ。定期テストとかも無くて気楽だったしさ」

「結局くるみは勉強が嫌いなだけじゃん」

そう言って奈々瀬は呆れたように笑った。くるみはペットボトルのウーロン茶を一口飲んで大きく背伸びした。

「小学校の頃は皆が帰っても、いつも最後まで三人で遊んでたよね…」

三人。

くるみが発したその言葉に奈々瀬の表情から笑みが消える。その変化に気付かなかったくるみは構わずに続けた。

「あの頃は本当に楽しかったなあ。最後まで公園にいたのはいつも決まって私と奈々瀬と、それから直弘（なおひろ）君…」

…直弘。

その名前を聞いた奈々瀬の顔がぴくぴくと引き攣り出す。

「そう言えば、あの頃は直弘君もいつも一緒に遊んでたんだよね。誰もいなくなっても私たち三人だけはいつも最後まで公園にいたもんね。懐かしいなあホント」

―くるみ…。

冷たい秋風が吹き抜けて彼岸花達をふわりと揺らす。

まるで彼らが一斉に頭を垂れたようだった。奈々瀬はぽつりと彼女の名前を口にした。その瞬間くるみの口から止めどなく流れ出る言葉がぴたりと止まった。

―その話、やめなさい。

そう言ってくるみの目を冷たく見据えると、彼女は涙目になって「ごめんなさい…」と謝った。奈々瀬は機械的に頷いて彼女から目を逸らす。

奈々瀬には直弘という弟がいた。

直弘は今年で十六歳になる、もし死んでいなければ。

消防署の前の交差点でくるみと別れた。

一人になった奈々瀬はぼんやりと夕焼け空を見上げながら商店街を歩いてゆく。気の早い店はもうシャッターを下ろし始め、引き潮のように徐々に活気が失せていった。その様は一日の終わりの雰囲気を漂わせて、寂しい感じがした。

駄菓子屋の角を曲がり、更に人通りの少ない住宅地の区画に入っ

た。まるで打楽器のようにローファーの踵がこつこつとリズム良く鳴る。ここでは自分の足音が一番大きな音で、それさえも近所迷惑になるのではないかと感じるほどだった。

公園の前を通る時、自転車に跨った小学生の男の子達が「じゃあな、バイバイ！」と互いに声を掛け合って手を振っていた。

彼らも家に帰るのだ。

子供達の自転車が奈々瀬を追い越してゆく。泥だらけになったサッカーボールを前かごに入れて先頭を走る少年を目にした時、奈々瀬はふと懐古的（ノスタルジック）な気分になった。

…あの子も、これぐらいの齢だったっけ。

立ちこぎで去ってゆく小学生の背中を見送る奈々瀬は、逆光になっている夕日に目を細めた。

弟の直弘は小学五年で時間が止まっていた。

奈々瀬の家は中流の住宅地にある中流の家で、いわゆる典型的な中流家庭だ。金銭的余裕が特別ある訳でもないが、切羽詰まった生活をしている訳でもない。二階建ての瓦屋根で、申し訳程度の庭がある一般的な家屋。「健康で文化的な最低限度の生活」という水準は十分満たしていた。

ただ一般的な幸福があるかというと、そうではない。

奈々瀬の家庭の幸せは一般的な水準よりも下だった。

家の扉には案の定鍵がかかっている。

通学鞄から鍵を取り出して扉を開ける奈々瀬。「ただいまー」と家の奥に向かって呼び掛けてみるが、薄暗い居間からは思った通り返事がない。家に誰もいない事は最初から分かっていた。

玄関で靴を脱いで居間に向かう途中、奈々瀬が歩く度に床がみしみしと軋んだ。この家も随分の齢らしい。そして奈々瀬は居間のカーペットの上に通学鞄を置いて奈々瀬は柔らかいソファーに身を沈める。深く息を吐いてそのまま猫のように丸まって横になり、ブラウスのボタンを一つ外した。胸元から白い下着が見え隠れしているが、奈々瀬は気にしていない。

ガラステーブルに乗っているリモコンに手を伸ばしてテレビを点けると夕方のニュースが流れていた。相変わらず先日の鮫島翔平殺人事件のニュースを放送している。やはりまだ犯人は捕まっていないらしい。

奈々瀬は部屋の隅にある仏壇に目を遣った。そして直ぐにテレビに視線を戻してから浮かない声で呟いた。

―ただいま…。

この仏壇には直弘と、そしてかつて母と呼んでいた女性が入っている。

今日もニュースは同じ事ばかり言っていた。どうやら事件に進展がないらしい。本当は進展しているのに、もしかすると報道規制を掛けているのかもしれない。警察はいつも本当の事を教えてくれない。

…どちらにしろ警察は信じられない。

…だって「あんな簡単な事」も解らなかったんだから。

奈々瀬は心の中で毒づいた。

テレビは淡々と同じ事ばかり言う。苛々する、苛々する。黙っていると仏壇の存在感が大きくなる、大きくなる。「姉ちゃん」と呼ぶ直弘の声が頭の中で重なるように繰り返される。彼の声を最後に聞いたのは五年も前だったのに、どうしてここまで鮮明に再生されているのだろう。

直弘が最期に言った言葉も「姉ちゃん」だった。

そして、そのひとつ前の言葉は「死にたくない…」だった。

不意にその時の光景が脳裏を過る。瞳孔の開いた目は焦点が合っていなかった。床に這いつくばった直弘は助けを求めるように、震える指先を奈々瀬の方に伸ばしていた。そして直弘は何度も言っていた、苦しい、苦しいと。

記憶の中では直弘は生きている。

そして記憶の中の直弘は毎日死ぬ。

髪を掻きむしってその情景を振り払おうとする奈々瀬だが、何を

しても振り払えない。ましてやニュースの内容など微塵も頭に入って来ない。

その暗い記憶を振り払ったのは電話のベルだった。

奈々瀬は跳ねるように身を起こした。騒がしいくせに機械的な呼出音は人に不快感を与えるのに最も効率が良い音声だろう。甲高い一定の音を発し続けられたら、とても無視はできない。

奈々瀬はテーブルにあった子機を取る。

彼女の口から出た「もしもし」にはどこか棘があった。つとめて平静を装っていたつもりの奈々瀬だったが、どうしても不快感が滲んでしまったのだろう。しかし、相手の発した一言目で頭の中でもやもや渦巻いていた物が一気に霧消した。

電話の相手は警察だった。

相手の刑事らしき男の声はあいさつと自己紹介もそこそこに、先日の件で聞きたい事があると言った。

「何か…分かったんですか?」と奈々瀬。

そして受話器からある名前が告げられた。

―笹中悟という名前に心当たりはありませんか。

お父さん。

待ってて、お父さん。

電話を切ってすぐ、奈々瀬は家を飛び出した。

奈々瀬は川沿いの堤防を逆走する。学校帰りに通った時よりも夕日はさらに低くなり、空の向こうへ沈み切ってしまいそうになっていた。

空は二色のグラデーションを描く。太陽の方角は眩しいほどに赤く、その反対側は寂しいほどに濃紺。奈々瀬の背後からは深海のように重い青色が押し迫ってきている。立ち止まった途端に海の底へと引き摺り込まれてしまいそうだ。

奈々瀬は走った、やがて訪れる夜から逃れるように。

紙町病院は五階建ての総合病院で、地域外からも患者が訪れる。

病院という場所はいつの時間も静謐さが漂っていた。しかし奈々瀬はその雰囲気を打ち壊さん勢いで一階ロビーへと駆け込んだ。

三階まで吹き抜けになった高い天井のせいで奈々瀬の騒がしい足音がロビー中に喧しく反響した。

ロビーの真ん中に立ち止まって息を整える。普段ならこの程度の距離を走っても呼吸を乱す事はないが、今は肩で息をするほどにまでなっている。呼吸する度に消毒液のような病院独特の匂いが鼻を衝く。清潔ではあるが不健康な匂いだ。

辺りを見回すと、受付カウンターで忙しそうにパソコンのキーを叩く事務の女性が奈々瀬をちらりと睨んだ。騒がしくした事で、どうやら顰蹙（ひんしゅく）を買ってしまったらしい。奈々瀬は隠れるように顔を伏せた。

時計に目を遣ると七時前。

まだ辛うじて面会に間に合う時間だった。

最後に大きく息を吐いて完全に呼吸を整えた奈々瀬は、出口へ向かう人の流れに逆らってエレベーターに乗って五階のボタンを押すと重たい音を立ててドアが閉まる。乗っていたのは奈々瀬一人だった。

奥の壁に鏡が嵌め込まれていた。不意に反射した自分の姿が目に入り、奈々瀬は息を飲んだ。

…誰だよ、アンタ。

自分でも知らない内に彼女の顔は酷く冷淡になっていた。学校で、くるみ達に見せている表情とは全く別物だろう。普段は意識しているから笑顔を作れるが、意識しなくなると笑顔が消える。

五階でドアが開くと、ロビーよりもさらに消毒液臭い空気が鼻を衝いた。静けさも寂しいほどに増している。

静かだ。死んだように静かだ。その静寂を侵してはいけないような気がした奈々瀬は出来るだけ足音を殺してリノリウムの床の上を歩いて行った。窓のない廊下は窒息死しそうなくらい息苦しい。

５１３号室。その病室の前で奈々瀬は足を止める。

ネームプレートには「夏川信明（なつかわのぶあき）」の文字。
奈々瀬はドアをその個室のドアを開く。中は薄暗く、医療機器のランプが無数の星のように散らばっていた。窓枠に四角く切り取られて映っている紫色の空の弱々しい逆光がベッドの上に横たわるシルエットを浮かび上がらせている。
奈々瀬は壁に手を遣り電気を点ける。すると蛍光灯の光が紫色の空を不明瞭にする代わりに、病室を照らして全てを明瞭にした。
「お父さん…」
ベッドに横たわる奈々瀬の父、夏川信明は奈々瀬の呼び掛けに応じる事無くただ天井を見詰めている。正確には天井ではなく虚無を見詰めていた。
奈々瀬は小型冷蔵庫からリンゴを一つ取り出してベッドの横の丸椅子に腰かけた。そして点滴に繋がれた父に向かって話し掛ける。
「今日ね、学校で面白い事あったんだよ。くるみがまたトラップに引っ掛かってアルマのワサビ食べちゃったの。あの子ったらそれで目を真っ赤にしてウーロン茶一気飲みしてたんだよ」
父はただ虚無を見詰めている。
「他にもね、麻衣子に色んな薬品の事を教えて貰ったんだ。私またちょっと賢くなったかもね」
それでも、父はただ虚無を見詰めている。
「私は…毎日、元気だよ…」
奈々瀬は真っ赤なリンゴを握りしめながら俯いた。父は何の反応も見せる事無くただベッドで仰向けになっているだけだった。
父の顔を覗き込む。薄目を開けた父の顔にはだらしなく無精髭が生えていて、奈々瀬が好きな優しい父の姿から遠ざかっていた。
奈々瀬は無理に笑ってリンゴを一口齧った。甘いが、どこか水っぽい。
「お父さんも食べる？」
そう言って食べかけのリンゴを父の口に近付けたが案の定何の反応も無い。少し強引に口に押し付けてみたが、ただ口元に果肉が付

着しただけだった。父の口の汚れを拭き取った奈々瀬は肩を落として苦笑した。

奈々瀬は動かない父の体に抱きついて顔をうずめた。消毒液の匂いに混じって懐かしい香りがする。

「大好き、お父さん大好き」

小さな頃はいつもこうやって父に抱きついていた。

小さな頃はいつもこうやって父を独り占めしていた。

奈々瀬の父は先月、仕事からの帰り道に交通事故に遭って病院に運ばれた。それ以来意識が戻らない。知らせを受けた奈々瀬が病院に駆けつけた時には、もう父は物を言わぬ人形のようになっていた。いわゆる植物状態だ。

頭を強く打っていて脳の損傷が激しいらしい。医者の診断では、いつか意識を取り戻すかもしれないがもう二度と間を覚まさないかもしれないらしい。仮に意識を取り戻したとしても記憶をなくしている可能性がある、と言っていた。

あの事故の夜、病院には警察もいた。奈々瀬は「お父さんを轢いたのはどんな奴だ」と問い質したが警察は顔を顰めるばかりだった。

「ねえ、お父さん。悔しいよね、ムカつくよね」

奈々瀬はぽろぽろと涙を零しては父の布団に顔を擦りつける。彼女は子供のように声を上げて泣いた。

加害者は不明。

つまり轢き逃げだった。

「でもね、今日は大ニュースがあるんだよ。警察が電話くれてさ、お父さんを轢いた奴が分かったんだ」

涙を拭った奈々瀬は顔を上げて父の顔を見ながらにこりと微笑んだ。父の顔は前に見た時よりも頬がこけて痩せ衰えているような気がする。

「実はねニュースでもやってるんだけど、つい最近チンピラが工場の所でボコボコにされる事件があってさ、それで警察がね、その事件の犯人の自宅にあった車を調べてたらヘッドライトの所が割れて

たんだって」
　奈々瀬は動かない父の頬を撫でる。
「それがね、お父さんが轢き逃げされた現場に残っていたライトの破片とぴったり合ったらしいよ。テレビでやってた事件の犯人とお父さんを轢いた奴は同一人物なんだよ。やっぱり悪い奴は何度も悪い事を重ねるんだね」
　そう言って奈々瀬は悲しく笑った。
「名前は、笹中悟って言うらしいよ」
　笹中悟と言う名前を口にした瞬間、奈々瀬の瞳が冷たく輝いた。乱れた髪を手櫛で整えて右耳に掛ける。
「お父さんは今こんなになってるのに、笹中って奴はのうのうと生きてるんだよ。悔しいでしょ許せないでしょ、お父さん。私は悔しいし許せない。警察に捕まってもどうせ大した罪にならないんでしょ。だから、私…良い事考えたんだ…」
　奈々瀬は薄笑いを浮かべて父の耳元に柔らかな口唇を近付けた。
「笹中悟を、殺す」
　追い詰めて、痛めつけて、苦しめて殺そうと思うの。
　奈々瀬は父の首に抱きついて満面の笑みで言う。甘えるような猫撫で声。まるで幼い少女のように無邪気な笑顔だった。
「大丈夫だよお父さん、心配しないで…」
　―だって初めてじゃないもん、人を殺すの。
　奈々瀬はぽつりと打ち明ける。
　それでも父は何の反応も見せなかった。
　日に日に痩せ衰えてゆく父の姿を見て奈々瀬の顔は曇った。たとえ笹中悟を殺したとしても父が回復するかどうかは分からない。優しかった父がじわじわと死人に近付いてゆく様を見ているのは奈々瀬にとって拷問以外の何ものでもなかった。
「ねえ、お父さん。今って痛いよね苦しいよね。このまま一生苦しみ続けるのなんか嫌だよね、私はそんなお父さんを見てると可哀想で…本当に可哀想で」

眉を寄せる奈々瀬は父の顔を愛おしそうに撫でる。しばらく良く見ない内にしわも白髪も増えている。随分齢を取ったのだと、どこか寂しくなった。

頬に手を当てると無精髭の感触がある。動かないのに髭だけは伸び続けていた。本当に植物のようだ。

「笹中を殺した後ね、お父さんも楽にしてあげるよ。意識が戻るかどうか分からないんでしょ。それなら私がお父さんを苦しみから助けてあげる。これがお父さんの娘として生まれてきた私の責任だよね」

奈々瀬は立ち上がって大きく背伸びをした。しなやかに伸びる四肢、ここまで走ってくる内に乱れた制服の裾から形の良い臍が見えた。

電気を消してドアの所から最後にもう一度父のベッドを振り返る。窓の外に映し出された空の色はいつの間にか濃紺一色に染まり、ガラスの破片のように鋭利で冷たい光を放つ星々が散らばっていた。

そして奈々瀬は呟く。

―お父さんは私が責任を持って、殺してあげるからね。

人形遊び

チクタク、チクタク。
秒針は規則正しく一秒に一回歩みを進めている。しかし悟にはそれが何とも遅く感じられていた。
チクタク、チクタク。
薄明るい狭い部屋。
悟は鉄扉の前に姿勢を正して立っていた。
中央に置かれた大きな事務机が六畳ほどしかない部屋をさらに狭苦しくしている。二人の刑事が並んで席に着き、事務机の上に何やらノートを広げている。
机を挟んで向かい側には一人の少年が座っていた。少年は緊張している様子も無く、ただ退屈そうに時計を眺めている。悟はその少年から片時も視線を逸らさなかった。
溢れるどす黒い感情をかみ殺すように、悟は歯を食い縛った。
チクタク、チクタク。
席に着いていた恰幅の良い刑事が口を開いた。
「ええと、牧村稔（まきむらみのる）君だな。あのアパートでの一件は君達がやったので間違いはないんだな？」
…牧村稔、か。
その少年の名前を悟は深く胸に刻み込んだ。
牧村は少し戸惑いながらもはっきりと頷いた。宿題を忘れて先生に咎められているような反応だ。
「ああ、はい。間違いないっていうか、あっちのお巡りさんに見つかりましたからね」
そう言って牧村は悟の方を顎で示した。彼と目が合った瞬間、悟の全身の血液が沸騰するように熱くなった。
牧村はまだ中学二年らしい。まだ声変わりも迎えておらず、女のような高い声をしている。若いというより幼いと表現する方が良い

だろう。
彼は実に真面目そうな少年で、学級委員長をやっていると言われても違和感はないぐらいだ。警察に来る中学生と言えば見るからに不良という者ばかりなので、牧村のような少年がこの場所にいる事は不自然だ。
無骨で暗い取調室と優等生という組み合わせ。切り取った写真を重ねたように牧村の存在が浮いている。
彼の存在自体が異質だった。
喧嘩もした事がないだろう、万引きも夜遊びも決してしないだろう。そんな少年が人を殺した。
悟の目の前にいる少年は、人を殺したのだ。
チクタク、チクタク。
秒針は悟を置いてきぼりにして進んでゆく。
「何であんな事したんだ？」
刑事の問い掛けに牧村は不思議そうな顔をしてから答える。
「何でって言われても…まあ、何となくかな」
牧村のおどけた顔を見て悟の怒りが爆発しそうになる。
…何となくで人を殺すのか！
「何となくで人を殺すのか！」
悟の代わりに怒鳴ったのは取り調べの刑事だった。牧村はびくりと身を引き攣らせて強張った。
「その…実験ですよ、実験。」
「実験だと？」と聞き返した刑事は首を傾げる。
そうですよ、と答えた牧村の口元が微かに緩んだ。
「最初はムシャクシャしていて殴ったり蹴ったりしてただけだったんです。ストレス解消ですね。だけど、途中から色々試してみたくなったんですよ」
あの部屋が悟の脳裏に浮かぶ。
チクタク、チクタク。
「洗剤を飲ませたらどうなるかとか、口を縫って何も食べられなく

していたらどうなるかとか。思い付いたらとりあえず実験してみました」

隣にいた若い刑事が口元を押さえながら牧村の言った事を調書に書き込んでゆく。牧村はあどけなさの残った声で淡々と続ける。

「初めの方は痛かったら泣いたり抵抗したり反応があって、みんなそれを見て笑ってたんです。でも何日か続けてる内に反応がなくなってきたんで、みんな飽きてきたんですよ。面白くなくなったんですね。だから今度は…どうやったら人が死ぬか。実験してみたくなったんです」

チクタク、チクタク。

人工音声のような感情のない甲高い声を淡々と聞いていると、頭がおかしくなってしまいそうだ。牧村の声が何重にも聞こえてくる。

取調室の固く冷たい壁が、生き物の腸の中にいるかのようにうねうねと動き出すような錯覚を感じた。

警察というのは正義を守り悪を挫く為のこの国で唯一の機関の筈だ。目の前にいるのは間違いなく悪なのに、なぜ今すぐ裁く事が出来ないのだろうか。もどかしくてもどかしくて堪らない。

悟はさらに歯を食い縛った。口の中に仄かな血の味が広がった。

「被害者の体から砒素が検出されたんだが、除草剤を飲ませたんだな？」

悪びれる様子も無く頷く牧村。

「で、最後は死体をバラバラにするつもりでしたよ。どうやったらバラバラに出来るか試したかったし、死体を隠さなきゃいけなかったから。でも分解作業中に見つかっちゃったんです。そこのお巡りさんに」

牧村は照れ臭そうに笑って、扉の前に立つ悟に視線を送った。

「お前…自分が悪い事をしたと分かっているのか！」

「ああ。まあ、悪い事ですね。でも後悔はしてませんよ、むしろ満足しています。誰にも出来ない経験が出来たんだから」

事務机越しに牧村と対峙する二人の刑事は眉を寄せてその少年を

睨みつけている。
「被害者の、上山清志君に何か言う事はないのか…」
　すると牧村は二度頷いた。
「へえ、あの子カミヤマキヨシ君って言うんですか、今初めて知りましたよ。まあそうですね、実験に付き合ってくれてありがとうって所ですか？」
　チクタク、チクタク。
「別にあの小学生じゃなくても実験は出来たんだけどね。まあカミヤマキヨシ君も運が悪かったと思います。生まれ変わったらもう僕みたいな人に出会わないように祈ってるって言っておいてくださいよ、カミヤマキヨシ君に」
　…ああ、吐きそうだ。
　こんなに醜い悪は今まで見た事がない。
「おい、子供だと思って優しく接してたら調子に乗りやがって。お前みたいな奴には必ず重い罰が下るぞ」
　すると牧村は刑事達を馬鹿にしたような嘲笑を見せた。
「そんな事言ったって、どうせ僕らは未成年だから大した罪にはならないんでしょ」
　チクタク、チクタク。チクタク、チクタク。
「少年法って便利ですよね。この前、塾で習ったんですけど宗教改革の原因になった免罪符でしたっけ？　ホントそれみたいですよね」
　チクタク、チクタク。チクタク、チクタク。
「馬鹿な大人が作った決まり事でも、たまには役に立つ事もあるじゃないですか。僕ら未成年は何をやっても許されるんだ。だから今の内にやりたい事を思いっきりやっておかないと損じゃないですか」
　チクタク、チクタク。チクタク、チクタク。
「悔しいですか、刑事さん。僕を死刑にしたいですか。じゃあ死刑にすれば良いじゃないですか。出来ないんでしょ？　この国の法律じゃ未成年は裁けないんでしょ？」
　―じゃあ僕が裁いてやるよ。

二人の刑事が悟を見上げる、牧村が悟を見上げる。
悟は自分でも気が付かない内に牧村の隣に立っていた。悟の顔を見上げる三人は時間が止まってしまったかのように固まっていた。
そして悟は思い切り牧村の体を蹴飛ばして椅子から落とした。
「笹中！　何をしている！」
刑事の制止も無視して、悟は牧村の座っていたパイプ椅子を素早く畳んで振りかぶり、床に尻餅をついて倒れていた牧村の前に立つ。
牧村は青褪めた顔で悟を見上げている。
「確かに法律じゃあ未成年（おまえ）は裁けない。」
悟は一気にパイプ椅子を振り下ろす。派手な音を立ててパイプ椅子が牧村の頭に直撃した。牧村の頭がぐらりと揺れた。
「やめろ…笹中」
そうは言うものの、あまりの出来事に刑事達はまだ動くことが出来ないでいる。流れ出した血を見て恐れをなした牧村は四つん這いで悟から逃げようとする。
悟は、逃げる牧村の腹を蹴り上げた。鈍い音が取調室に響くと牧村は脇腹を押さえてのた打ち回っていた。肋骨が折れたのかもしれない。
「法律で裁けないのなら…」
悟はさらにパイプ椅子を振り下ろす。今度は顔面に直撃した。牧村はさっきまでの落ち着いた様子とは別人のように狂ったような悲鳴を上げていた。
「お前みたいな害虫は僕が死刑にしてやるよ」
部屋の隅に逃げ込んで亀のように丸くなった無抵抗の牧村を、パイプ椅子で滅多打ちにする悟。自らの正義を信じて疑わない悟の表情には僅かな笑みすら窺えた。
「死刑だ、死刑だ、死刑だ、死刑だ」
恍惚の表情で「死刑」と繰り返し何度も牧村を打つ悟。牧村はごめんなさい、ごめんなさいと繰り返しているが悟は手を休める様子はない。恐らく誰の声も耳に入っていないのだろう。

「死刑だ！」
悟は笑っていた。
チクタク、チクタク。

◆

対馬尊人に連れられてやってきた店は、あまり悟好みではない空間だった。
薄暗くて自分の顔が見え難くなっているのは確かに好都合なのだが、テクノというのかサイケというのか、低音がガンガン頭に響く音楽が大音量で流れているのはどうも落ち着かない。
とにかく耳が痛い、頭が悪くなってしまいそうだ。クラブというものに初めて来た悟は困惑していた。入り口でドリンクチケットを受け取った悟は、尊人に倣ってバーカウンターでとりあえずコロナビールを買った。
前を歩く尊人は人の間をするするすり抜けて進んでゆく。
「ナナシさんはこういうクラブとかあんまり来ないの？」
ちらりと振り返ってそう言ったが、尊人の声は音楽にかき消されてほとんど聞き取れなかった。よく分からなかった悟はとりあえず「ああ」と答えておいた。
酒に酔って暴れている刺青の男、ほとんど下着に近い露出をした女。真夜中のクラブにはろくな人間がいなかった、轢き逃げ犯および殺人犯の自分自身を含めて。すれ違う人間すべて悪そうな奴で、悟は明らかな嫌悪感を表情に出していた。
「こっちだ、はぐれんなよ」
まだ飲み口にライムが挿さったままのコロナの瓶を片手に、尊人が手招きする方へ着いてゆくと少しずつ音楽が小さくなっていった。
この辺りはフロアと違って椅子とテーブルがいくつか並んでいる。どうやら普通に座って飲食できる空間らしい。ちょっと待ってな、と言って尊人は近くにいたスタッフに何やら耳打ちしている。する

と奥のカーテンに仕切られた個室へと案内された。
青白い照明が灯った薄暗い個室。象の顔を持つヒンズー教の神、ガネーシャの絵が壁に飾られていて、白い煙の立ち昇る香炉からは白壇（びゃくたん）の独特な香りが漂ってくる。エスニックな妖しい雰囲気がする空間だ。
尊人は慣れた様子でソファーに身を沈めて「座りなよ」と悟にも促した。ライダースジャケットを脱いでTシャツ姿になった尊人の右腕には刺青があった。チカーノ風の崩した筆記体でＭｅｍｅｎｔｏｒｉ（メメントモリ）と大きく彫ってある。確かラテン語で「死を忘れるな」という意味だった筈だ。
どうも落ち着かない雰囲気だ。テーブルの上に灰皿を見付け、悟は懐から煙草を一本取り出して火を点けた。「あ、俺も吸うよ」と断ってから尊人も煙草をくわえた。彼が茶色い色をした煙草に火を点けると甘い香りが漂った。
「ところでさ、ナナシさんって普段何やってる人なの？」
尊人は興味津々といった表情で尋ねてくる。彼は悟に相当興味を持ったのか、子供のように目を輝かせて返事を待っている。しかし悟は口籠って何も答えられずにいた。
「もしかして、警察？」
尊人の言葉に思わずビールを噴き出しそうになった。
「そんなワケないじゃないか。僕みたいな男に、そんな立派なお国の仕事なんか勤まるもんか」
「そうかな…。強いし真面目そうだし、何となくそんな雰囲気がしたんだけどな。正義の味方って感じなんだよな」
「とんでもない。僕はただのしがない営業マンだよ」
なかなか尊人の眼力も侮れない。
…この国の警察に正義なんてなかったよ。
…法は弱者の味方でも何でもないんだ。
確かに、悟には警察官だった過去がある。
しかし四年前のある事件をきっかけに彼は警察を辞めて、医薬品

販売の営業マンに転職したのだった。
「ふうん。じゃあ何で『ただのしがない営業マン』が名前も言えないんだよ。別に名前ぐらい教えてくれたって問題ないじゃん」
「そ、それは…」
人を殺して警察に追われているから、とは言えない。
さらに問い詰められるのかと思いきや、尊人は運ばれてきたミックスピザに興味の矛先を変えて手を伸ばした。ピザにかぶりつく尊人は「まあ、言えないんだったら言えないで別に良いんだけどな」と言った。
「ところで、君は…」
そう言いかけた所で尊人が悟の鼻先に人差し指を突きつける。
「俺にはちゃんと名前があるんだ、ナナシさんとは違ってよ。堅苦しくならずに、気軽に尊人ってよんでくれよな」
「ああ、悪い。尊人君こそ一体何者なんだ？　そっちは警察官どころか普通のサラリーマンにも見えないけど…」
すると尊人は長い髪を両手で無造作にかき上げて、自信ありげに微笑んだ。
「だからさっきも言っただろ。しかし何度でも言わせてもらおう。俺は無敵のスーパーマンだ！」
駐車場で尊人が言っていた事を反芻する。
…あ、そうだ！
「確か、痛みを感じないんだってな！」
その通り、と答えた尊人は豪快にピザを食い千切った。
ニューロパシー。
いわゆる先天性無痛無汗症と呼ばれる症状に似ている。生まれつき痛さ、冷たさ、熱さなどの感覚が麻痺してしまっている症状だ。
ちらりと尊人が脱いだライダースジャケットに視線を向ける。
ニューロパシーの患者は汗をかかないため体温の調節も出来なくなっているが、どうやら尊人は少し違うらしい。
「痛みを感じないその体質ってのは生まれつきなのか？」

「いや、実はこの体質になったのはつい最近なんだ。先月かな。ちょっと金に困ってる時においしいバイトがあるって紹介されたんだよ。ちょっとヤバい感じのバイトなんだけどな」

「バイト？」

「ああ、新薬のモニターってやつさ。俺もそんなバイトなんか都市伝説だろって思って信じちゃいなかったんだけど、ちょっとアンダーグラウンドなコネがあれば本当に見つかるもんなんだな」

尊人は人差し指で自分の左腕の静脈を指す。そこには注射の後のようなものがいくつか残っていた。

「注射って事はただの風邪薬ってワケじゃなさそうだよね。いったい新薬って何の薬？」

「さあ。俺もよく分かんないんだけど、鎮痛剤とか麻酔薬とかの類らしいんだ。ところでナナシさんも鶴見製薬って会社知ってるよね」

「鶴見製薬か。ああ、知ってるよ」

鶴見製薬と言えば病院などの医療機関にも、一般家庭向けの常備薬にもシェアのある国内でも有数の大手製薬会社だ。悟が仕事で取り扱っていた医薬品の中にも鶴見製薬の薬も少なくなかった。

尊人は指に着いたチーズを舐めてから続ける。

「実はその鶴見製薬のモニターだったんだ。病院みたいな施設に一週間泊りがけで、その後は時々顔出して様子見せに行くだけのオイシイ仕事だったよ。手首のナンバーはその時にペンで書かれたやつさ」

尊人は手首を見せて『Ｄ－００２１』のナンバーを示す。悟もピザを一切れ手に取って頷いた。

「でさ、初めて注射してから十日ぐらい経った頃に、ある異変に気が付いたんだ」

「異変？」

「家でタバコ吸ってたら手元が滑ってポロッと落としちゃったんだ。それでどこに落ちたか探してたら、自分の膝の上に乗ってたんだよ」

火の点いたタバコがだぜ、と尊人は前のめりになった。

「熱くなかったの？」
「ああ、それが全く熱くなかったんだよ。熱さだけじゃないぜ、痛み自体を全く感じなくなってたんだよ」
「それってもしかして、痛覚が麻痺したって事かな？」
「さあね」
味覚まで麻痺しなくて良かったよ、と尊人は冗談を言ってみせてコロナビールを美味そうに飲む。
「新薬のモニターって事は他にも被験者がいた筈だろ。尊人君以外にも同じような症状になった人っているのかな？」
「知らねえ。でもニュースとかで大事になってないって事は、少なくともバイトに行った全員が俺と同じ体になったって訳じゃないんだろうな」
「なるほど。尊人君は特殊なケースだって事か」
「そう。つまり俺は選ばれた人間って訳だ」
尊人は腕組みして自信ありげににやりと笑った。
…全く、ポジティブな男だ。
「だから俺はこの国に革命を起こしたいワケ！」
「はあ？」
思わず悟は頓狂な声を上げてしまった。最初は冗談かと思ったが、尊人は大真面目な顔をしている。むしろその反応を待っていたと言わんばかりに尊人は身振り手振りを交えて熱心に語り始めた。
「裁ききれないぐらいの悪者がいるんだよ、この国にはな」
悪者、裁く。その二つの言葉に悟の耳がぴくりと動く。
「しかも本当に悪い奴ほど裁かれない。捕まって裁かれるのはいつも小悪党ばっかりだろ。法律ってのは金持ちとエライさんの都合に合わせて作ってあるみたいだな。例えば俺の体だってそうさ」
尊人は自分の頬を強くつねった。
「きっと俺以外にも妙な体質になった奴はいる筈だ。中には訴えた奴だっているかもしれない。それなのに鶴見製薬は何のお咎めも受けてないだろ」

「多分、上手くもみ消されたんだろうね」
「そうだろうな。てか、このナンバー消えねえしよ。いったい何のインク使って書いたんだよ」
眉間にしわを寄せた尊人は手首の『Ｄ－００２１』の文字を指でごしごしと擦る。特殊なインクで書かれているのか全く消えていない。
「こうやって人の体をいじくるのは捕まらねえのに、スピード違反や万引きでは捕まるんだろ。絶対おかしいだろ」
悟は小さく頷いた。
そうだ。この国では裁かれるべき悪が裁かれない。法律がそういう仕組みになっている。正義と悪の定義は何なのだろう。そもそも正義とはいったい何なのだろう。
…僕は悪者を退治しただけなのに。
…何故、警察に追われているのだろう。
「まあ、俺はこの体も気に入ってるんだけどな。便利だし」
そう言って尊人はフォークで自らの左手の甲を突き刺して抉るようにねじる。痛みを感じない尊人は涼しい顔をしているが、その手の甲は真っ赤になって血が滲みそうになっていた。
「やめてくれよ。君は痛くないかもしれないけど、こっちは見ているだけで痛くなる」
すると尊人は「へへっ」と悪戯小僧のように笑ってからフォークをテーブルの上に置いて、残っていたコロナビールを一気に飲み干す。瓶の底にはしわしわになったカットライムが横たわっている。
「裁かれないのはエライさんだけじゃねえぞ。他にも法律に守られてる悪者ってのがいるだろ」
「法律に守られてる、悪者？」
「子供だよ」
悟の心臓が大きく跳ねた。
ポテトフライを運んできた店員にコロナの追加を注文した尊人は煙草に火を点けてから話を続ける。

「ほら、何年か前だっけ。中学生三人組が近所の子供を誘拐して殺したっていう事件があっただろ」
「ああ、『紙町小学生誘拐事件』の事か」
悟の表情が変わる。
うるさい蝉の声。古いアパートの古いドアの向こうから聞こえてくる少年のはしゃぎ声。ドアを開けた時に這い出て来た生臭い空気。
そして、左腕を切断された子供の死体。
悟の脳裏に全てがフラッシュバックした。
「少年法ってあるだろ。人を殺したってんだから、大人だったら死刑になってもおかしくないぞ。それでも犯人のガキ共は、たった数年で少年院から出て来るんだろ」
糸鋸を持って薄暗い部屋の中に立っていた少年の姿を思い出した。
彼は悪びれる様子も無く、ただぼんやりと悟の顔を見ていた。
…そうだ。
…あのクズ共はたった数年で。
「現場に踏み込んだ警官もブチ切れちまって『お前らなんか死んじまえ』って怒鳴りつけたとか週刊誌に書いてあったっけ」
「お前らなんか地獄へ落ちてしまえ…だよ」
悟は尊人の目を見ずに呟いた。
「ああ、そうだっけ。ナナシさんも随分詳しいんだな」
…まあ、それなりには。
「確かにそのポリが言った事も分かるよ。法律に守られてたって本当に悪い奴にはいつか罰(ばち)が当たるもんさ」
「天罰か。本当にそんなモノあるのかな。もしあるんだったら、この世に法律も裁判も警察も何もいらないよ」
天罰などない。
その証拠に世の中にはのうのうと暮らしている悪人が沢山いる。
だから罰は人が下さなければならない。
悟は二本目の煙草に火を点ける。一日に五本までと決めていた煙草も、もう何本吸ったか分からない。悟の「いつも通り」は細部に

わたって崩れてゆく。
「まあ、そんな事言ってくれるなよ。天罰ってのも本当にあるかもしれないぜ。実は最近俺の知り合いに天罰が下ったんだ」
「知り合い？」
ああそうだ、と答えた尊人は背中を丸めて悟の目を覗き込んだ。
そして彼はゆっくりと口を開いた。
「鮫島翔平って知ってるか」
…鮫島！
その名前に反応して悟の体が一気に強張った。関係性を悟られてはいけないと必死で平静を取り繕おうとするが、煙草を持つ指が小刻みに震えている。
「それは…」
「そう、最近ニュースでやってる事件のやつ。隣町で何者かに殴り殺されたってアレさ。実はその鮫島って男、俺の知り合いなワケよ。汚い儲け話ばっか拾ってきてさ、それはまあ一言で言うとクズだったよ」
死人を悪く言うのもアレだけどさ、と付け足した尊人は煙草の煙を吐き出して顔を顰めた。
「俺が最後に街で会った時も『轢き逃げ現場見たから犯人を強請ってやる』って張り切ってたんだ。そしたら夜道で襲われて死んでやがんの。その話聞いた時は悪いけど腹抱えて笑っちまったよ」
と、言いながら尊人は今も笑っている。
「ああ。確かにそれは天罰だな…」
同調した悟も薄く笑った。
「でもナナシさんの言うとおり天罰ってのも気紛れなもんだから、そればっかりに頼ってられない。俺はこの国の法律、刑法を変えるために革命を起こす」
「革命って…政治家にでもなるつもりなのか？」
尊人は苦笑して首を傾げる。どうやら自分が政治家になって国を変えようとしているのではないらしい。

「まあ、難しい事言ってみたんだけど、本当はただ面白くねえこの国の仕組みにムカついてるだけなんだけどな」
舌を出しておどけて見せる尊人。するとすぐに真顔に戻って悟の顔を真っ直ぐに見る。
「そこでナナシさんに頼みがあるんだ。俺の革命の同志になって欲しい」
「僕に？」
「ああ。ナナシさんぐらい腕っぷしが強い人が欲しかったんだよ。俺の他にも革命の同志は集まってるんだけどナナシさんなら皆すぐに受け入れてくれると思う」
悟は眉を顰めて俯いた。
「腕っぷしを買われているって事は、その革命ってのはかなり強引な事もするつもりなんだな」
「物事を新しくする為にはちょっとぐらい強引な事も必要だよ」
悟は黙り込んだ。その間も尊人は真剣な目つきで悟に視線を送り続けている。そして悟は答えた。
「僕は、遠慮しておくよ」
「何でだよ？」
尊人の問いに悟は答えなかった。尊人がこれからしようとしている事。多分それは、悪い事だ。それに何より目立つ行動は避けたい。
「まあ仕方ないか、無理にってワケじゃないし。ところでナナシさん、良かったら連絡先教えてよ」
尊人は横に置いてあったジャケットから携帯電話を取り出した。
「いや、それは…」
「あ、そっか。ナナシさんはワケありの人だったよな。じゃあこっちの連絡先教えとくから、またメールでも送ってくれよな」
若き自称革命家は人懐っこい笑顔を見せた。

クラブの前で尊人と別れて今日の寝床を探す。
ビジネスホテルなどのしっかりした宿泊施設が理想なのだが費用

が掛かる上、大概そういう所は身分証を提示しなければならない。寒くなってきたとは言え、まだ何とか野宿できる気温ではあるが、それこそ職務質問される可能性が高い。そうなってしまえば身分証を提示できない悟はお終いだ。

経済面で考えるとネットカフェが最適だろう。悟は身分証が無くても利用できる個室のネットカフェを探した。

夜の街を目立たないように彷徨(さまよ)い歩き、小一時間してようやく悟の条件を満たすネットカフェを見付けた。大通りから外れた雑居ビルの地下にあった、店の名前も解らないような小汚いネットカフェ。フロントでの店員の対応も愛想がない。

煙草臭い個室に案内された悟は破れたソファーに腰を下ろした。パソコンも備えてあるが型が一昔前の物だ。とりあえず煙草に火を点ける。

くわえ煙草のまま悟はパソコンを起動させて、インターネットで自分の事件に関するニュースを調べる。しかし特に何も新たに報道されていない。自分の足取りを完全に消せているのか、それともまた警察が報道規制を掛けているだけなのか。

逃亡生活を続けるにしても他人との連絡手段も必要になる。新たに携帯電話を買う事は出来ないが、インターネットを使える環境であれば大手のポータルサイトでフリーのメールアカウントを作ることが出来る。アカウントを取得するだけならば身分証明書は必要ない。

適当なアドレスを設定してサイトの案内に従ってゆくと十分もかからない内にメールアドレスを取得できた。ただし同じアドレスを長く使っているのも危険なので、定期的に新しいアカウントに変える必要がある。

これからはネット環境の整ったパソコンさえあれば、メールならどこからでも出来るようになった。

ポケットから一枚のメモ紙を取り出す。まず尊人にメールを送っておこう。彼は今後、いざとなったら協力してくれそうだ。逃亡中

の身なので出来るだけ人との接触は避けるべきだが、彼とだけは連絡を取れるようにしておいて損はないだろう。
そして、悟には誰よりも連絡を取りたい人がいた。
…香那。
悟は再びメールの新規作成画面を開いて、宛先に香那のメールアドレスを打ち込む。メモなどなくても彼女のアドレスだけはしっかりと頭に入っていた。
本文を打つ悟の目に涙が溢れてくる。
何故ここまで日常から離れてしまったのだろう。ここは昨日までとは全く同じ世界だが、全く違う世界だ。昨日までの世界とは陸続きではあるが、全く別の世界だ。
悟の胸をホームシックに似た感情が満たす。
香那のいる世界に帰りたい。

件名：笹中悟です。
本文：僕です。心配かけてごめんなさい。
前の携帯は壊れたから次からはこのアドレスから連絡します。
あとこのアドレスや僕がいなくなった事は誰にも言わないで欲しい。
必ずまた会えるから心配しないで。またメールするよ。
愛してる。

※

生き残りの蝉が鳴いている。
正午過ぎの太陽は九月といえどもまだまだ元気で、陽炎を呼び起こして遥か先の景色を歪めさせていた。乾燥した運動場の土は強い風が吹く度に砂埃を巻き上げる。
スタート位置に立った奈々瀬と紗季は砂埃に顔を背ける事無く五

十メートル先のゴールラインを真っ直ぐ見ていた。
S？の夏川とS？の篠原。スタートラインに並んだ二人を他の特進クラスの生徒達は固唾を飲んで凝視している。
九月に入って最初の体育の授業は体力測定だった。最初の種目はこの五十メートル走で、奇しくも両クラスの代表格である奈々瀬と紗季が同時に走る事になった。
周りの優等生達はどちらが勝つかの予想で持ち切りだった。両者の応援をする者もいるが、当人達はその声に耳を貸す様子はない。
長い髪を後ろで束ねた紗季はちらりと奈々瀬の方を見る。
奈々瀬は肩のストレッチをして、軽くステップしながら体をほぐしている。まるで羽根のように軽い動きだ。
体操服を肩口まで腕まくりした奈々瀬は制服の時よりも体のラインがくっきりと浮き出ている。中学の頃から陸上部で鍛えていた彼女の身体には無駄な肉が一切ない。細身ではあるが、しなやかでバネのある肉体だ。
紗季は屈み込んでスニーカーの紐をきつく結び直す。
―絶対に負けたくない。
―負けられない。
大きく伸びをして呼吸を整える奈々瀬の姿を見上げながら紗季は心の中で低く呟いた。紗季は首筋に滴る汗の滴を拭う。
篠原紗季にとって負けは許されない事だった。
負けるという事がどれだけ情けなくてみじめな事か紗季はよく知っている。
幼い頃、自宅のトイレのドアノブで敗者が首を吊っているのを見た。負けるという事の意味はその時に十分学んだ。
優しい両親。父は真面目で誠実で、母は美しく慈愛に満ちていた。特別裕福ではなかったが貧困に喘ぐほど貧しくもない普通の幸せがある家庭。一人っ子だった紗季は二人の寵愛を受けて大切に育てられた。
紗季は優しい両親が大好きだった。

美しさと慈しみを兼ね備えた母に憧れる幼い紗季は何でも母の真似をしたがり、台所や風呂にまでついて行っていた。髪型も母と同じが良いと、その時から髪を腰まで伸ばしていた。

父は写真をよく撮りたがる人だった。

リサイクルショップで安く手に入れたカメラを事あるごとに紗季や母に向けていた、幸せな時間を刻み付けるように。そんな父は紗季達の写真を撮る度に「大きい紗季と小さい紗季がいる」と可笑しそうにしていた。母に似ていると言われる事は紗季にとってこの上ない幸せだった。

長い髪は紗季の自慢だった。

大好きな母も「紗季の髪は綺麗」と褒めてくれるので、自慢と言うよりも宝物に近かった。幼い頃の紗季は一人ぼっちの時、姿見の前に立つ事が多かった。母の櫛を勝手に使って髪を梳(と)かす。そうやって母の真似事をしていた。容姿を同じにしていると、たとえ一人ぼっちでも母がそばに居てくれているような気がしていたのだった。

優しい両親に愛されて紗季は毎日が幸せだった。

本当に、幸せだった。

しかし紗季が十歳になった頃、その幸せは砂の城のように簡単に崩れた。

父が事業に失敗して多額の借金を背負ってしまったのだ。その日を境に父と母の仲が悪くなった。まだ幼い紗季には金銭の問題はよく分からなかったが、両親の態度の変化は敏感に感じ取れた。

父は毎日のように酒を飲んでは荒れるようになり、母は毎日夜遅くまで家に帰って来なくなった。たまに顔を合わせたかと思うと、いつも喧嘩ばかりしていた。紗季が大好きだった優しい両親の姿はもうそこにはない。

紗季はいつも両親の様子を遠くから一人で見ていた。

怒鳴り声を上げる父、金切り声を上げる母。最初の頃は大人同士の取っ組み合いが恐くておろおろ怯えながら泣いていたが、やがて何も感じなくなった。二人が喧嘩している間も紗季は一人で姿見の

前に座っているようになった。
鏡の中の自分が日に日に笑わなくなってゆく。紗季はそんな事にも気が付かないようになっていた。
やがて母は家から出て行った。
自分は母に置いて行かれた、大好きだった母に捨てられた。賢くて勘も鋭い紗季がそう認識するのにそれほど時間を要さなかった。
仕事もせず真昼間から酒に溺れる父は時々紗季に言う。
――お父さんは負け犬なんだ。
――紗季はお父さんみたいになったらダメだよ。
そう言って父はテーブルに突っ伏して声を上げて泣いていた。
…カッコ悪い。
その父の小さな背中を見た紗季は、情けないと思った。父の事が大好きだったのが遠い昔のように思える。
本当にカッコ悪い。
何故こんな負け犬が自分の父親なのだろう。そんな疑問符だけが頭の上を浮遊し続けていた。
父の事を嫌いにはならなかった。ただ、自分の事を負け犬だと蔑んで開き直る男に、人として興味がなくなった。
そして父は死んだ。
紗季が小学五年の秋のある日。学校から帰ってくると、父はトイレのドアノブにタオルを括り付けて首を吊っていた。
その姿を見た紗季は悲鳴すら上げなかった。ただ呆れたように肩を落として溜息を吐いただけだった。
――これが、敗者の姿か。
紗季は教科書の詰まったランドセルを置き、その隣に膝を抱えて座って父のみじめな死に様をじっと目に焼き付けていた。
口からは涎を垂れ流し、薄く開いた目から涙が零れている。大人のくせに泣くなんて、やっぱりカッコ悪い。腰を僅かに床から浮かせてピンと両足を前に伸ばしている姿がテディベアに似ていたので紗季は思わず笑ってしまった。

――私はこんなふうにはならない。

お父さんは負け犬だから死ななきゃいけなかったんだ。私は何があっても勝ち続ける。こんなカッコ悪いのは嫌だ。

…負ける事はみじめに死ぬ事。

紗季の中でそんな認識が出来た。

奈々瀬はスターティングブロックがしっかり固定されているか足を乗せて念入りに確認している。足を置くブロックの間隔と角度を微調整する姿は、いかにも陸上経験者というのを物語っている。

ブロックの調整を終えた奈々瀬は立ち上がって大きく伸びをした。細く締まった手足に小さな胸。不必要な脂肪が一切ない奈々瀬の身体はまるで走る為に生まれてきたかのように洗練されている。

「最近走ってないからナマってるんだよね」

奈々瀬は足首を持って背中に回し太腿の筋肉を伸ばす。本人はそう言っているものの、その肉体に衰えている様子は全く窺えない。

学力の高さで注目されている奈々瀬だが、運動能力も同年代の男子をはるかに上回っている。中学の陸上部時代の記録で走り幅跳び六メートル二〇、走り高跳び一メートル七〇、そして百メートル走では十一秒六八。可愛らしい顔とは裏腹に彼女は怪物のようなレコードを持っている。

奈々瀬の身体能力は異常だ。

教師の合図で体育委員がピストルを天に向ける。紗季と奈々瀬はブロックに足を掛けて地面に指先を置き、五十メートル先のゴールを睨んだ。

体育委員が「位置に着いて」と合図すると、今まで騒がしかった他の女生徒達が黙り込んで、辺りは水を打ったように静かになる。運動場にいる全ての人間が息を飲んで紗季と奈々瀬に注目していた。

用意、の合図で二人は腰を上げる。紗季の心臓が全身に酸素と緊張感を行き渡らせる為に小気味良く律動し始めた。

…奈々瀬には絶対に負けたくない。

紗季はちらりと奈々瀬の方に目を向ける。前傾姿勢で鋭く前を睨

む奈々瀬の姿はまるでネコ科の肉食獣のようだった。
そして天に掲げられた銃口から白煙が上がる。
五十メートル先から銃声が耳に届くより前に紗季はブロックを蹴って飛び出した。負けるもんか、そんな言葉を心の中で僅か一秒以内に何十回と繰り返した。
一瞬出遅れた奈々瀬はスタートで紗季に先を越されていた。それでもクラウチングスタートでブロックを蹴り、まるで発射された弾丸のように飛び出した奈々瀬は力強く地面を蹴って紗季の背中を追う。
来る。奈々瀬が来る。数センチ後ろで奈々瀬の存在を感じながら、紗季は死に物狂いで足を前に繰り出す。
…負ければ、死。
紗季の脳裏に幼い頃から確立している敗者のヴィジョンが過る。負けはその場で直ぐに死と直結する。
負けるか。負けてたまるか！
紗季は今まで自分の前に立ちふさがる様々な人間を蹴落として生きてきた。中学生の頃、元々勉強が特別得意でなかった紗季は他人の何倍も努力して学年トップの座を三年間守り続けた。スポーツでも誰にも負けないように死ぬほど努力した。紗季にとって負ける事はみじめに死ぬ事に等しかったから。
風を切る音が耳朶に触れる。
死ぬ気で努力すれば大概の人間を見下ろす事は出来た。しかし奈々瀬だけは今まで見てきた人間とは全く別次元の存在だった。彼女は努力だけでは決して追い越せないタイプの人間だった。勉強でもスポーツでも。
そしてこの瞬間でも。
気が付けば紗季の目の前には奈々瀬の背中が見えていた。
…抜かれた。
先にゴールしたのは奈々瀬だった。紗季は彼女に一瞬遅れて五十メートルラインを踏んだ。

負けた。

ゴールしたと同時に紗季は湿った土の上に仰向けに倒れ込む。二人のタイムが読み上げられると息を飲んでいた周りの特進クラスの女子たちが一斉に歓声を上げた。奈々瀬のタイムは六秒五七、紗季は六秒七七。二人のタイムは高校生の男子の平均を遥かに上回っていた。

「やっぱりナマってるよ…」

両手を腰に当てて眉を寄せる奈々瀬。彼女は息一つ切らしていない。

対して紗季は呆然と土の上に仰向けになっている。紗季は悔しさのあまり歯を食い縛っていた。悔しくて、本当に悔しくて泣きそうだった。しかし仰向けになっていた事が怪我の功名となって涙が零れる事はなかった。

「でも紗季が一緒に走ってくれたからまあまあのタイムが出たんだよ。並走してくれる人が速かったらこっちも張り合いが出るからね」

奈々瀬は寝そべっている紗季に手を差し伸べる。

…まあまあ、か。

…私の全力が、まあまあ、か。

紗季は悔しくて腸(はらわた)が煮えくり返りそうになっていたが、怒りを抑えつけて彼女の手を取り起き上がった。その姿を見ていた周りの女子は惜しみない拍手を贈っていた。

奈々瀬との差はコンマ二秒。

周りから見れば僅かとも思える差であっても、紗季にとってはそのコンマ二秒が大きな差だった。

そのコンマ二秒が死に直結するのだから。

奈々瀬が体育倉庫のシャッターを上げると、外の陽光が薄暗闇の中へ流れ込むように入っていった。

奈々瀬は白線引きなど今日の体力測定で使った道具を片付ける当番になっていた。外から差し込む光に照らされ、奈々瀬がシャッタ

ーを開ける事によって舞い上がった埃がきらきらと輝いている。
マットにバレーボールに跳び箱。どれも酷く埃を被っていて少し叩いただけでも煙が上がりそうだ。体育倉庫は土と埃の独特な匂いがする。あまり体には良くなさそうだが、奈々瀬はこの匂いがそれほど嫌いではなかった。中学の陸上部時代を思い出してどこか懐かしい気分になるのだ。
スターティングブロックと木槌を棚に置き、白線引きを中身の消石灰がこぼれないように気を付けながら、車輪を浮かせて跳び箱の奥へと仕舞う。しかし跳び箱の角に白線引きをぶつけてしまい、中身を少しこぼしてしまった。柔らかくて白い粉が音も無く床に散らばる。
奈々瀬は自分の手にも付着した白い粉を見詰めた。確か消石灰は水酸化カルシウムとも呼ぶ。口に入っても胃液で中和されるので人体への影響は少ないが、目に入ると失明する可能性もある。
毒は、こんな所にも存在した。
シャッターを下ろして鍵をかける。皆もう着替えを始めたのだろう、振り返った運動場には誰もいなかった。少し寂しくなった奈々瀬は体育館脇にある更衣室へ急いだ。
彼女が更衣室のドアを開けて中に駆け込んだときには、もうほとんどの生徒が着替え終わっていた。先程の五十メートル走の熱がまだ冷めていないのか、特進クラスの上品な少女たちは奈々瀬に羨望の眼差しを向けている。
三列に並んだロッカーからそれぞれ荷物を取り出して、着替え終わった他の生徒達は次々と教室へ戻ってゆく。奈々瀬は靴を脱いで他の生徒に逆流するようにプラスチックの簀子（すのこ）の上を早足で進む。縦長の狭い更衣室の奥に一つだけある曇りガラスの窓から射し込む陽光がぼんやりと床を照らしていた。
女生徒達が着替え終わった後の更衣室は制汗スプレーの柑橘系の香りでむせ返っている。普段から勉強ばかりしている印象しかないような少女達でも、そう言う部分ではやはり思春期の女の子だ。流

石に汗のにおいは周りに感じられたくない。皆、自分の醜い部分を必死に隠そうとするようにスプレーを振りかける。

しかし様々な種類の制汗剤の匂いが混じりあって更衣室内の空気は濁っていた。顔をしかめた奈々瀬は換気をしようとするが、窓は嵌め殺しになっているので開かないしドアを開けておくのは女子高といえどもやはり恥ずかしい。仕方なく彼女は申し訳程度に設置されている換気扇のスイッチを入れた。壁に掛かったシンプルな時計を見ると休み時間はもう六分しかなかった。

…急がないと。

奈々瀬はロッカーを開けて体操服入れのナイロンバッグを取り出して足元に置いた。そして体操服の裾を捲って上を脱ぐ。するとスポーツ用の地味な下着に包まれた小ぶりな胸が露わになった。ショートパンツも脱いで下着だけになると、限界まで無駄を削ぎ落とした肢体が強調される。

奈々瀬の躰（からだ）は無性別的で、性的特徴を全く感じさせない。

女性特有のふっくらと丸みを帯びた艶っぽさが彼女の躰には無い。だからと言って男性のような力強さを備えた筋肉も無い。生物学的には紛れもなく女性の身体なのだが、その見た目からは性別を窺えないのだ。

ただ、奈々瀬の肉体はまさに完璧と言えるほどに洗練されていて、不必要なものが一切付いていない。男性として女性としてと言う次元ではなく、生物として完成された肉体を彼女は持っていた。

中身だけではない。その陶器のように滑らかな肌にも傷痕やシミ一つなく、体毛も産毛すら全くと言って良いほど生えていない。確かに美しいが人間味を感じさせない躰だ。表面内面共に非の打ち所がなく、まるで神が作った塑像のようだった。

奈々瀬はブラウスの裾をスカートの内側に入れてサイドファスナーを上げる。

「夏川さん、じゃあ先に行ってるね！」

ドアの所でクラスメイトが奈々瀬を振り返って言った。奈々瀬が

「うん！」と返事をしたのを確認すると彼女は更衣室を出て行く。鉄製のドアが重い音を立てて閉まると、更衣室には人間の発する音が一切なくなった。ただ換気扇の回る音が機械的に連続的に鳴っている。

いつの間にか更衣室には自分しかいなくなっていた事に気付いた。打ちっぱなしのコンクリートの壁に囲まれた無機質な部屋に一人でいると、監獄に閉じ込められているような気分になって落ち着かない。早く教室に戻ろうと、奈々瀬は体操服を詰めたバッグを肩に掛けた。

「奈々瀬…」

不意に背後から声を掛けられた。

奈々瀬の体はぴたりと固まる。聞き覚えのある尖った氷のような声。特進クラスで奈々瀬の事を下の名前で呼ぶのは一人しかいない。

紗季。

振り向くと彼女がロッカーの陰から顔だけを覗かせていた。そして紗季は簀子の上を足音一つ鳴らさずにするすると近寄ってくる。奈々瀬は咄嗟に身構えた。すると紗季はどこか含みのある怪訝な表情を奈々瀬に向ける。

「どうしたの、そんな顔してさ」

「え、ああ。もう誰もいないと思ってたからね。紗季がお化けみたいな登場の仕方するもんだからびっくりしたよ」

体育の時は後ろで結んでいた髪も解いて、いつもの紗季の髪型に戻っていた。紗季は小さく息をつく。

「登場の仕方に驚いた？　本当にそうかな。私の顔を見てからもずっと硬い顔してたような気がするけど」

そう言って紗季は観察するように奈々瀬の顔を覗いている。奈々瀬は表情を緩めて警戒を解いたふりをした。

こんな狭い部屋に先と二人で閉じ込められて警戒しない訳がない。数日前、紗季は宣戦布告してきた。生き残りを賭けたポイズンガールで奈々瀬を下すと宣言した。

「奈々瀬の肌ってホントに綺麗だよね」
紗季は奈々瀬のつま先から頭の天辺まで見回して深く頷いた。
…いつから見ていたんだ、こいつ。
「黙ってたら人形みたいだもん」
「なんか褒められてる気がしないんだけど」と奈々瀬。
苦い顔をして奈々瀬は紗季を見ている。毒牙が見えたり見えなかったりで、紗季の腹の中は読みにくい。
すると紗季が思いついたように口を開く。
「あ、人形で思い出したんだけどさ『紙町小学生誘拐事件』って覚えてる？」
「小学生誘拐って、確か私達が中二ぐらいの時に起こった事件じゃん。近所の事件だから覚えてるよ」
それは四年前に起こった事件だ。
七月上旬、小学三年の上山清志（かみやまきよし）という男の子が下校途中に行方不明になった。夜になっても帰って来ない事を不審に思った両親が捜索願を出したが、捜索が始まって三日が経っても男の子の消息は一切掴めなかった。
それがどうかしたの？　と奈々瀬が問うと、紗季は「いや、ちょっと人形ってキーワードで思い出しただけなんだけどね」と前置きしてから話し始めた。
「人形で遊んでただけ…。捕まった犯人が言ってた言葉だよ」
紗季は腕を組んでロッカーにもたれる。
失踪から一週間が経って、男の子は死体で発見された。
その事件は猟奇的という言葉でも形容しきる事が出来ない程に残忍で凄惨で、閑静な住宅地を震撼させた。
子供の声がうるさい、と苦情のあったアパートに警察官二名が向かうと部屋の中から数名の少年の騒ぎ声が聞こえた。注意しようと警察官がインターフォンを鳴らすと急に静まり返る。不審に思いドアを開けると、部屋の中には三人の中学生がいた。そして彼らの足元には失踪中の男の子の変わり果てた姿があった。

「人形…。それって、犯人の少年Aが言ってたやつ？」
「そうだよ。主犯格の少年A…本名は確か牧村稔（まきむらみのる）って言ったかな」
「何で本名まで知ってるの？」奈々瀬は驚いた顔で首を傾げる。
「犯人が未成年だから本名は報道されなかったんだけど、近所の事件でしょ。噂ってのは直ぐに流れてくるの」
顔までは知らないけどね、と紗季は付け足す。
当時中学三年だった少年Aこと牧村稔をはじめとする三人の少年は学校でも特に目立った存在ではなく、不良という言葉が全く似合わない至って真面目な少年だった。
それぞれ別々の中学に通っていた三人は塾で知り合い、よく牧村の祖父が持っているアパートの一室を使ってテレビゲームをしたりして遊んでいた。
ある日、牧村が「人体実験をしよう」と言い出した。残酷描写のあるテレビゲームの影響らしい。仲間の少年達も面白そうだと言って話に乗った。そして残酷な「実験ごっこ」は決行された。
下校途中の小学三年生の男の子を誘拐して牧村のアパートに連れてきて様々な実験をした。
食事を与えなかったらどうなるのか。洗剤を飲ますとどうなるのか。人の肌にジッポオイルをかけて火を点けるとどうなるのか。口を裁縫針で縫うとどうなるのか。牧村達は思い付く事を手当たり次第に実行した。
最後は砒素を含む除草剤を飲ませて殺してしまった。しかし彼らの興味はそこで終わらなかったのだ。これを誰にも見つからないように処分するにはどうすれば良いか。
人体を分解するとどうなるのか。
警察がアパートに踏み込んだ時、まさに牧村が男の子の体を糸鋸で分解している所だった。そのあまりの異常さに、発見した警察官が発狂してしまったという話もある。
牧村達に悪意はない、ただ好奇心が彼らを突き動かしていた。
ただ人形だと思って遊んでただけ。牧村はそう供述していた。

「彼らはただ自分の知的好奇心を満たそうと思っていただけなんだって。だから男の子には何の憎しみも抱いていないし、その代わり死んだって可哀想だなんて思わないの。奈々瀬は犯人の言い分が理解できる？」

全然、と答えた奈々瀬は手のひらを上に向けた。

「確かにどうやったら人が死ぬだとか考えた事はあるかもしれないけど、それを実験に移すのは普通ありえないよ。誰にでも良心ってのがあるからどこかでブレーキが掛かっちゃうもんでしょ。私には絶対できないな」

…私の嘘つき。

奈々瀬は心の中で吹き出した。

「それが出来たのが『紙町小学生誘拐事件』の犯人達なんだよね。誰だって小さい頃、買って貰った人形の服を脱がせたり、体を分解したりして遊んだでしょ。その時、人形に罪悪感や嫌悪感ってあったかなって言えば違うよね」

「そうだね。確かに私も『この中ってどうなってるんだろ？』って気になって分解してたなあ」

「そうでしょ。別に人形じゃなくてもシャーペンやボールペンを意味も無く分解する事だってあるでしょ。あれも一緒で、どういう仕組みになっているかが知りたくて分解してるんだよね」

奈々瀬は紗季の言葉にこくりと頷いた。そして紗季は続ける。

「牧村稔は同じ事を人体でもやってしまう人間だったの。どうなっているか気になったから分解したんだよ」

紗季は無感情に奈々瀬を見ている。奈々瀬の反応を観察しているかのようだ。やはり紗季の舐めるような視線が苦手だった。

換気扇の回る音が鳴っている、ただ無機質に。

「早く戻らないと六時間目始まっちゃうよ」

奈々瀬はこの沈黙とこの空気に耐え切れなくなって紗季から背を向けた。上靴を簀子の下に置いて履く。妙な空気を放つ紗季から逃げるように奈々瀬はドアノブを握る。

「あれ…」
ドアが開かない。
何度ノブを捻っても、がちゃがちゃと間抜けな金属音が鳴るだけでドアが開かない。奈々瀬は唾を飲み込んだ。
換気扇の回る音が鳴っている、ただただ無機質に。
背後で微かに紗季の足音がした。簀子の上、足を引きずるような音を立ててこちらに近付いてくる。奈々瀬は厳戒態勢を敷いて素早く振り返った。
「紗季…何のつもりよ…」
奈々瀬は目一杯の威嚇の表情を作る。しかし紗季は毒気のない怪訝そうな表情をしていた。
「え、何の事？」
「とぼけないで。アンタが鍵掛けたんでしょ！」
紗季は首を傾げる。
「鍵？　知らないよ。だいたい更衣室の鍵は外からしか掛けられないじゃん」
確かに彼女の言うとおりだった。
更衣室の鍵は外からしか掛けられず、内側には鍵穴すらないので中から鍵を開けたり閉めたりするのは不可能だ。だから必ず最後に出る者が外から鍵を掛けて職員室に返却する決まりみだ。
鍵を掛けた犯人は紗季ではない。
奈々瀬と紗季はドアの隣の壁に取り付けられたフックに目を遣る。
…ない。
普段なら使用中はこのフックに鍵が引っ掛けられているのだが、今はない。いつからなくなっていたかは全く思い出せない。しかし誰かが鍵を取って、外から鍵を掛けていったのは確かだ。
窓は嵌め殺しなので、そこから出るどころか開ける事すらできない。磨りガラスなので外から様子も解らない。
「これって、もしかして…」
閉じ込められた。

「まあ閉じ込められたって言っても、そんなに非常事態でもないよ。携帯の電波だってあるんだから誰かに連絡しようよ」
紗季は意外と冷静に意見した。
彼女のもっともな意見に納得した奈々瀬は鞄の中から携帯電話を取り出して適当な名前を探す。
「閉じ込められたなんて恥ずかしいけど、くるみにでも頼もっか」
奈々瀬はくるみの番号を探し出した。その時、更衣室で唯一のBGMだった換気扇の音が忽然と止まった。二人はふと振り向く。
換気扇が止まっている。
「あれ、壊れたのかな」
奈々瀬は眉を寄せて換気扇に近付いてゆく。
ただでさえ密閉された部屋だというのに、換気扇まで止まってしまっては外の空気が入って来なくなって息が詰まってしまう。
「奈々瀬、離れて…」
紗季の真剣な声。
彼女の方を一度振り返った奈々瀬だったが、再び換気扇の方へ目を向けて息を飲んで固まった。
眼だ。
換気扇の羽根の隙間から誰かが覗いている。
奈々瀬は弾かれたように換気扇から飛び退いた。
からんからん。
換気扇の隙間から空き缶が投げ入れられた。しかしよく見るとそれはジュースの空き缶などではなかった。缶から勢いよく白煙が噴き出す。
燻煙式殺虫剤だ。
奈々瀬と紗季は部屋の隅まで離れて口元を押さえてしゃがみ込む。
人間が死ぬような効果がある訳がないがそれでも体には悪そうだ。
これはポイズンガールにおける誰かの攻撃に違いない。
明らかに襲撃されている。それも今までのような食べ物にワサビを仕掛ける悪戯とは訳が違う。これは完全な毒による攻撃だ。

からんからん、からんからん。
からんからんからん。
「ちょっと…ヤバいんじゃないの」
さらに四つの缶が投げ込まれた。狭い更衣室はみるみるうちに白煙に支配されてしまって何も見えない。奈々瀬は喉と目の痛みに顔を手で覆った。
「奈々瀬、聞こえる？」
紗季の声だ。
さっきまで隣にいたと思っていたが、いつの間にか移動したらしく遠くから声が聞こえる。奈々瀬は煙を吸わないよう必要最低限の声で返事した。
「くるみには電話通じた？」
「いや、まだ掛けられてない！」
今から電話したとしても、くるみを待つ余裕はなさそうだ。今すぐにでも更衣室から脱出しないとまずい。
奈々瀬は荷物の詰まったバッグを握り締めた。
「紗季！　窓から離れてて！」
窓があるだろう方向へ勢い良くバックを投げつけた。一秒程してガラスの割れる騒がしい音がする。
徐々に白煙が晴れ出したが、足元に転がる缶からは依然として煙が噴き出している。奈々瀬は新鮮な空気を求めて窓へと駆けた。
その時、割れた窓の隙間から何者かの姿が見えた。
…誰だ。
誰かは分からなかったが、それは間違いなくポイズンガールの参加者。自分達に危害を加えようとした人物だ。
視界のぼやけた世界の中で紗季の怒声が飛ぶ。
「奈々瀬！　追うんだよ！」
紗季は窓枠に残る破片を持ち上げた箒子で乱暴に取り除いていた。
「ここで逃がしたら、またどこからともなく襲われるよ。誰だかわからないけど今の内に捕まえないと！」

彼女の言葉に頷いてから、奈々瀬はたっぷりと助走をつけて窓枠に飛び乗った。

中に残った紗季に手を差し伸べて、彼女が窓枠に登るのを手伝う。そして二人はアスファルトの地面に飛び降り、脱出に成功した。

「ったく…。やられたね」

軽く咳払いをした紗季は更衣室の壁を振り返る。換気扇はガムテープでしっかりと目張りされていた。もう今までのような悪戯ではない。襲撃者は確実に二人を仕留めに来ている。

更衣室の裏手は駐輪場になっていて、登下校時間以外は誰もいない。襲撃者はどこへ行ったのかと奈々瀬は辺りを見回す。

ふと遠ざかってゆく足音が聞こえた。

「奈々瀬、あっち！」

紗季が指差した方を向くと、駐輪場の角を曲がって逃げる何者かの後姿が一瞬だけ見えた。あの先は荷物置き場や倉庫もあって隠れる場所も多いので、逃げ込まれたら探し難い。

…今の後姿は。

奈々瀬は踵を踏んでいた上靴をしっかりと履き直して、襲撃者の後を追って駆け出した。紗季もすかさず彼女に続く。最初は並んで走っていた二人だが徐々に奈々瀬の方が前に出始める。

角を曲がると、運動部の部室のプレハブハウスが長屋のように立ち並んでいた。見通しも悪く入り組んでいるので探し難い。襲撃者を見失ってしまったかと思ったが、まだ近くで足音が聞こえる。

奈々瀬は振り返らずに紗季に言う。

「紗季！　アンタは下から探して！」

私は上から探す、と言い放って奈々瀬はさらに加速した。「上からって？」と紗季が聞き返している途中で、奈々瀬は地面を強く蹴ってエアコン室外機に足を掛けた。

そのままの勢いで壁を登るようにプレハブハウスの窓枠を蹴り、まるで猫のように軽やかな身のこなしで軽く身をよじらせて一瞬の内に屋根に上った。

辺りを見渡して確認すると、プレハブハウスの間を隠れるようにして走ってゆく後姿が見えた。それは真っ直ぐに西棟を目指して走っている。

奈々瀬は足音のする方を指差して紗季に指示を送る。

「西棟の方だよ！」

すると紗季は軽く頷いて駆け出した。

奈々瀬も襲撃者の背中を追いながら屋根の上を走る。その後姿も二人が追って来ている事に気付いているのか走る事を止めない。

…あれは。

あの特徴的な栗色の髪に見覚えがあった。

その特徴と照らし合わせながらしばらく走っていた奈々瀬はその勢いで学食の屋根に飛び移り、西棟と東棟の渡り廊下に先回りしようとする。真下で足音が聞こえている。襲撃者は直ぐ下にいるのだ。

渡り廊下に差し掛かった所で奈々瀬は屋根から飛び降り、音も無く着地した。すると背後で例の足音がぴたりと止まった。

深呼吸をした奈々瀬はゆっくりと立ち上がる。

「なかなか強烈な事してくれるじゃん」

そして振り返った奈々瀬は襲撃者の名前を呼んだ。

「ねえ、アルマ…」

そこには肩で息をする奥山アルマの姿があった。彼女は小さく微笑んでから踵を返して逃げようとしたが、その後ろから紗季が追い付いてきた。

紗季は肩に掛かった髪を手で払いながらアルマを見て笑った。

「あらあら何だ、やっぱりアルマだったのね。綺麗な顔して毒ガス攻撃だなんて似合わないよ」

挟み撃ちにされて、ばつの悪そうに二人を見比べるアルマは照れ臭そうに溜息を吐く。

「あぁあ、失敗しちゃったな」

思っていたよりも軽い反応に二人は少し戸惑った。

「正直このゲームで一番の強敵なのは奈々瀬と紗季でしょ。この二

人さえ最初に何とかすれば楽勝だと思ったんだけど、そう上手くはいかないね」

当たり前でしょ、と紗季は真顔で言った。

「さっきのだって二人まとめて降参させるチャンスだと思ったんだけどねぇ」

アルマはブレザーのポケットに両手を突っ込んで俯く。

「逆に『二人まとめて』って考えた所が間違いだったよ。やっぱり特進クラスは凄いわ。奈々瀬の運動神経もそうだけど、紗季の冷静さと判断力も恐いぐらいだよ」

そう言ってアルマは奈々瀬の方に顔を向けた。

「奈々瀬、私はあなたに勝ちたい…」

紗季の顔面の筋肉がぴくりと動く。

「紗季にだってそうだよ」

今度は紗季の方に顔を向けた。

「私はね、いつも悔しかったんだよ。勉強だって、運動だって、奈々瀬と紗季は何でも私より出来るんだもん。だからゲームぐらいは勝ちたいんだよね」

その時のアルマの表情は子供のように無邪気だった。彼女の胸にあるのは、一つでも良いから友達よりも秀でた部分が欲しいと思う子供らしい切な願いだ。

ただ少し歪んでいた。

「しかもこのゲームってルールが緩いでしょ。だから私もそのルールを最大限に生かして遊ぼうと思うの。何としても二人には勝ちたいんだよね…」

アルマの表情が歪んだ。

「ホント、さっきので降参してくれてれば良かったのになあ。こんな事になっちゃったんだから、もう次は絶対に降参させなきゃ…」

―殺してでもね。

大きな目玉がぎょろりと二人を見回す。

透きとおった茶色い瞳からは人間らしい感情が窺い難い。

奈々瀬と紗季に緊張が走る。アルマも完全にこのゲームに乗っているようだ。先程の更衣室での攻撃から判断しても、もうただの毒殺ごっこで完結させるつもりはないらしい。

次からは本当に毒殺しにかかってくる。

「好き放題言ってくれるね」

毒牙を見せたのは紗季だった。

「アンタが殺しにかかって来るって事は、もちろんそれなりの覚悟って出来てるんでしょうね？」

「覚悟って？」

「もちろん、殺される覚悟よ」

するとアルマは犬歯を見せて笑い、ポケットから折り畳まれたＡ４サイズの紙を取り出して、片手で広げて紗季に見せつけた。

「今さら何を言うのよ。殺される覚悟だったらあの日、理科準備室で五人一緒にしたでしょ」

彼女が持っているのはあの日書いた遺書だ。

書き慣れた筆記体のドイツ語で綴られた文章は、まるで魔女が悪魔と交わす契約書のようだ。長いアルファベットの羅列の最後にはＡｌｍａとサインされている。

「なるほどね、認めてあげる。でも奈々瀬にだけは手を出させないよ。奈々瀬に勝つのは私だけなんだから。もし奈々瀬に手を出すんだったら、殺すよ」

紗季も冷血動物のような無感情な目でアルマを睨む。彼女はアルマの顔に視線を釘付けにしたまま奈々瀬に声を掛けた。

「ねえ奈々瀬。やっぱりアルマをこのまま放っておくのは危ないね。次は何を仕掛けて来るか分からないもん。それだったら今の内に捕まえて降参させちゃおうよ。降参しなかったらしなかったで、他にも動けなくする方法はあるし…」

紗季は獲物に襲いかかろうとするように、僅かに身を低くした。

まさに一触即発。アルマが刹那でも隙を見せれば紗季が彼女に飛び掛かるだろう。

「残念だけど、まだ捕まっちゃう訳にはいかないんだよね」
痺れを切らした紗季が襲いかかろうとした時、アルマはポケットから茶色い瓶を取り出して、親指で素早く蓋を開けた。
…あれは、準備室の。
その瓶に奈々瀬は見覚えがある。
「紗季、アルマから離れて！」
アルマの手に隠れて見え難かったがラベルには確かにＨ２ＳＯ４、硫酸と記されていた。蓋の空いた瓶を勢いよく振ってアルマは自分の周りに硫酸を撒き散らす。咄嗟に反応して身を引いた紗季は上手く直撃を躱すことが出来た。
二人から距離を取ったアルマは渡り廊下を駆けて西棟へと逃げ込んだ。
「待て！」
咆哮を上げた紗季は西棟のドアに駆け出して、奈々瀬もそれに続く。
現段階でアルマは五人の中で最もゲームに適応できている。紗季の言うとおり今の内にアルマを叩いておかないと危険だ。今、自分達に全く躊躇なく顔の高さに硫酸を撒いてきた。次は必ずもっと危険な罠を仕掛けて来るに決まっている。
二人が西棟のドアを開けると、教室移動の生徒達で廊下がごった返していた。皆、同じ制服を着ていて、同じ方向へ歩いてゆく。
アルマを見失った。
この生徒達の流れに隠れて、どこかから奈々瀬達をほくそ笑んでいるのかもしれない。どこからかアルマのあざ笑う声が聞こえるような気がした。
「くそっ。油断した…」
紗季は憎々しげな声を漏らしながら自分の右手を見詰めている。僅かながら硫酸が付着したのか、彼女の手の甲に小さな火傷が出来ていた。
そして始業ベルが校内に響き渡る。

「で、今日からその名前で呼べって？」

逃亡生活も五日が経過した。

自動販売機から缶コーヒーを取り出した尊人は、いかにも文句のありそうな顔をしている。彼がタブを引いて缶を開けると芳ばしい香りが悟の鼻にも漂ってきた。

「ええと、ミタニ…何だっけ」

「三谷誠（みたにまこと）だよ」

悟はネットカフェに入る時の署名にその三谷誠という偽名を使う事にしていた。誠という名前は彼の好きな新撰組から取ったものだ。己の正義を信じ、誠一文字の旗の下に集った幕末の若者達。しかし今の悟がその名前を名乗るのはどこか滑稽だった。

「だからナナシってのはやめてくれよ」

「どうせ三谷ってのも本名じゃないんだろ。じゃあナナシさんの方が良いよ。そっちのが慣れてるし」

彼の反応に悟は肩を落とした。

陽が沈んでからも人足が絶える事はない。この街は今日も眠らないのだろう。交差点の信号が青になると、端でそれぞれ待機していた人々が一斉に横断歩道を渡り出す。その様はまるで戦国時代の合戦で両軍がぶつかり合っているようだ。

「ところでアンタっていったい何者なんだよ。漫画喫茶に泊まってるし、本名も解らねえし、おまけにメチャクチャ強いし…もしかしてＣＩＡの秘密捜査官とか？」

「まさか…」

「じゃあ逆に潜伏中の殺人犯とか？」

正解。勘が鋭いと言うか、当て勘が冴えていると言うか。何の確信も無く適当に言った言葉なのだろうが、実際に言い当てられると胆が冷える。

「もし僕が『そうだよ』って答えたらどうする？」
　すると尊人は怪訝な顔をして悟の目をじっと見ている。
　会話の止まった二人の前を人々は忙しそうに行き交っている。ふと煙草の匂いがしたかと思うと、悟の足元に火が点いたままの煙草が捨てられていた。きっと通行人が捨てていったのだろう。
　悟は溜息を吐いて落ちていた煙草の火を揉み消し、吸殻を自分のジャケットのポケットに入れた。
　一部始終を見ていた尊人は小さく笑った。
「ナナシさんが殺人犯なワケないか。道端のゴミを拾うなんて、こんな汚い街じゃ他に誰もしねえよ。全くナナシさんはお人好しだよな」
「お人好し？　そうでもないさ…」
　悟は自らの両手をじっと見つめる。この手は人を殺している。悪人といえども一人の人間の命を奪っている。
「僕の手は、汚れてるよ」
「そりゃそうさ。落ちてる煙草拾ったんだから手ぐらい汚れるだろ」
　そう言う意味じゃないんだけどな、と心の中で思ったが悟は何も言わなかった。腕捲りした尊人の右腕には『Ｍｅｍｅｎｔｏ（メメント）ｍｏｒｉ（モリ）』のメッセージ、そして左手首には『Ｄ－００２１』のナンバー。刺青と違ってナンバーは少しずつ薄くなっているが、まだまだ完全に消えるには至っていない。
「ところで尊人君。前から聞こうと思ってたんだけど、革命って具体的に何をするつもりなんだ？」
　ああ、聞きたい？　と尊人は勿体付けたように答えた。悟が頷くと、彼は胸ポケットから煙草を取り出して火を点けた。
「国会議事堂を爆弾で吹っ飛ばす。今の政治屋連中を総入れ替えさせるのさ」
　甘い香りのする煙を吐いた尊人が無邪気な顔でジッポライターの蓋を開けると、楽器のような澄んだ金属音が鳴った。火を点けるとオイルの匂いを漂わせながら炎が揺らめき出した。

「そ、そんな事したら…」
「冗談だよ」
そう言って尊人は子供のように笑った。
「この国の腐敗を訴えかけるには、まずメディアに出て全国民に働きかけなきゃならない。メディアって言ってもインターネットやラジオとか色々あるけど、一番インパクトが大きいのはやっぱりテレビだ」
「テレビって言っても『今の政治に一言物申す』ってぐらいでそんな簡単に出演できるのかな。もしかして、尊人君ってタレントか何か？」
自分で言っておいて、それだけはないと思う。こんなに目つきが鋭くて腕に刺青までしているテレビタレントが、この国のどこに存在しようか。
「いや、地上波のテレビに出る機会を作るんだよ。ちょっと強引にね」
…どうやってだよ。
頭上に疑問符を浮かべる悟をよそに、尊人はさも当然の事のように淡々と計画の概要を語る。
「今の政治体制の愚かさを全国ネットでアピールする。そうすれば全国各地に俺達に賛同するヤツらが増えるだろ」
「俺達って？」
「前にも言っただろ。俺の賛同者、カッコ良く言えば革命軍ってやつか。ナナシさんも入ってくれたら良いのになあ」
物乞いのような悲しげな瞳で悟を見上げる尊人。悟は苦笑いを浮かべて柔らかく拒絶を示した。
赤になっていた信号が再び青になり、交差点の中心で人の波がぶつかり合う。しかし都会の人間は器用なもので、誰一人としてぶつかることなく人と人との間をすり抜けてゆく。日常生活でも同じように、彼らは人と人との関わりをすり抜けて生活しているのだろう。
その時、尊人が交差点の方に向かって手を振った。すると横断歩

道の人混みの中からにゅうっと手が伸びた。人混みをかき分けるようにしてその人物は二人の方へ近付いて来て、尊人の前に立ち止まった。

それはちょうど少女と女の中間に位置するような女性だった。尊人と同い年くらいだろうか。尊人は彼女を紹介する。

「こいつ理沙って言うんだ」

理沙と呼ばれた彼女は慇懃に頭を垂れた。

「初めまして。六沢理沙です」

…随分と礼儀正しい子じゃないか。

ああ、どうも。と応えて悟も頭を下げた。尊人と齢が近そうだがどうしてこの二人が知人同士なのか、二人の共通点は全く見つからない。見た目からして不良っぽい尊人に対して、理沙は化粧気も無く真面目な大学生のような格好をしている。清潔感のある栗色の髪のショートボブが良く似合っている。

「で、この人は…三谷さん、三谷誠さんな」

今度は悟が三谷誠の名前で紹介される。ナナシと紹介されたらどうしようかと思ったが、尊人もその辺りはわきまえていたらしい。

「もしかして、尊人君の彼女？」

違う違う、とナンバーの入った手を振る尊人。

「彼女は、革命軍の一人さ」

ぎょっとなった悟はもう一度理沙に目を向ける。すると彼女は少し警戒した様子で表情を険しくした。こんな真面目そうな女の子も尊人の意見に賛同しているのかと思うと、人は見かけによらないという事を改めて実感する。

「じゃあ俺達そろそろ行くわ」

「行くって？」

「今日は俺達の作戦会議なんだよ、この国を変えるための大事なね…」

尊人は立ち上がって残っていたコーヒーを全て飲み干し、空き缶をゴミ箱に捨てる。そして彼は悟を一瞥して言った。

「三谷さん、俺と出会ってからずっと浮かない顔してるぞ。人に言えない事が多過ぎて疲れてんじゃねえのか。あんまり秘密を溜め込み過ぎるとその内パンクしちまうぞ。いくら秘密って言っても適度に吐き出さないとな」

「ああ、そうだな…」

「どうせ誰にも言えない事ばっかりなんだろ。人に言えない秘密だったら、神様にでも告白したらどうだい」

「神様？」

そんなものはいない、絶対に。

「ちょっとは楽になるんじゃないのか」

尊人は胸の前で十字を切る仕草をした。

人目を避けるように歩くのが癖になっていた。

意識していないとみるみる静かな方へ、みるみる暗い方へと進んで行く習性が体に染み付いてしまっていた。人混みに紛れていた方がまだ安全だという事を頭では分かっているのだが、体がそれを拒絶する。

夜も眠らない繁華街を抜けて、気が付けば町外れの教会の前に立っていた。

門扉は開かれているが中に人の気配はない。どうやら夜間は無人のまま解放されているようだ。迷える子羊は真夜中でも救いを求めに来る。

―人に言えない秘密だったら、神様にでも告白したらどうだい。

尊人の言葉が脳裏を過る。

悟は吸い込まれるように教会の中庭へと足を進めて行った。教会の敷地に足を踏み入れた瞬間から神聖な空気に身を浸されたような気がする。

赤い煉瓦でできたゴシック建築の教会堂の天辺にある尖塔の先には十字架が掲げられていた。そして脇にある泉の前に純白の聖衣（ローブ）を纏ったマリア像が慈愛に満ちた顔をしてぼんやりと闇夜に浮かび上

がっていた。正面入り口には円系のステンドグラスを張った薔薇窓も見られる。美しいが、この国の建築様式とは一線を画していてどうも落ち着かない。

悟が自分の背丈の倍近くもある正面扉をゆっくりと押すと、扉は重々しい音を立てて開かれた。中を覗き込んだ悟はあまりの荘厳さと神々しさについ目を細めた。

芸術的なまでの線対称。両脇に等間隔に並べられた長机と柱頭が真紅の絨毯を敷いた直線の身廊を強調し、真っ先に祭壇に視線が行くようになっている。

リブ・ヴォールト天井と呼ばれる高い天井はコウモリの羽根を重ねたような曲線を帯びていて、その傍らにある天窓と祭壇奥の巨大なステンドグラスから射し込んでくる青白い月明かりが悟の足元を照らしていた。

しんと静まり返った聖堂内は空気まで澄んでいるような気がした。革靴の底が擦れる音ですらうるさく感じる。悟は正面奥にあるイエスの磔刑図をモチーフにしたステンドグラスを見上げながら引き寄せられるように祭壇に近付いて行く。

中央辺りまで進んだ所で悟はふと歩みを止めた。

祭壇の前に誰かいる。何者かが跪(ひざまず)いて祈りを捧げているのだ。

…先客がいたのか。

腕時計を見ると午後九時を回っている。こんな夜にわざわざ祈りを捧げに来ている程の敬虔なクリスチャンの邪魔をしても悪いと思い、悟は祭壇奥の十字架と、磔刑に処されたイエスのステンドグラスに向かって十字を切り、早々に立ち去ろうと踵(きびす)を返した。

「待って」

若い女性の声だ。振り返ると祭壇の前には一人の少女が立っていた。青白い光に照らされて見え隠れする少女の姿は神秘的だった。

陽光に当てれば透けてしまいそうな程に色素の薄い栗色をした髪に、目鼻立ちの整った顔は肌もミルクのように白い。そして彼女は茶色い瞳で悟を見詰めている。外国人だろうか。

「私は長いから、良かったら先にどうぞ…」
彼女は流暢にこの国の言語を操っていた。外国人観光客でも留学生でもなさそうだ。恐らく混血（ハーフ）なのだろう。
少女は音も無く一歩退いて祭壇の前を開ける。体をぴったりと包むようなハイネックの黒いセーターとロングスカートが彼女の線の細さと四肢の長さを強調していた。すると少女は手のひらを上に向けて悟を祭壇へと促した。
断る事も出来ずに悟は先程の彼女の動きに倣って跪いて祈りを捧げた。しかし身振り手振りを真似しただけで、実際に頭の中では何も考えていなかった。少女の存在があまりに気になっていたのだ。
目を開けると少女は悟の隣に立ってイエスの磔刑図を見上げていた。
「あの…」
悟が弱々しげな声を掛けようとすると少女はゆっくりと茶色い瞳を彼に向けた。
「君は、もしかしてここの教会の子かな？」
少女は小さく首を横に振る。揺れた少女の髪から清潔感のある甘い香りがした。
「違うよ。確かにこの教会にはよく来るけれど、ここが私の家って訳じゃない。今日は懺悔（ざんげ）をしに来ただけ」
「懺悔って事は、君も何か悪い事を…」
そこまで言って悟は慌てて口を閉ざした。誰にも言えない事だから教会で告白しているのに、ここで自分が問い質してしまったら懺悔の意味がない。ごめん、と言いかけた所で少女は小さく笑った。
「私は、何も悪い事はしていないよ」と少女は透明な声を放つ。
「じゃあ懺悔なんか要らないじゃないか」と悟は首を傾げる。
少女は胸の前で手を組んだ。
「私が今しているのは犯してきた罪を悔い改める事じゃないの。私がしているのは予約懺悔」
「予約懺悔って？」

「そのままの意味よ。悪い事をする前から先に懺悔しておくの。『私はこれから罪を犯します』ってね」

何をするつもりだい、と言いかけて悟はまた寸前の所で言葉を飲み込んだ。すると悟の胸中を察したように少女は「何をするか気になったの？」と問い掛けてきた。

しばらく目を閉じていた少女はゆっくりと目蓋を上げて、再びステンドグラスを見上げる。そして彼女の潤った口唇が静かに動いた。

「私はね、人を殺すの」

悟は言葉にならない頓狂な声を上げた。純潔で純白な美しい少女に物々しい言葉は全く似合っていなかった。

「あなたは人を殺した事がある？」

…あるよ。

しかし悟は黙っていた。すると彼女は「ないでしょうね」と早合点してくれた。彼女は淡々と言葉を紡ぎ出す。

「私は三か月以内に二人。最悪の場合四人を殺す事になるかもしれない」

「何で、そんな事を…」

「やらなきゃこっちが殺されるから。そういうルールのゲームなのよ」

「ゲームで人を殺すのか！」

悟は目の前の少女に嫌悪を覚えた。四年前、薄暗い取調室で牧村稔に対して覚えたどす黒い憎悪に似た感情が悟の胸に零れる。

「別に必ず殺さなきゃいけない訳じゃないの、相手が降参すれば命まで奪う必要はないゲームよ。でも参加者の内の二人はきっと死んでも降参しないんだよね。私は何としてもその二人に勝たなきゃダメなの」

「だからと言って…」

「二人に勝つ事が私の存在意義（レゾンデートル）なのよ」

少女の静かな声は、それだけで悟を黙らせた。

「私はね、何をやっても二人に勝てないでいたの。何をしても負け

て、その度に私の存在が薄れていくの。もう私は半透明になってるの。今度負けたら、もう私は消えてしまう。私、消えるのは嫌」

少女は再び跪いて祈る。

「これは私の存在意義（レゾンデートル）を守る為の戦い。聖戦なの。勝って存在を示すか、負けて存在を消されるか、二つに一つ。知ってる？　存在が消える、つまりこの世の全てに忘れ去られてしまうって事は死ぬよりもずっと恐ろしい事なんだよ」

しばらく目を閉じて黙り込む少女。悟はこのか細い身体の少女に気圧されてしまった。祈りを終えた少女は音を立てずに立ち上がり、悟に質問を投げる。

「あなたの名前は？」

「僕は…。名前は…」

まだ無い…。と言っておどけてみせると、険しい表情をしていた少女の顔が僅かに綻んだ。

「『吾輩は猫である』じゃないんだから、そんな訳はないでしょ。名前のない人間などこの世にいません。それとも神の御前で嘘を吐くつもり？」

「分かったよ。僕は三谷誠って名前さ」

結局、神の御前でも嘘を吐いた。

「三谷さんね。いきなりで失礼かもしれないけど、それにしても汚い格好だね。服も皺だらけだし泥だらけだし」

悪かったな、と悟は苦笑した。確かに汚い。しかも、ここ数日ろくに体を洗っていなかったのでかなり汗臭い。もしかすると教会に雨風をしのぎに来たホームレスと思われているかもしれない。まあ、良く似たものだが。

「まるで野良猫みたい」

言い返す言葉もなかった。

「ついておいで。お風呂ぐらい貸してあげるから」

「え？」と驚きの声を漏らす悟。

「ここで会ったのも何かの縁でしょ。聖書にも『隣人を愛せよ、敵

を憎め』ってあるし、何よりあなたは悪い人には見えないから親切にしようと思う。勿論この親切があなたにとって迷惑でなければ、だけど」

…悪い人だよ。

悟は戸惑った。少女は「良かったらついておいでよ、ネコさん」と言って真紅の絨毯の上を歩いてゆく。悟はネコさんという呼び名に首を傾げながら、彼女の背中に向かって再び問いを投げ掛けた。

「待ってよ、君の名前は？」

振り返った少女はアルマと答えた。

扉を開いた途端、頭を締め付けるような鋭い臭いが鼻を衝いた。薬の臭いだ。彼女の部屋の中はむせ返るような薬品の臭いで満たされていた。

「上がって」

アルマと名乗った少女は、玄関に立っている悟を振り返り手招きした。まるで野良猫を呼ぶような仕草だ。悟も少女に呼ばれるがままに部屋に上がる。彼女が電気を点けると整頓された清潔なリビングが蛍光灯に照らし出された。

整理整頓が行き届いていると言うより物が無いと言うのが正しい。本棚と学習机とベッド、それがこの空間にある全てだと言っても差し支えないだろう。この部屋からは年頃の少女らしさが全く感じられない。

「あの、家の人は留守なのかい？」

「いないよ。嬉しい？」

どういう意味だよ、と返した悟は悪戯っぽく笑うアルマを見て顔を顰める。彼女の言うように他に人の気配は感じない。

「このマンションで一人暮らしなの。ここからだと学校も近いし便利なものよ」

話によるとアルマは高校生だがこの部屋に一人で住んでいるらしい。両親がいない訳ではないが、医療関係の研究者である父が自宅

を私用の研究室に改装してしまい、生活スペースを追われた彼女は学校の近所にマンションを借りているそうだ。決して親子仲が悪い訳ではなく、アルマも週に一度は実家に顔を出すようにしていると言う。

アルマは椅子に腰を下ろして学習机に置いてあったノートパソコンを開いた。聞き慣れたウィンドウズの起動音が聞こえると悟は少し緊張が解れた。彼女は特異な環境に身を置かれているがこの部屋自体は至って普通だった、ただ一つを除いては。

…何なんだよ、コレは。

部屋の隅に薬品棚がある。

強烈な臭いを放っているのはこれだ。棚には透明や茶色の瓶がひしめき合っていた。化学に疎い悟にでも何となくは分かる、これらは日常生活で頻繁に使用するような薬品ではない、と。

薬品棚を指差して、悟が尋ねようとすると

「お風呂は玄関の隣」

と、まるで拒絶するように遮られた。

「あ、ああ。分かった」と悟は問いを諦めた。

するとアルマは悟の前に立って、彼のつま先から頭の天辺までを順々に見回した。

「ネコさんって身長何センチあるの？」

百七十五センチちょうどだよ、と悟は答える。

「じゃあＬＬサイズ買えば間違いないか」

「何の話？」

アルマは悟の顔を見上げる。

教会での神秘的な雰囲気とはうって変わって、彼女は随分と近づきやすい空気を振り撒いている。しかしフランス人形のように整った顔と雪のような白い肌は蛍光灯の下でも変わらずに美しい。

「今着てるスーツは明日にでもクリーニングに出しとくわ。それからネコさんがシャワー浴びてる間にラフな服買ってくるね。近くに夜でも開いてるディスカウントストアがあるから」

アルマは財布を持って玄関に向かった。
「ちょっと待ってよ。何で、そこまで僕に親切にしてくれるんだ」
するとアルマは振り返らずに答えた。
「さあ。神様のお導きなんじゃないの？」
胸の前で十字を切った彼女が出て行き、無機質な部屋に一人置き去りにされた悟は急に心細くなった。物凄い勢いで『いつも通り』から遠ざかっている。ノートパソコンに表示された時刻を見ると午後十時を回っていた。
普段ならばベッドに横になって香那と電話しているような時間だが、今は知らない少女の知らない部屋に上がり込んでいる。これから自分がどうなるのかも知らない。
悟は浴室の前に置いてあった洗濯籠に着ていた衣服を入れて、浴室のドアを開ける。床のタイルは冷えていて心地悪かった。蛇口を捻ってしばらくすると適温の湯が出てくるようになり、悟は温かいシャワーを頭から浴びた。
まともに風呂に入ったのは何日振りだろうか。悟の体の表面を膜のように包んでいた汗と脂（あぶら）が熱い湯に溶かされて洗い流されてゆく。元々、野良猫のように酷く汚れていただけあって自分が清潔になってゆくのがよく分かる。
確かに表面的な汚（よご）れは落ちた。
しかし内面的な汚（けが）れは落ちない。
そして、もう一つ落ちないものがあった。
「さっぱりしたけど…これは、やっぱりまだ消えないんだな」
温かいシャワーに背中を打たれる悟はふと左手を胸の前に持ってくる。その手首には丁寧な文字で『Ａ－０００９』記されていた。

※

「で、その後アルマはどうしたの？」
麻衣子は肘をついたまま眼鏡を押し上げ、その隣でくるみがうん

うんと頷いて奈々瀬の話す続きを催促している。放課後、いつも通りの理科準備室ではいつも通りの世間話が繰り広げられていた。

「結局、逃げられちゃった…」

二人は小さく息を吐いた。

ふと窓の外から柔らかい秋風が入り込んでくる。窓辺に置いていた彼岸花の一輪挿しが緩やかな風に一枚の赤い花弁を散らした。

「よりによって奈々瀬と紗季を同時に狙うなんて、紗季も大胆だね」

と麻衣子。

襲撃の日以来アルマの姿を全く見ていない。学校を休んでいるのだろうか。それとも、どこかに潜伏して再び奈々瀬が隙を見せる瞬間を虎視眈々と窺っているのだろうか。どちらにしろアルマという存在は一気に油断ならないものになった。

「やっぱりアルマが優勝なのかな」

くるみはペットボトルのキャップを人差し指でリズミカルに叩きながら、眉間にしわを寄せている。

「まあ誰が優勝するかは置いといて、アルマも紗季と同じぐらい危険だよ。私達を襲うのに失敗して余計に火が点いちゃった感じ。こないだは殺虫剤で済んだけど今度はもっと殺傷能力の高い毒を使ってくるはず」

奈々瀬はくるみをちらりと一瞥した。

「…って、くるみ。どうしたの、風邪？」

くるみが酷く咳込んでいる。痰の出ない乾いた咳を繰り返した後、彼女はこめかみを押さえて苦しそうに溜息を吐いた。

「ううう。風邪っぽいね。寒気もするし、そう言えばここ最近ずっと体調悪い」

ああ寒い、とこぼして小さく身震いした彼女はウーロン茶を一口飲んで喉を擦った。くるみの顔色はここ数日で随分悪くなってきているし、何より持ち前の元気が日に日に失われていっている。

麻衣子がくるみの額に手を置いた。

「うわあ、冷たい。熱があるどころかむしろ体温下がってるじゃん」

くるみは虚ろな目をして苦しそうに唸っている。
「ここ最近ずっと緊張状態が続いてたから疲れが溜まってるんじゃないの？　無理しないで今日はもう先に帰った方が良いよ」
そう奈々瀬が促すとくるみもツインテールを揺らして「うん、そうさせてもらおっかな」と小さく頷いた。くるみは通学鞄を肩に掛け、右手にペットボトルを持ってよろよろと立ち上がった。ふらついたくるみを隣に座っていた麻衣子が支えようとする。
「ちょっと、大丈夫？」
「平気平気。帰ってぐっすり寝れば直ぐに治るっしょ…」
じゃあお先にね、と言ったくるみは無理に元気を装って、力のない笑顔を見せて手を振った。準備室の出入口に向かう彼女の背中はいつも以上に小さく見えた。
くるみが出て行ってドアが閉まると、しんとした静寂が訪れた。奈々瀬と麻衣子の二人は音も無く閉まったドアをじっと見詰めて黙り込んでいた。
薬品臭い部屋に麻衣子と二人になった。
麻衣子は思い立ったように腰を上げて、冷蔵庫からサイダーのペットボトルを取り出した。そして実験器具棚のスライド戸を開けてビーカーを二つ出す。
「奈々瀬も飲む？」
「ううん。私はいいや…」
麻衣子は中身が半分以下になったペットボトルと二つのビーカーを机に置いた。
「もう残り少ないから二人で飲んじゃおうよ。毒なんて入ってないからさ…」
「そんな事言われても全く信用できないよ」と言って奈々瀬は笑った。
ビーカーに冷えたサイダーが注がれる。無色透明の液体から白い泡が清涼感のある音を立てて膨らんでは萎んだ。その後もビーカーの中を這うようにして小さなガラス球のような泡が無数に昇ってく

る。

ビーカーを掴んだ麻衣子は、それを一気に嚥下してひんやりとした息を吐いた。相当喉が渇いていたのだろう。そして麻衣子は「ね、何も入ってないでしょ？」と奈々瀬に微笑みかけた。

「そう言えば奈々瀬とくるみって高校入る前から知り合いだったみたいだけど、いつからの仲なの？」

「幼稚園。年少組の四才の時からだから、もうかれこれ十三年の付き合いになるかな」

いわゆる腐れ縁ってやつだね、と奈々瀬は苦笑しながら昔のくるみを回想した。彼女は幼稚園の頃から背が低く、まるで小型犬のように気が短いのに気が弱かった。

「ふうん。じゃあ家も近いの？」

「歩いて十分、自転車で三分、窓から大声出せば聞こえるぐらいの距離。だから昔からよく一緒に遊んでたよ」

「って事は中学校も一緒なんだよね？」

奈々瀬が頷くと、麻衣子は質問を止めて急に黙り込んだ。怪訝な顔で麻衣子の顔を覗くと彼女は奈々瀬の目を見て口を開いた。

「奈々瀬さ…『紙町小学生誘拐事件』って覚えてるよね。中学生が子供を誘拐して、砒素を飲ませて殺した事件」

麻衣子がそう言った途端に奈々瀬の表情が険しくなる。

「この前くるみがふとした拍子に言ってたんだけどさ。『犯人の少年Aはウチの中学に通ってたんだよ』って。って事は、奈々瀬も『紙町小学生誘拐事件』の犯人と同じ中学に通ってたって事でしょ？」

刹那、奈々瀬の顔の筋肉が痙攣する。

「ああ、そうだよ。でもその話、ウチの中学じゃタブーになってるの。だから皆あんまりベラベラ喋りたがらないんだけどね」

…くるみめ。

麻衣子は自分のビーカーにサイダーを注ぎ足して、また一口舌を潤す。眼鏡の奥から奈々瀬に向けられた麻衣子の瞳は詮索の色に満ちていた。

「もう一つ聞きたいんだけどさ。『紙町小学生誘拐事件』の陰に隠れてあんまり大きく報道されなかったんだけどさ、同じ時期にもう一つ砒素が使われた事件ってなかった？」

「さあ…」と奈々瀬は首を傾げた。

「確かそれも『紙町小学生誘拐事件』と同じ地域で起こった事件だったよ。砒素を使った親子心中自殺」

奈々瀬は俯いたまま髪を耳に掛ける。彼女のきめの細かい肌をした頬が露わになった。しかしその顔には表情が無い。

…麻衣子、知ってるの？

「ねえ、もうその話やめようよ」

自分の前に置かれた空のビーカーを指で弄んでいる奈々瀬は小さな声で呟いた。それでも麻衣子は止まらない。

「私の記憶に間違いがないのなら、その心中自殺の親子…」

「麻衣子。だからその話、やめた方が良い。今すぐに…」

ちらりと麻衣子の方を見ると、彼女も真剣な顔になっている。そして麻衣子はさらに続ける。

「その親子の名前、確か…夏川」

がしゃん。

耳障りな騒がしい音が麻衣子の言葉を遮った。床にガラスが飛び散っている。奈々瀬がビーカーを床に叩きつけて割ったのだ。

「麻衣子はホントに物知りだね」

目を丸くして硬直する麻衣子。奈々瀬は体内の空気を全て入れ替えるように大きな深呼吸をして、音も無くゆったりと立ち上がった。

「でも、そこまで知ってちゃいけないよ…」

奈々瀬と目が合った瞬間、麻衣子は凍ったように動けなくなった。その冷たい瞳には元気で明るく、それでいて聡明な奈々瀬の面影はなかった。まるで心を持たない機械のようで、瞳と言うよりは監視カメラのレンズのように冷たく無機質な器官だ。

身の危険を感じた麻衣子は咄嗟に後ろに飛び退いて、脇にあったホルマリンを中に入ったカエルごと奈々瀬に浴びせる。素早く反応

した奈々瀬は直ぐに顔を伏せてホルマリンの雨を防いだ。足元に腹を裂かれたカエルがぼとりと転がる。奈々瀬が怯んだ一瞬の隙に麻衣子は素早く移動し、ドアを開けて準備室から逃げ出した。

…待て、そのまま帰す訳にはいかない！

麻衣子が行った先は準備室の隣、理科実験室。獲物を追う獣のように勢い良く奈々瀬も実験室に駆け込んだ。

理科実験室の一番奥で麻衣子は立っていた。

真っ直ぐに奈々瀬を見据える両目には僅かに怯えを含んだ覚悟が宿っていた。逃げられないなら抵抗するしかない。そういった種類の覚悟だ。

「奈々瀬、やっぱりあなたが一番こわいよ」

麻衣子はブレザーのポケットからラップに包まれたカッターナイフを取り出した。そして彼女は素早くゴム手袋をはめてカッターのラップを外し、刃を押し出すときりきりという音が耳に障る。その刃の部分は粘性のある何かで濡れているように見えた。

「私の家にコバルトヤドクガエルがいたの、覚えてるでしょ。刃にそのカエルの分泌液が塗ってあるの」

奈々瀬に切先を向ける麻衣子は冷静な口調で言い放った。

ヤドクガエルに含まれる神経毒バトラコトキシンは神経細胞のナトリウムチャンネルを強制的に開きっぱなしにし、神経や筋肉を麻痺させてしまう。そしてＬＤ５０値は僅か０．００２ｍｇ／ｋｇしかない。ねっとりとしたその鈍く光る刃が肌を掠っただけでも病院送りは免れないだろう。

小刻みに震える麻衣子の切先を見て、奈々瀬は冷淡に口元を綻ばせた。

「偉そうな事言ってるけど、手が震えてるよ。もしかして私が恐いのかな」

奈々瀬は大きく目を見開く。すると麻衣子の肩がぴくりと引き攣った。

「あのね、人には触れちゃいけない過去ってあるんだよ、どうして

も知られたくない過去ってやつがね。それを掘り返したんだから…麻衣子、もう今日はお家に帰れないね」

凍りつくような笑みを浮かべた奈々瀬は上履きをしっかりと履き直して、床をつま先でこんと叩いた。

「このゲームで奈々瀬みたいな人を放っておいたら危険過ぎる。残念だけど、ここで消えてもらうよ」

「アンタが消えろ」

恐ろしく淡泊に吐き捨てた奈々瀬は両腕をだらりと垂らして、ネコ科肉食獣が獲物を狙う時の姿勢のように身を低くして構える。まず相手の武器を取り上げて脅威を取り除く事が先決だ。身体能力ではるかに勝っている奈々瀬は、麻衣子を組み伏せてカッターを奪おうと考えた。

毒の塗られたカッターをしっかりと握り締めた麻衣子も一歩下がって身構える。お互いに睨み合ったまま両者とも動き出そうとせず、しばらくの膠着が続いた。実験室を支配する静寂が更に緊張感を高めてくる。

最初に動き出したのは奈々瀬だった。奈々瀬は床を蹴って麻衣子に向かって真っ直ぐ駆け込んだ。懐に潜り込んで取り押さえようと、奈々瀬は麻衣子の細い首に手を伸ばした。

しかし麻衣子は、向かってきた奈々瀬に躊躇なくカッターを突き出してくる。刃先は咄嗟に首をひねった奈々瀬の頬すれすれの空気を切り裂いた。麻衣子は間髪入れずにカッターを振りかぶり横なぎに切り付けてくる。それも奈々瀬は半歩後ろに下がって寸での所で躱(かわ)せた。

悔しそうに舌打ちした麻衣子は強くカッターを握り締める。

一足飛びに距離を詰めてきた麻衣子は奈々瀬の首筋めがけて刃を放った。奈々瀬は大きく身をのけ反らせてその姿勢のまま麻衣子の腹に蹴りを入れ、その反動で床の上に転がるように受け身を取った。麻衣子が腹を押さえて怯んでいる隙に、奈々瀬は一歩二歩後ろに飛び退いていったん麻衣子から距離を取る。

「本気で切り付けてきたね。ちゃんと殺す気じゃん、えらいえらい」
奈々瀬は自信ありげな笑みを浮かべてブラウスのボタンを一つ開けた。陶器のようなシミ一つない胸元が覗く。再び襲いかかろうと、奈々瀬はまた身を低く構えた。
すると麻衣子はポケットから手のひらほどのプラスチック製の箱を取り出した。すると蓋を開けて中身を辺りに撒く。箱から出て来た金色の小さなコインのような金具が床や机の上に散らばった。
今にも飛び掛かろうとしていた奈々瀬だったが、麻衣子が撒いた物を見て本能的に身を硬直させた。
「触らないように気を付けなさい」
麻衣子は空になったプラスチックケースを投げ捨てる。奈々瀬を取り囲むように散らばっている物は画鋲(がびょう)だ。床や机の上に撒かれた無数の画鋲は鋭い針先を上に向けていた。恐らくその尖端にもヤドクガエルの分泌液が塗ってあるのだろう。
「今みたいに転んだりしたら、もうアウトだよ」
靴を履いていると言っても迂闊に踏むのも危険だ。針の長さから考えても、上履きの薄い靴底だと簡単に針が貫通してしまうだろう。これでは下手に動く事が出来ない。奈々瀬は画鋲の群れに包囲されてしまった。
元から外履きのローファー靴に履き替えていた麻衣子は画鋲などお構いなしににじり寄って来る。そのじわじわと確実に距離を詰めてくる様と、眼鏡の奥にある冷徹な瞳はまさに爬虫類を連想させられた。
しかし床に比べると机の上にはそれほど散らばっていない。奈々瀬は足元に気を配りながら、机の上に飛び乗った。普通教室の学習机と違って実験室の机は四人掛けで大きさもあり、しっかりと床に固定されているのでこれなら足場としても信用できる。憎々しげに顔を歪めて舌打ちした麻衣子は、机の上に上手く着地した奈々瀬を睨む。
麻衣子と違って、武器を持っていない奈々瀬に長期戦は不利だ。

早期決着が望ましいと考えた奈々瀬は、実験室内に八つある机を飛び移りながら麻衣子に向かって駆けてゆく。
カッターを構えて迎え撃とうとする麻衣子。奈々瀬は肉食獣さながらの身のこなしで机の上から麻衣子に向かって飛び掛かる。
麻衣子が毒の刃を振るうよりも速く奈々瀬は麻衣子の懐に飛び込んで、そのままの勢いで麻衣子を床に押し倒した。
「ちょっと苦しんでもらうよ」
奈々瀬が麻衣子の首を掴んで頸動脈を締め上げると、麻衣子は苦しそうに喘ぎ声を漏らした。仰向けになりながらも必死に抵抗しようとする麻衣子はカッターを握り直して振りかぶった。しかし奈々瀬がその手首を掴んで押さえた。
「痛っ」
カッターを奪おうと麻衣子の手首を掴んだ奈々瀬の手のひらに鋭い痛みが走った。怪訝に思った奈々瀬が痛みのあった手のひらを見ると、手の真ん中で血の雫がむくむくと膨らんで大きくなっている。
「触っちゃったね、針に」
ふと麻衣子を見ると、彼女は勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。麻衣子の手首、ゴム手袋の下から無数の針が突き出している。それを見た奈々瀬は咄嗟に立ち上がって麻衣子から離れた。
すると麻衣子もゆっくりと立ち上がった。
「接近されて捕まっちゃった時の事を考えて、ゴム手袋の下にも画鋲を仕込んでおいたの。もちろん毒入りのね」
押し倒されて時にずれた眼鏡を直しながら麻衣子は制服の汚れを掃っている。奈々瀬との戦いで疲弊したのか、かなり息も切れていた。
「ヤドクガエルの神経毒は即効性だよ。血液中に少量でも入れば意識が昏倒して、酷い時は…死ぬ」
「即効性？」と手のひらに滲んだ血を見ながら奈々瀬が聞き返す。
「そうよ。眩暈と吐き気を感じて意識を失う。いくら奈々瀬が超人めいた身体能力があったとしても毒には敵わないんだから」

ふうん、と奈々瀬は気のない相槌を打つ。
そのまましばらく二人は向かい合って立っていた。三十秒、六十秒。二人は黙ったままお互いをじっと見ていた。
麻衣子の顔色が変わる。
「な、なんで…」
ヤドクガエルの毒が体内に入ったにもかかわらず、昏倒して倒れるどころか奈々瀬の様子には全く変化がない。奈々瀬は困ったような顔をして鼻で笑った。
「やっぱり効かないみたいだわ…それ」
「そんなバカな。だってヤドクガエルの毒って大人でも死んじゃうような猛毒だよ。その毒を塗った針が、確かに奈々瀬に刺さった…」
なのに、何故。麻衣子は呆然と立ち尽くしている。奈々瀬は手のひらの傷を舐めて、口に入った血を机に備え付けられたシンクに吐き捨てた。
「麻衣子のコバルトヤドクガエルって、ペットショップで買ったんでしょ？」
その声に、麻衣子はぴくりと反応する。
「ヤドクガエルの毒ってカエル自身が作り出すんじゃなくてね、エサとして食べてるアリとか現地に住んでる昆虫に寄生しているダニとかに毒が含まれてるんだよ。だから国内で飼われてるヤドクガエルは無毒なんだよ」
「そんな…」
「確かヤドクガエルに含まれるバトラコトキシンのＬＤ５０値は僅か０．００２ｍｇ／ｋｇだったね。たった一匹のヤドクガエルで大人二十人殺せるぐらいの猛毒だよ。でも麻衣子が飼ってるカエルにはそんな力、ないんだよね」
麻衣子は歯を食い縛ってカッターを床に叩きつけた。
「そんな事よりさ、麻衣子こそ体…大丈夫？」
訝るような顔をした麻衣子がこめかみに手を当てて苦しそうに表情を歪める。顔色も先程までと比べて優れない。

その様子を見た奈々瀬は不敵に笑む。
「ああ、やっと効いてきたよ。私の仕掛けは即効性じゃなかったからね。そろそろ頭がクラクラして気持ち悪くなってきたんじゃないかな」
「いったい、何を…」
「あれだよ」
奈々瀬は準備室の中を指差す。窓辺で一輪の彼岸花が、夕日に照らされて燃えるように赤々と浮かび上がっていた。
「彼岸花に含まれるリコリンってアルカロイドがあってね、体内に入ると眩暈と吐き気を覚えるの。多量摂取すると死んじゃう事もあるみたいだよ」
麻衣子の視点が定まらなくなり、口唇も紫色になりつつあった。
「そんなの、いつの間に…」
「さっき散々サイダー飲んでたじゃん。あの中に入れておいたんだよ、死ぬほどの量は仕掛けてなかったけどね。だいたいゲーム中なのに蓋の空いたペットボトルの飲み物を口にするなんて迂闊過ぎたよ」
とうとう麻衣子はその場に膝をついた。酷い眩暈の所為で足元が定まらなくなり、真っ直ぐ立っている事すら出来なくなったのだろう。
「じゃあ続きを始めよっか、麻衣子。私の過去を知ってる麻衣子はもう放っておけないから、ここでポイズンガールから敗退してもらう」
正確に言えば自殺した事にする、遺書もあるんだしね。奈々瀬は蹲って嘔吐する麻衣子を冷めた目で見下ろしている。
奈々瀬が麻衣子の髪の毛を掴んで強引に顔を上げさせる。涎と、感情とは関係なく零れた涙が彼女の顔を汚していた。
「どうする、どうやって死ぬ？」と奈々瀬は無表情に尋ねた。
苦しそうに息をする麻衣子は虚ろな目で奈々瀬を見据える。麻衣子はカッターを拾い上げ、残された力を振り絞って奈々瀬に切り付

ける。しかし奈々瀬は素早く反応して麻衣子の髪を放して刃を躱した。

その瞬間、麻衣子が立ち上がってドアに向かって駆け出した。麻衣子は体当たりするように一度ドアにもたれかかってから騒々しくドアを開けて廊下に出て行った。廊下から聞こえるリズムの悪い足音がみるみる内に遠ざかってゆく。

「逃げられちゃった、かな」

…まあ、あの体でそう簡単に逃げられる筈はないか。

奈々瀬は苦笑して髪を掻いた。

冷たい生き物が好きだった。

温かい生き物は苦手だった。

犬も猫も人間も、温かい生き物は感情が直に伝わってくるから、重い。触れていると喜びも悲しみも恐怖も何もかも、手のひらを通して自分の体に流れ込んでくる。そうやって他者の思いが自分の中に侵食してくるのが怖かった。

それに比べて冷たい生き物と付き合うのは楽だった。彼らに触れても何の感情も読み取れない。ただ鎧のような鱗のざらざらとした冷たい感触があるだけ。彼らからは何も流れ込んでこない。

例えば水槽の中のトカゲと一時間見詰め合っていても、彼が何を考えているか全く分からない。彼らはいちいち侵入してこない。冷たい生き物はその辺りで慎ましく、礼儀をわきまえている。

だから、冷たい生き物が好きだった。

麻衣子はおぼつかない足取りで必死になって階段を駆け下りた。後ろから迫ってくる恐怖を振り返りながら、転がるように階段を下りる。

一階まで来た所で走るのをやめた。階段を下りてくる音は聞こえない。どうやら奈々瀬は追って来ていないようだ。

温かい生き物の中でも、奈々瀬は特に自分の中に侵入してくる。そしていつも嫉妬と恐怖だけを植え付けていく。今はとにかく奈々

瀬から離れたかった。
息を切らしながら中庭までやって来た麻衣子は、食堂の前の花壇の所で膝をついて屈み込んでしまった。
頭が割れそうに痛い。頭にもう一つ心臓が出来たようにこめかみが激しく脈打つ。足も、もう言う事を聞かずにただがくがくと震えているだけだ。指先の感覚も麻痺してきたのか酷く冷たい。
このまま全身が冷たくなって、自分も冷たい生き物の仲間入りが出来るのかと想像すると少し幸せだった。
ふと羽音がした。顔を上げると、花壇の中を一匹の蜂が飛んでいる。やがてその蜂は麻衣子の目の前の花にとまった。昆虫も冷たい生き物の仲間だ。羽を休める蜂の目をじっと見ていても、何も感じない。
心が安らいだ。
「あれ、麻衣子じゃん」
突然名前を呼ばれてぴくりと身を引き攣らせる麻衣子。頭痛に耐えながら顔を上げると、そこには紗季が立っていた。
「随分手酷くやられたみたいだね。その様子じゃ一人で帰れないんじゃないの？」
紗季も冷たい生き物だ。
爬虫類や魚と同じように、彼女からも感情が流れ込んでこない。紗季は人間の姿をしているものの、本質は冷たい生き物と一緒なのだろう。他の冷たい生き物でいうと彼女は蛇に近い。
紗季は目の前に屈み込んで、じっと観察するように麻衣子の顔を見る。
「ど、どうしたの」
「麻衣子って、けっこう綺麗な顔してるよね。化粧とかすれば良いのに」
何を言っているか全く分からない。自分と同じ言語を操っている筈なのに、全然意味が理解出来ない。やはり紗季は冷たい生き物だ。
「何の話よ…」

「化粧が難しいなら、もっと簡単なお洒落だってあるんだよ。例えば香水をふりかけるだけでも雰囲気が大人になるの」
紗季は懐から透明の小瓶を出して蓋を開ける。すると甘い薔薇の香りが麻衣子の鼻腔をくすぐった。最初は毒物ではないかと疑ったが、小瓶の中身は正真正銘ただの香水のようだ。
「こうやってね、体の脈打つ部位に少しだけ付けるの。するとちょうど良い感じになるからね」
にこにこと微笑む紗季は麻衣子の手首と首筋に香水をふりかけた。麻衣子の周りの空間を華やかな香りが包み込んだ。
「もっと付けたらどうかな。麻衣子だったら似合うかも」
「え、何を…」
胸元や耳の後ろにまで香水をかける紗季。吐き気がするほどの薔薇の香りが頭痛を悪化させ始めた。
「やっぱり麻衣子は似合うね、もっと付けてみよっか」
麻衣子の頭の上から香水がどぼどぼと注がれる。甘い香りの液体が麻衣子の髪を伝ってひたひたと垂れる。やはり紗季が何を考えているのか全く分からない。
すると紗季は顔を近付けて言った。
「奈々瀬に手出したでしょ」
紗季の顔から一瞬にして笑みが消える。その表情を見て麻衣子の背筋が凍りついた。
「私の奈々瀬に勝手に手を出すなよ、死ね」
そして紗季は空になった香水の瓶を脇にあった物置小屋に向かって投げつける。彼女の投げた瓶は、軒にぶら下がった蜂の巣に当たった。
「紗季…」
紗季は微かに口元を緩めた。
蜂の巣から、生き残った蜂達がぞろぞろと溢れ出してくる。無数の羽音が夕暮れの中庭を埋め尽くし始めた。
「攻撃態勢に入ったアシナガバチはね、化粧品とか香水の匂いに反

応して襲いかかってくるの。だから蜂の巣の近くを通る時、お洒落な女の子は気を付けないとね」

攻撃準備の整った蜂の群れが竜巻のように渦を巻きながら飛び回っている。麻衣子は戦慄した。冷たい生き物から感情が読み取れないというのは嘘だった。何故なら今、これほどまでの蜂達の怒りの感情に押し潰されそうになっているのだから。

「蜂の毒はヒスタミンって言ってね、ＬＤ５０値は６ｍｇ／ｋｇだからそれほど危険な毒じゃないの。でも二回刺されたらちょっとヤバいよ。アナフィラキシーショックってアレルギー反応が出て死んじゃうかもしれないから」

じゃあ後はがんばってね、と言い残して紗季は去っていった。

羽音に取り囲まれて身動きの取れない麻衣子はただ唖然としているだけだった。そして、殺気立った蜂の群れは標的を麻衣子に定めて一斉に襲いかかった。

「紗季、助けて！」

麻衣子も立ち上がろうとするが、彼岸花の毒の所為で思うように足が動かない。

怒り狂った蜂の群れはまるで一つの意思で統合された巨大生物のように麻衣子を襲う。這いずるようにして逃げようとしても、みるみるうちに麻衣子の体は蜂達に飲み込まれてゆく。

「降参…もうゲームから降りるから！　お願いだから助けて！」

麻衣子の白い肌に無数の蜂がとまり出した。払っても払っても次から次へと襲い掛かってくる。やがて鼻からも、口からも蜂は侵入してくる。麻衣子は声にならない悲鳴を上げてその場をのた打ち回った。

夕暮れの空の下、麻衣子の悲鳴だけが響き続けた。

●水谷麻衣子　敗退●

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2028y/

ポイズンガール

2012年1月13日02時49分発行